

損傷なきものは、靖遠及來遠にして（著者曰く經遠なるべし。）經遠は尙火災に苦しみ、（著者曰く來遠の誤りなるべし。）廣甲は陸岸の方に行きしを以て見る能はざりしも、斯くの如き形勢なるに因り、第一遊撃隊の先づ撃破すべきは甲鐵艦來遠なりと決斷し、吉野の所在位置を測り、水の深淺を確め、大に速力を増し、一途に來遠を追迫して猛撃せしめ、午後五時過、來遠は旋轉して東方に向ふ。因て我も亦左轉して射撃したるも、彼尙沈没せず、乃ち魚形水雷を以て射沈せしめんと吉野艦長は其用意をなさしめたるに、是より先既に起り居りたる火災は、此時愈々大且熾になり、彼遂に左舷に傾斜するに至れるを以て、其發射を止めしむ。同三十分、彼は遂に左舷に轉倒して沈没せり。（著者曰く來遠は、赤城の砲火の爲に大火災を起せること、著者の實視する所なり。故に前後の狀況により此際沈没したるは、來遠にあらざして經遠なることを察知し得べし。現に來遠は威海衛に於て沈没する迄既存せり。）此際來遠が一隻の端舟ども載備せざりしを確認す。夫より直に針路を大孤山鎮海沖の方に取らしめ、靖遠及經遠に追及せんとするの途中同四十五分本隊旗艦より「本隊に歸れ」との信號あり、因て更に針路を轉じて之に近づきたる時信號にて來遠を撃沈したることを報告す、而して本隊に合せしは日將に没せんとする時なりし。（後略）

右は本隊及第一遊撃隊の戦闘運動の概況なり、而して此戦闘中、西京丸と赤城とは、各自自然に本隊と隔離し、各非常の危険に陥り、一時西京丸は二隻の軍艦と二隻の水雷艇中に陥り、僅に五十米位の所より魚形水雷を放掛けられしも、其水雷は船底を潜りて反対側に出でたるを以て、辛うじて沈没の難を免れ、且船體、烟突、汽管其他に無數の彈丸を蒙りたるも、幸にして破壊の厄を免れ、單獨に大同江の假泊場に歸着することを得たり。

（備考）捕虜、清國水雷艇福龍號管帶都司蔡廷幹の口述によれば、

當日、自分は福龍號に在りて西京丸に近接し、距離五百米より三十米の間に於て、三回水雷を發射せしと雖、遂に效を奏すること能はず。云々、

又當時、西京丸にあり、航海士兼分隊士の職をとりたる現海軍中將佐藤臯藏氏の懷舊談によれば、（前略）西京丸は、敵彈の爲舵機に故障を起して、戰場にマゴ／＼して居る間に、更に多大の損害を受け、僅に修理が成て人力操舵によつて航走して居ります間に、平遠廣丙の二隻と反行戦を交へました、それが僅に千米の距離で反行戦を交へて又々敵の數彈を蒙り、損害を受けてボヤを起しましたので、少い兵員を更に分割して消防に努めましたのであります。さうして居ります中に、敵の水雷艇福龍が前方より襲撃して來ました、當時前方の砲に就いて居る人も少かつたので、樺山軍令部長に附て居た幕僚迄が、大砲に就て之を砲撃したといふ有様でありました。而して大砲を打ちは打ちましたが、命中しないので、敵の水雷艇はドン／＼進んで來て、其距離僅に四五十米の邊迄來て水雷を發射したのです。堤分隊長の如きは、拳銃を打つたといふ程、それ

程、接近して發射したのでありますが、幸にして魚雷は船底を抜けた爲、命中しなかつたのであります。其當時の敵の水雷艇長は、今も支那に於て政界に活動して居る蔡廷幹といふ人でありまして、如何に大砲が中らないからと言つて、唯一隻の水雷艇を以て、砲彈を冒し、白晝攻撃を行つたのでありますから、勇敢な人と申さなければなりません。然るに此人は、翌年二月威海衛の戦の時に同僚の水雷艇長を糾合し、自ら主唱者となつて、全隊擧つて威海衛を逃れ出たのであつたが、遂に沈められて捕虜となつたのであります。砲彈を冒して白晝攻撃して來るといふ程の勇者が、自分の根據地なる威海衛の口の陰山口に碇泊して居る敵を、襲撃せんとする精神もなく、同僚を煽動して逃げ出すといふ程墮落したのであります。昔より退嬰の策を執るものは攻撃精神を失ひ、士氣が墮落して非常なる失態を演じた例が歴史にも澤山あるのであります。

而して、赤城も亦一時敵の重圍に陥り、非常の苦戦を爲し、終に艦長以下十名は斃れ、二十名は負傷し、「メインマスト」は折られ、到底破壊沈没の厄を免るべからずと思惟せしも、一番分隊長及航海長は傷痕に屈せず、巧に艦を運轉して、戦闘場裏より退き、約三四時間の後、再び本隊に復歸せしは感ずるに堪えたりと謂ふべし。

(備考) 赤城のことに關しては、其一砲艦に過ぎざる性質上、殊更に茲に述べる丈けの價值ありとは思へぬのである。併ながら、左の三點は極めて顯著で、後來の訓戒となすべき點少からぬのである。

一、緒戦期より約一時間、敵の左翼諸艦(來遠、致遠、廣甲の三艦)を引き受け、本戦と獨立に交戦し、自ら敵の左翼を牽制したる對勢となれること。

二、艦長の戦死せるは赤城のみなりしこと。

三、小艦の割合に損害多く、死傷全員の四分一に達し戦闘中最も大なる苦しみを感じたること。

幸にも、當時の赤城航海長は、著者自身であつたので、後人の爲、其苦戦の真相を傳ふるに最も適當なりと信ずるので、成るべく簡單に之を述べやうと思ふ。

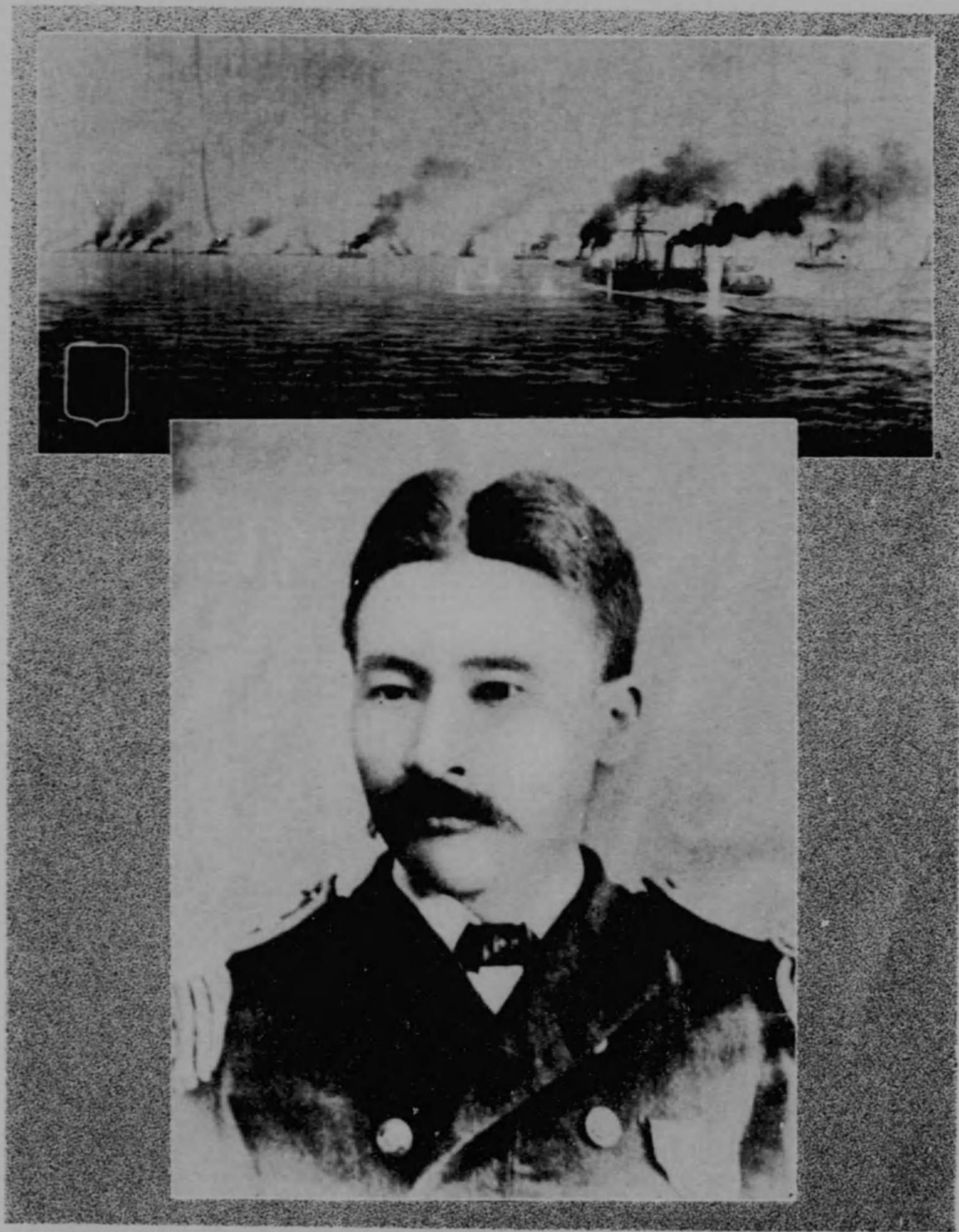
赤城の苦戦。

彼我兩艦隊の距離は、段々と近づいたのであるが、定遠鎮遠及經遠は、赤城から見れば少しづつ、他の諸艦に後れるやうに見えたのであつたが、是蓋し、日本艦隊の運動の結果其右翼を脅威されたので之に應ずる爲の自然の行動であらう。然るに、來遠以下の左翼諸艦は如何なる故か、此運動に倣はず來遠を先頭とし、致遠、廣甲の二艦と共に、赤城の方に驀進し來り、其距離僅に八百米になつたのである。此距離は、赤城橋樓の上で、測距に従事して居る橋口候補生(戸次郎)最後の報告で、此報告の聲を聞いた瞬間に、敵艦に中つて戦死を遂げたのである。

我第一遊撃隊及本隊は、敵の右翼を迂回する如く優速力を利用して進んだのであるが、此運動中、

本隊の殿艦たる扶桑は、其前續艦たる比叡と共に、速力の遅緩なりし爲、第四番艦橋立との距離千五六百米以上にも達し、其右方には敵の主力定遠、鎮遠以下の諸艦が、既に近距離に迫つたので、比叡は進退殆ど谷まり、窮鼠脱兎の勢を以て、定遠と來遠との中間に突進し、敵隊を突貫して他方に
出で、本隊の後を追ふたのであるが、比叡の此行動中、不幸にも敵の巨弾後橋に命中し、大火災を
起し、多數の死傷者を出したのである。此際殿艦扶桑は、敵の左翼諸艦が本隊の後尾を壓し、其左
側に占位する赤城に近づきつゝあるを見、之を放置するに忍びず其艦首を左轉し、一時之を掩護せ
んとしたのであるが、斯くては遠く本隊に後れ到底殿艦としての任務を果し得ぬので不得已あらん
限りの汽力を以て本隊の後を追ひ、幸にして危急の場合を切抜け遂に本隊に追いつくことが出來た
のである。(此一段は扶桑艦長新井有貫大佐の著者に對する直話)此際、赤城は一時扶桑に掩護せら
れ、大に氣強く感じたのであるが今や全然孤立の状態となり、敵の來遠、致遠、廣甲の三艦は、赤
城に薄り、定、鎮、經、靖の四艦は、本隊及第一遊撃隊の攻撃目標となり、濟遠は何時とはなしに
戰場を遠かり、揚威、超勇の二隻は既に火災を起したのである。

此際、清國艦隊が立派に陣形を建て直し、全力を込めて日本艦隊の主力たる本隊に當つたならば、
本隊も相當の苦戦をしたであらう。假令堂々たる陣形をなさぬ迄も、定鎮二遠を始め、來遠、經
遠、致遠、靖遠の六隻(支那艦隊の主力艦)相協力して、日本艦隊に當つたならば、相當花々しき



上 赤城の奮戦 矢崎代治筆 (海軍學校) 下 赤城艦長 海軍少佐 坂元八太郎

戦争を見たであらう。然るに、清艦隊は此時隊形全く破れ、操縦の至難なる陣形を以て、我艦隊の操縦最も自由なる艦隊と對抗したる結果、何の協同動作も行ひ得ず、既に其右翼たる揚威、超勇を失ひ其左翼たる來遠、致遠及廣甲の三艦は、何の見る所ありてか、孤立の小砲艦赤城に向ひ、本戦を捨て、支戦に移り、茲に戦闘は本戦支戦の二つに分れ、我艦隊の主力艦九隻と、清艦隊の主力の一部たる、定、鎮、經、靖の四遠との本戦と、赤城對來遠、致遠及廣甲の三艦の支戦とに分れ、此對勢の儘約一時間を経過したのである。

赤城艦長海軍少佐坂元八郎太氏戦死の實話。

赤城の砲戦を開始したのは、一時九分であつたが、此際は如何に勇敢なる艦長と雖、敵の様子を見て長息せられたのである。吾輩も實は少からず壓迫を感じたのである。敵艦隊中、一隻と雖赤城の相手になりさうな小艦が見當らぬのである。そこで吾輩は、思はず一敵は大分居りますが、赤城の相手はありませんナ。」と言つたのである。艦長は唯「ウーン」と言はれたきりであつたが、聽て「此船が今少し大きいと好いがナ。」と言ふて居られたのであつた。一時二十分頃に、來遠が八百米で致遠、廣甲は其斜後に續き、瞬く間に接近して來たのである。其内にも來遠の如きは赤城の右舷艦首に近接し、此儘にては到底衝突を免れざる對勢となつたのである。此時吾輩は艦長に向ひ、「來遠の艦橋には一人も居なくなりました。」と申したら、艦長が「ドウかしたいが、船が小さくて

仕方がない。」と言はれて感慨殊に深き様子であつた。此時「敵に衝かれる位なら一層こちらから。」と思ふたので、今や將に面舵の命令を下さうとした途端に「是は大失策をやる所であつた。」と悟つたので、直に之を變更して取舵を命じたのであつた。此時如何なる故か、轉舵手より返事がない。吾輩は何事かあつたと思ひ、高聲に再び「取舵」と命じたのであるが、兎に角艦首が左に廻り始めたので「マ、よかつた」と思ふて安心したのであつたが、暫くして、來遠は赤城の右舷艦尾を交つて最早衝突の憂がなくなつて仕舞ふたのである。そこで吾輩は、再び傳聲管を通し、「宜候」と叫んで轉舵手の復唱を待つて居たのであるが、此時戦闘記事の記載を掌つて居た、少主計村田鏗之助は、吾輩の肩を叩きながら、高聲に「艦長がく」と叫ぶので、一寸脇を向いて見ると、艦長が吾輩の足許に倒れて居らるのである。何の苦痛もなく、平生の態度其儘に仰向になつて倒れて居るのである。頭蓋骨は全部破裂し、腦漿が悉く飛び去つて仕舞ふたのである。赤城の艦橋には、小口径速射砲が兩舷に一門づゝあるが、其右舷砲の楯に敵弾が命中して破裂し、其弾片の爲に艦長が戦死せられ、砲員四名の内、二名は同時に戦死し、他の二名は重傷を負ふて其所に倒れたのである。此時は一時二十分頃であつたであらう。

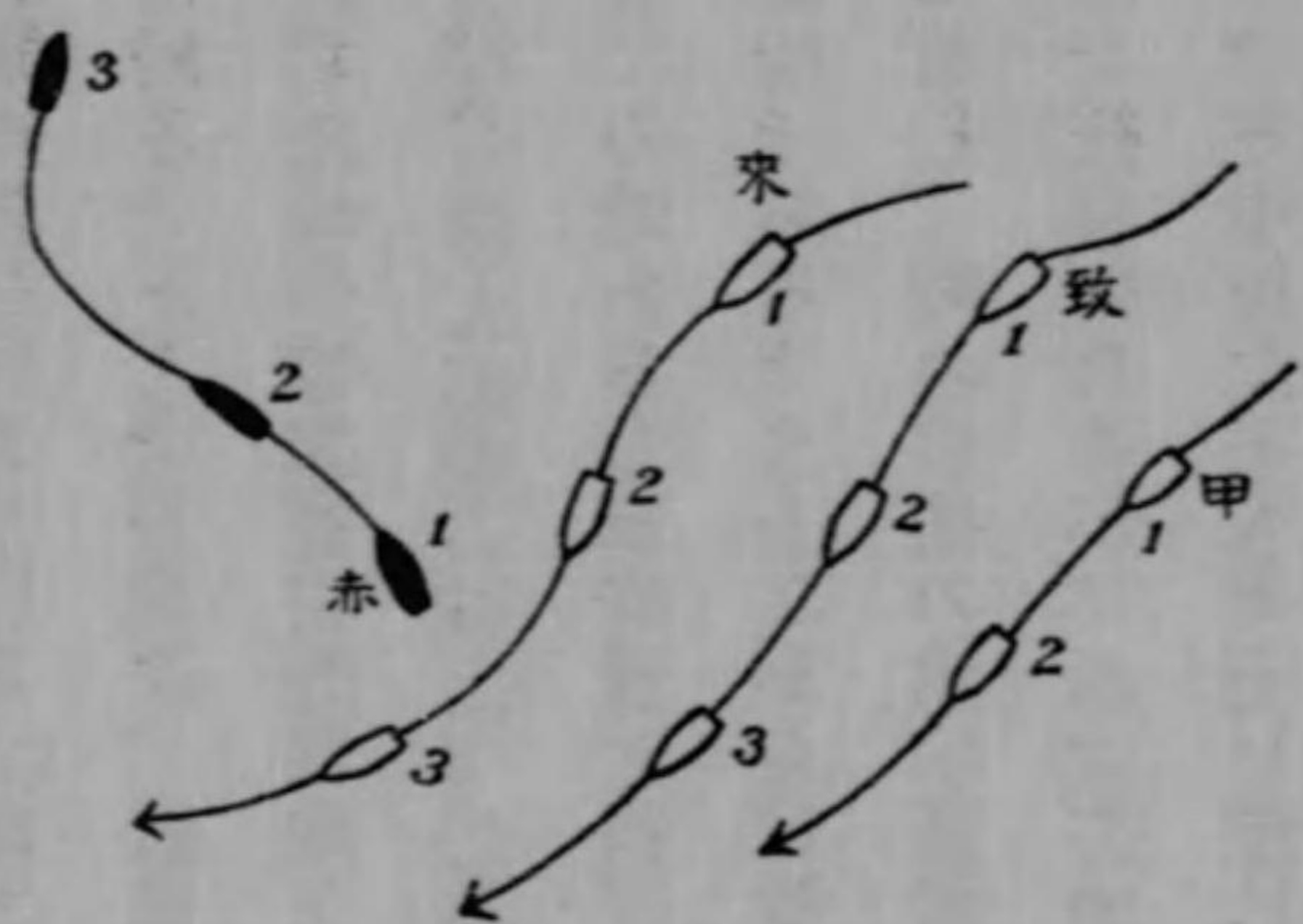
是より先、赤城一番隊長佐々木廣勝は、砲煙の爲艦外を展望し能はざる状態となつたので、艦橋に上り、戦況を視察せんとしたのであるが、敵の弾片右腕に中りて負傷し、其儘艦橋に倒れて居た

のである、そこで吾輩は、佐々木大尉に艦長の戦死を報じ、代つて立つべきを勸告したのであるが、大尉は少しく喪神の氣味で、「航海長頼む」と言ふのである。吾輩は不得已「そんなら私が代ります」と言ふて直に艦長に代つて戦を督することになつたのである。

此時、來遠は既に艦の方に交つたので、直に面舵を命じて、敵より遠ざかるべき運動を開始したのである。若し此際敵艦三隻が、隊形に關せず思ひ思ひに赤城に薄つたなら、赤城は到底免るべき道がなかつたであらうが、幸にも敵の三艦が陣形其儘に進撃して呉れたので、赤城の爲には大なる幸福で、幾度か敵に追附かれても、回頭して其危険を避けることが出来た、而して其度毎に若干敵に遠ざかることが出来たのである。

斯くて、四五十分間も敵の三艦に追ひ廻されて苦戦したのであるが、其内「ア、艦長が」と云ふ聲が、突然聞へたので、思は

ず振り返つて見ると、機關長海軍大機關士平部貞一が艦橋に来て居る。而して「スチームバイブ」を破られたといふて報告するのである、そこで、吾輩は「俺には解らぬから可然やつて呉れたまへ」といふて、機關長を歸したのである。



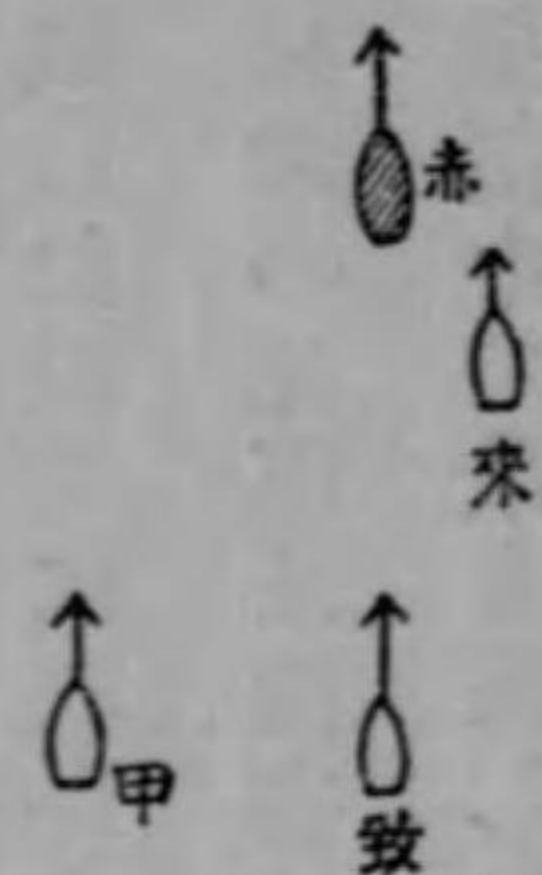
第七圖

茲で赤城乗員の内で、後世に傳ふべき美談を残した一士を紹介する。

戦の最中、航海士兼子昱が、突然と「軍艦旗は皆落ちて仕舞ひました。」といふて吾輩に注意して呉れたので、驚いて見ると、軍艦旗は悉く打落されて一旗もない、大橋は二段三段に打折られ、橋頭の軍艦旗を失ふて居る。加之、斜桁上に掲げてあつた軍艦旗も、いづれへか吹き飛ばされて仕舞ふて居る。そこで吾輩は、航海士に何所でもよいから、澤山軍艦旗をあげるやうに命じたのであるが、此時一等兵曹岩野浪助といふ下士が、突然折れ残りの大橋頭に攀ぢ上り、端舟用の帆柱を結び付け、彈丸雨飛の中に、(實際此時廣甲の檣樓上より機關銃「ガットリング」を我艦に注ぎかこて居たのである。)軍艦旗を掲げたのである。當時の壯烈なる舉動は、吾輩の今日に至るまで忘れ得ざる所である。さりながら、遺憾にも此勇士は、威海衛攻撃の折、鷄鳴島沖にて暴風を犯しての投錨に際し、艦の動搖の爲、錨爪に轢かれて足を切斷し、それが原因となり、旅順港で死亡したのである。此岩野兵曹が、赤城苦戦の最中、下甲板より白煙の迸出するを發見し、或は火災ならんと疑ひ、下甲板に下り火元を探したのであるが、蒸氣の噴出するが如き音を聞きつけ、下甲板の窓を開き、蒸氣の勢よく窓より出つるを見て、汽管の破損なりと直覺し、更に釣床より毛布を取り出し、之を被つて破口に近づき、機關部員の來るに助力を得、相共に毛布を汽管に巻きつけ、應急修理を了し、幸にして蒸氣の漏洩を防ぐことを得たのである。

斯くの如くして、赤城は苦戦に苦戦を累ねつゝあつたのであるが、艦長戦死の後四五十分の間は、敵艦三隻に追撃せられ、敵弾を被むること三十に及び「メインマスト」は折られ、汽管は破られ、速力はずでず、乗員には三十名の死傷者を出したのである。

來達の最近距離三百米



斯くて二時十五分の頃には、來遠既に右舷斜後三百米に達し、同艦の放てる十五拇砲の爲に吾輩は負傷したのである。第二分隊長海軍大尉松岡修藏は、吾輩に代つて指揮を取つたのであるが、吾輩は八九分の後治療を終り、再び艦橋に上つて松岡大尉に代つたのであるが、此際赤城の艦尾砲の一彈來遠に命中し、大火災を起して停止し、敵の二艦も之が救助の爲停止し、次で赤城の追撃をやめて引き返したので、赤城は幸にして九死の地を出て、一生を得、茲に再び引返して本隊と敵艦隊との戰場に向ひ、遂に本隊に復歸することを得たのである。

又、比叡は前記苦戦中、二個の水雷に仕掛けられしも幸に命中せず、然れども盛に射撃を受け損害甚だ多く、士官室に中りし榴彈の如きは、一時に軍醫長、少軍醫、主計長、看護手其他負傷者看護の部員係員、機關砲庫員及豫備舵索員を斃したりと云ふ。且火災を起したるを以て、終に本隊と運動を共にするを得ず、乃ち一先づ大同江大島錨地に歸り、負傷者を運送船に托し、海門と共に再び戦地向ひしと云ふ、而して同艦は明朝歸航せり。

戦闘の結果は、來遠、經遠（或は靖遠）揚威超勇の破壊沈没、（著者曰く來遠以下にあらずして經遠、致遠、揚威、超勇なり。）定遠來遠平遠の大火災にして、其他の諸艦にも大損害を與へたりしは疑を容れざる所なり。

（備考）我本隊が鎮遠以下の諸艦と闘ふに方り、平遠唯一隻、日本艦隊に迫り、其艦首砲（二十六母砲）を以て我艦隊に損害を與へたといふことである。當時本隊諸艦の内には、平遠が狼狽の餘り後退の儘逃走したとさへ傳ふるものもあつたが是は恐らく間違であらう。平遠の二十六母砲は少しも旋回することが出来ぬので、後退の儘砲撃を繼續したのであらう。平遠は、最初日本の主力の所在に向ひて猛進し、舵をとりつゝ艦首砲を發射し、其儘砲撃を續行しつゝ後退したので、決して狼狽したのではなからう。吾輩は寧ろ「敵ながら天晴」と思はざるを得ぬのである。

我艦隊の死傷及損害は、各艦よりの報告に依て詳なり、唯松島は未だ其詳細を知るに由なしと雖、蓋し損傷中の最も甚しきものなり。

目下當地の事業は、各艦に戦闘航海に堪ゆる丈の修理を施すと同時に、石炭を補充するの一事なり。幸元山丸を招きありしが爲、大に便宜を得たり。明夜中には、大抵完結の見込なり。但し比叻、赤城は戦死者負傷者共に多く船體の損傷も輕からず、且最早強て兩艦を止め置くの必要無きを以て、一時之を本邦に歸すの得策なるを感ずるが故に、假修理の後は、一と先長崎に歸航せしめ、相當の修

理及乗員の補充を爲さしめんとす。

終に臨み、特に稟報すべきは、士官下士は言ふを俟たず、水兵火夫其他從僕に至る迄、滿面喜色を帯び、彈丸亂下、鐵板裂け血雨降り、骨摧け肉飛ぶの場合に際するも、神色自若として活潑靜肅に、各其戦闘の職分を盡せし一事なり。而して、此事に關しては、各艦長の言ふ所殆ど符節を合するが如し。眞に愉快に堪えざるなり。此圖は尺度に當りて作れるものにあらざるは言を待たず。敵艦隊と我艦隊との相互の方位、敵艦隊中各艦の位置方向等も決して精密なるものにあらず。戦闘終了の後、目撃者相會して概略斯くの如き形勢にてありしと云ふものを寫したるに過ぎず。然れども、三十隻に近き艦船絶へず運動しつゝあるに際し、場所と時とを異にして目撃せる者、後日相會して其實況を圖に示さんとせしことなれば、其談論の符合せざりしは勿論の事なり、故に決して此圖に重きを置かれず、唯戦況の大勢を想像するの一助と爲さんことを希望す。

（備考）戦闘の初期に於ける第一遊撃隊と本隊との關係に就ては、坪井司令官の報告、其要を得たるもの多きを覺ゆるが故に、同報告の一節を載して、參考に供へやうと思ふ。

坪井司令官報告の一節。

（前略）第一遊撃隊、（著者曰く第一遊撃隊旗艦吉野は敵を右舷三千米に見て射撃を開始したのである。）は敵を猛撃しつゝ通過し、漸次右方に少しづつ指針を轉じ、半月形を爲し、就中彼の右翼二艦

揚威超勇を最も猛烈に射撃したるに、超勇に次で揚威は大火災起り、各之に苦しみて運動する能はざるのみならず、前者は遂に沈没するに至り、後者も亦到底沈没を免れざるものと認めたり。斯く猛烈なる砲戦中、彼我の硝烟相横たはるの場合に於て、我本隊の五番艦比叡は彼の中堅に最も近接し在るを見たり。

戦場に於ける敵艦隊の運動は、凸梯陣を以て單に前進するものにあらずして、屢々針路及方向の變換を行ひ、以て我に向ひ、専ら艦首の砲力に頼みて我を制せんと努めしと雖、之を猛撃して通過せる我本隊を追躡し來れる形勢を見るに、既に確乎たる隊形をなさずして、不規律なる單縱陣の如く又梯陣の如し、次に第一遊撃隊は尙右方に旋回せんと欲したれども、斯くすれば本隊殿艦の砲火と相對するを以て、先づ速力十二海里の信號を爲さしめ、暫く本隊と一直線となるを待たんとしたるに、其之に到るを待てば、敵に對するの距離相隔たらざるを得ず、因て同一時二十分斷然左十六點に旋回し、我本隊を敵と第一遊撃隊との間に見て通過し、以て彼に向ふ。其左方十六點の旋回は此處に進み來れる西京丸を、其儘通過せしめんが爲に、大きく之を爲したり、此時赤城比叡共に甚だ困難なる狀況なり、而して其際我本隊旗艦より第一遊撃隊來れとの信號あり。

（著者曰く黄海々戦後大同江口の假根據地に歸着するや、坪井司令官親しく赤城を訪問せられし際、此場合に當り、赤城及比叡の救援も急に迫れりと雖、此二艦を顧慮するの時にあらずと決斷し。

著者に向ひ右の事情を語られ、彼の際は氣の毒の次第なりしも、終に貴艦を掩護するに力を加ふる事能はざりしは遺憾なり、本隊より「來れ」との信號ありて已むを得ざりしを諒とせられたしと申されたり。直に左方十六點の方向變換をなし、速力十五海里の信號を掲げしめ、以て本隊旗艦に並ぶの運動を採れり、是其先頭に出でんと欲せし爲なり。然るに本隊は、右方に四點許り方面を變じたるを以て、如何に大速力を用ゆるも、之を全うするには時を費さざるべからず。因て已むを得ず、速力十海里の信號を掲げしめ、本隊の後尾に續行するの運動を爲し、漸く其六番艦扶桑に近づきたる際、同一時五十五分比叡より火災の信號あり、而して同艦は東方に向つて航行するを見たり云々。此海戦に與りたる帝國軍艦及清國艦隊は、共に遺憾なく奮闘したること明瞭なるも、其結果は既に述べたる如く、支那艦隊の大敗戦を以て終つたのである。而して此海戦に參與したる帝國及清國艦隊は左の如くである。

帝國軍艦。

艦名	船種	排水量	實馬力	船質	裝	甲	主要兵器	水雷	速力	進水年月	定員
松島	海防艦	四二七八	五四〇〇	鋼	露砲塔司令塔	一三〇〇〇〇	三二吋速射砲 一二吋速射砲 一五吋速射砲 八密ノルテン	四	一六、〇	明治二十三年一月	三五五

赤城	比叡	千代田	秋津洲	高千穂	浪速	抹桑	吉野	橋立	嚴島
砲艦	甲鐵帶コル グエツト	右	右	右	巡洋艦	甲鐵コル グ	巡洋艦	右	右
六二二	二二八四二	二四三九	三一五〇	右同	三七〇九	三七七七	四二一六	右同	右同
九六三	二二八〇〇	五五六七八	八五一六	右同	七六〇四	三六五〇	五九六八	右	右同
鋼	木鐵骨	右同	右同	右同	鋼	鐵	右同	右同	右同
ナ	水線	司令塔	同	同	司令塔	水線 司令塔	司令塔	右	右
シ	一一四	三三	右	右	五一	一一〇 一〇三	一〇三	同	同
機一砲口 二砲口 機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口 機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口 機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口 機一砲口 二砲口	右	機一砲口 二砲口 機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口 機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口 機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口 機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口 機一砲口 二砲口
六四六四六二	三四〇	八八六四	同	同	四二二	二二九四二四	二二八四	一六二	一一一
ナシ	二	三	右同	右同	四	二	五	右同	右同
二〇、二五	一三、二	右同	一九、〇	右同	一八、〇	一三、〇	二二、五	右同	右同
八月	明治二十年六月	明治二十三年六月	明治二十五年七月	明治十八年五月	明治十八年三月	明治十一年四月	明治二十五年十二月	明治二十四年三月	明治二十二年七月
一二六	二八	三〇六	三一四	右同	三五二	三四五	三八五	右同	右同

西京丸。巡洋艦代用、排水量四一〇〇、實馬力 四三〇〇、速力 一五、兵裝 一二密速射砲一、五七密保砲一、四七密保砲二、清國軍艦。

靖遠	濟遠	平遠	經遠	來遠	鎮遠	定遠
右	巡洋艦	甲裝砲艦	右	右	右	甲鐵砲塔艦
右同	二三〇〇	二一〇〇	右同	二九〇〇	右同	七三三五
五五〇〇	二八〇〇	二三〇〇	右同	五〇〇〇	右同	六〇〇〇
右同	右同	右同	右同	右同	右同	鋼
司令塔	司令塔	司令塔	右	司令塔	司令塔	司令塔
二四六	一五〇	八八八	同	二二二	二二二	一一八
機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口	機一砲口 二砲口
四四二	三九六	二二六	二一五	二二二	二二二	八〇二
右同	四	一	右同	四	右同	三
一八、〇	一五、〇	一一、〇	右同	一五、五	右同	一四、五
明治十九年	明治十六年	明治二十一年	右	明治二十年	右	明治十四年
二〇二	二〇四	一四五	右同	二〇二	右同	三三一

致遠	超勇	揚威	廣甲	廣丙	鎮南	鎮中	福龍	第左一號隊	第右二號隊
右	右	右	右	右	砲	右	巡洋水雷艦	水雷艇	右
同	同	同	同	同	艦	同			同
右同	一三五〇 二四〇〇	右同	一二九六 一六〇〇	一〇〇〇 一二〇〇	四四〇 三五〇	右同	一五〇〇	一〇八	一四五 右同
右同	右同	右同	鐵骨 木皮	鐵骨 木皮	鋼	右同	右同	右同	右同
右									
同									
右	機小四一 砲口十斤 砲砲砲	右	機二一五 二五掛砲	機二一五 二五掛砲	機小一尹 一尹砲	右	小口径速射砲	機砲	機砲
同	四二四二	同	四四二	四四二	四二一	同	二	六	二
右同	ナシ	右同	右同	右同	八	右同	二	三	二
右同	一五、〇	右同	一四、七	一七?	一七?	右同	二	二	一
右	明治十四年	右	明治二十年	明治二十年	明治十二年	明治十四年	明治十八年	明治二十年	明治十八年
同	一三五	同	同	同	同	同			
右同	一三五	同							

第右三號隊	右	同	右同	右同	右	同	右同	右	同
-------	---	---	----	----	---	---	----	---	---

黄海々戦に於ける、帝國艦隊の命中彈及死傷左の如し。

松島	嚴島	橋立	扶桑	千代田	比叡
一三	一八	一一	八	三	二
三五	一三	三	二	ナシ	一、九
七八	一八	一〇	一二	ナシ	三七
一一三	三一	一三	一四	ナシ	五六
吉野	浪速	高千穂	秋津洲	赤城	西京丸
八	九	五	四	三〇	一二
死	一	ナシ	一	一	ナシ
負					
傷	一一	二	一〇	一七	一一
死傷小計	一二	二	一三	二八	一一

又清國艦隊に關する、調査によれば左の如し。

定遠	鎮遠	來遠	經遠
一五九	二二〇	二二五	未詳
一七	一三	一七	二二一
三八	二八	一三	
五五	四一	三〇	二二二
靖遠	致遠	揚威	超勇
一一〇	未詳	右	右
二	二四六?	五七	一二五
一六			
一八	二六四?	五七	一二五

平	二四?	一五	廣	甲	右	同	未詳	未詳	未詳
濟	一五	五	一五	廣	丙	一	一	三	三
遠									

黄海々戦の捷報 叡聞に達するや、天皇陛下には御満足に思召され、九月二十日を以て左の 勅語を聯合艦隊司令長官伊東祐亨に賜はつたのであつた。

勅語

朕我聯合艦隊ノ黄海ニ奮戦シ大捷ヲ得タルヲ聞キ其威力已ニ敵海ヲ制壓スルヲ覺ユ深ク將校下士卒ノ勤勞ヲ察シ茲ニ特殊ノ勳功ヲ奏スルヲ嘉ミス

次で皇后宮太夫子爵香川敬三は 皇后陛下の令旨を傳へ

皇后陛下令旨 九月二十一日

今般我海軍黄海ニ於テ大勝ヲ得タル趣 皇后陛下被聞召將校以下奮戦善ク奏功シタルヲ深ク御感賞アラセラレタリ

又海軍次官伊東雋吉は 皇太子殿下の令旨を傳へ

皇太子殿下令旨 九月二十二日

海軍勝利ニ付皇太子殿下ヨリ御人ヲ遣ハサレタル故本日御禮トシテ參殿セシニ拜謁仰付ラレ海軍大勝利ヲ聞キ満足ニ思フトノ御言葉アリ且西京丸ノ狀況ヨリ樺山軍令部長ノ健康ニ關シ御懇篤ナル御

意アリ同部長及艦隊司令長官へ御通知アリタシ(大本營海軍參謀官宛)との難有御沙汰を頂戴したのであつた。

越て二十八日、特に 勅使として侍從武官海軍少佐齋藤實を聯合艦隊に派し、戦勝を慰し、物を賜ひ、且各艦の戦状を問はしめられたので、將卒一同優渥なる 聖恩に感激し、士氣大に振ふたのである。そこで、伊東司令長官は三十日を以て左の奉答文を電報にて奉呈し 聖恩を拜謝したのであつた。

奉答文

曩ニ黄海ニ於ケル戦勝ニ對シ特ニ優渥ナル 勅語ヲ賜ヒ今又遽ニ 勅使ヲ下タシ親シク慰籍セラレ加フルニ 恩賜ヲ忝フス將校下士卒恐懼感泣シ益々粉骨碎身以テ聖恩ニ報ヒ奉ラントス、臣祐亨謹テ奏ス。

同日、坪井司令官よりも、左の奉答文を捧げたのであつた。

今般特ニ 勅使ヲ下タシ賜ヒ御慰問ヲ忝フス奮勵以テ 聖恩ノ萬一ニ報ヒ奉ランコトヲ期ス 臣航三 誠惶誠恐謹テ奏ス。

黄海々戦に關する史談は、之にて結末を告げたのであるが、其大體より觀察し、何が故に清國艦隊の大敗に終つたかといふに、其重要な點と雖、決して一二にして足らざるは勿論であるが、強て其要點と思考すべき三四點を掲ぐれば、概ね左の如くであらうと信ずるのである。

一、其主力を中央にし、其兩翼に大なる弱點を有する編制によつたので、瞬く間に其右翼の兩艦を失ひたること。

二、凡そ海戦に於ては、其隊形の維持に困難するは明白なことである。従つて隊形の變換に不適當なる陣形は、机上の研究に於て、如何に有利なるも、之を實際に用ゆること能はざるは是亦明白である。然るに清國艦隊は、此注意を缺いたのである。何に致せ、柔軟性が肝要で、柔軟性に富まぬ陣形は、海戦に不適當である。夫と同時に、凝集力の足らざる艦隊の編制をとつたのも、確に敗因の重なる點であらう。

三、海戦上最も必要なる緒戦期に當り、約一時間、全體の勝敗に何等の關係もなき、小砲艦赤城に對し、殆ど左翼諸艦の過半とも云ふべき來遠、致遠、廣甲の三隻を以て追撃に従事したのは、大なる過失である。若し彼等が、日本艦隊の主力を撃破せんとするに努力したならば、彼の三隻は赤城に對し、五十分以上も懸り合ふなどは思も寄らぬことである。夫が爲、日本艦隊の主力と第一遊撃隊とが、絶對的優勢に而も有利なる對勢に於て、働くことが出來たので、敵は戦の初期に於て、右翼の二隻を失ひ、他の三隻は赤城に掛り、他の一隻（濟遠）は逸早くも戰場を去り、眞實に日本艦隊と戦ふべき殘艦は四隻に過ぎざる結果となり、日本艦隊は之に對し全力を以て對抗することになつたのは確に敗因中の敗因であらねばならぬ。

四、日本海軍が、萬事快速を主としたのも、確に勝利を得たる原因の一である。快速なる速力と、迅速なる射撃を以て、之に加ふるに、敏活なる艦隊の運動を以てするの結果は、日本艦隊其物の眞價を十分に發揮し得たのである。清國艦隊は、立派なる装甲（防禦力）ある主力艦を有するも、日本艦隊の速射は、清國艦隊をして装甲の效力を發揮しつゝ、力ある攻撃を加ふることを不可能ならしめたのである。發射命中の機會多きも確に勝利の一因であつた。我艦隊の速射と照準の正確とは装甲の強厚なるよりも、更に有效なる防禦力として、我艦隊を保護したのである。殊に著明なるは、日本艦隊の單縱陣が、敵の前面を航過し得たるは、實に速力の大なりし爲である。若しも、日本艦隊の速力が、清國艦隊と同一なるか、或は僅に彼に優る位の程度であつたならば、運動の實施に多大の困難を生じ、我艦隊は敵の所期の如く、兩斷せられて大なる苦戦に陥つたであらうが、實際に於て、彼の如く美しき（比叡のことありしにもせよ）行動を取り得たのは、實に速力の優越なりしが爲である。強ち、今日以後も亦然りといふにはあらざるも、日清及日露兩戦争時代に於ては、確に優速其物は殆ど勝敗を左右する第一條件とも稱すべきものであつたのである。

因に、清國艦隊が黃海に戦ひ全滅せざりしは、日本艦隊が、清國艦隊敗戦後の目的地を威海衛なりと誤想したのも大なる原因である、若し彼の際、速力を利用し、彼の前路に出で、旅順大

連沖に彼等を待ち受けたならば、頗る興味ある事實を残したであらう。併しこれは時刻の關係上言ふべくして行ふべからざることもあらう。何となれば彼等の旅順着は翌朝をまたぬからである。

外人の黄海々戦評は、誤報を基礎とした爲でもあらうが、殆ど一として見るに足るべきものがない。清國艦隊が↑V字陣形をとり、日本艦隊は↑二列縦陣をとつたとすら傳ふるものもあつたのであるが、事實上清國艦隊は△形日本艦隊は↑形をとつたのである。而も此誤報を信じ、眞率に之を論ずるが如きは、其實眞率に海戦其物を研究せざるの致す所ではなからうか。兎にも角にも、外人評は英佛獨米等各其特色を有せぬでもないが、其殆ど全部は、無價値である。従つて此場合に之を引用することを遠慮するのは、蓋し當然であらう。

黄海々戦は、右の如くして、我艦隊の勝利を以て終つたのであるが、海戦當日の夕刻に當り、戦争を止めて戦場を切り上げたのは、敵の水雷艇に就いて警戒を加ふるの必要を感じたからで、要するに九月十七日の夕刻には、兩艦隊間に於ける戦争の行爲がなくなつたのである。斯くの如くして黄海々戦は終つたのであるが、其後陸軍の進撃が始まり、愈々遼東半島を取る爲に、上陸地點を選定する事となり、兎にも角にも、花園口に上陸するが宜からうといふことになつたのである。さりながら、我艦隊は黄海々戦に於て大勝利を得たりとは謂へ、敵の艦隊が今尙嚴存して居るので、海上其物を、全然自

己の掌中に收め得たとはいへぬ。従つて海軍當局の痛心も一方ならぬ有様であつたのである。又假令大活動は出來ずとも、敵の艦隊が存在する以上は、聯合艦隊と雖油断は出來ぬ。従つて陸軍の上陸に關しては多大の注意を要する状況であつた。況して、英艦「エドガー」が上陸地點方面に現はれて、我艦隊に敬意を拂ふこともあつたので、彌以て、大なる注意を以て、敵を監視するの必要があつたのである。されど大勝利の威光は敵艦隊の活動を許さず、事實上海上其物は我艦隊の掌握に歸したのである。従つて花園口の上陸を終り、十一月六日には大連を取り、同二十一日には旅順を取つたのであるが、其間には殆ど海戦として説明すべき何物もなかつたのである。そこで、今度は敵の艦隊を根こそぎ打ち潰して仕舞ふには、威海衛を取らねばならぬ段取となり、陸軍を威海衛方面に上陸せしめ、海陸協同して同軍港を攻略することになつたのである。威海衛に對する上陸は事實上面白き敵前上陸で、昔から、敵前上陸其物は、極めて困難なこととしてあるのであるが、榮城灣（山東高角の南方）の上陸に際しては、敵兵若干四五門の砲を備へて、上陸防止の任に當つたのである、然るに我軍は、毫も是等の消息を知らず、何等の防備なきものと速断してかゝつたのに、敵は不意に發砲して之を防いだのである。そこで我軍の陸戦隊は之に對して應戦を試むると同時に、何の猶豫もなく上陸を決行したので、敵は一支も支へずに退却し、日ならずして威海衛の直接攻撃が、開始されたのである。威海衛攻撃の間にも種々の注意すべき點あるは勿論であるが、水雷艇隊の活動の如きは、殊に注意を

要するのである。即ち此場合に於て、敵艦隊が港内にありて出動せざる以上、我艦隊は手を出すべき方法がない、強て敵艦隊の殲滅を志さんとすれば、砲臺を攻陥するの手段が必要である。陸上砲臺にして幸に占領し得たりとするも、同島及劉公島の砲臺は如何ともすることが出来ぬ。併ながら、幸にも趙北嘴砲臺(威海衛の東口陸砲臺)を占領し、之を逆用して砲撃を開始し、艦隊よりも亦砲戦を開始して、同島砲臺を攻撃し得たので、其結果、同島砲臺に大爆発を起し、敵手に残存するものは彌、劉公島と艦隊其物とのみになつたのである。加之、鎮遠の坐礁に伴ひ、北洋艦隊の第一人者たる、總兵林泰曾は自殺し、艦隊自身も我水雷艇隊の攻撃を受け、或は大破し、或は沈没し、北洋艦隊附屬の水雷艇隊は、曩に黄海々戦の際、西京丸を襲撃して勇名を博せる蔡廷幹首謀として脱走を企て、失敗し、我海軍の爲に殲滅せられたので、彌、後來の見込立たず、丁汝昌提督は茲に百計盡きて自盡し、北洋艦隊全部我艦隊に降服したのである。此際に於ける丁提督の末路は實に悲慘の極であつた。丁提督は、中央政府から凡ゆる攻撃を受け、李鴻章からは譴責の手紙を貰ひ、御叱りの勅書をさへ賜はつたのである。元來、清國艦隊の敗績は、如何に考慮するも、丁汝昌其人の懈怠でも、失策でもない、提督自身は一生懸命にやつて居つたのである。それにも拘らず、中央からは、本職を免ぜられ、而も職務は其儘にやれと云ふ變態的辭令を受け、勅記は褫奪されて、世間的名譽の總てを喪ひ。到底主將としての威令が行はるべき筈がない。況して、部下に屬する外人等の煽動もあり、一人と雖君國

に報ぜんとするの氣概を表するものなく、艦隊は雷撃せられ、部下の水雷艇は脱走し、到底回復の見込なく、遂に毒を仰いで死し、定遠の艦長總兵劉步蟾も亦毒を仰ぎ、威海衛は全部我國のものとなつたのである。

威海衛攻陥の仕末は事海戦に屬せざるを以て、本書に於ては之を略するも、其大體の事實は事の重大なるに鑑み、之を掲ぐることに致したのである。(詳細の事を知らんと欲せば、軍令部編纂の二十七八年海戦史下巻を看らるべし。)

前にも述べたる如く、威海衛攻撃の際にも、種々注意すべき點が多いのであるが、其最も顯著なるは水雷艇の夜襲である。艦隊の砲臺攻撃の如きは、茲に取り立て、記載するの必要もない位である。兎にも角にも、彼の場合、水雷艇隊を用うるより他に敵艦隊を破るべき手段がなかつたのであるが、港口には、堅固なる防材がある、布設水雷もある、砲臺の脅威も決して軽くはない、而も此場合に水雷攻撃を加へんが爲には、防材の切れ目を發見し、之に隨つて灣内に闖入する外に、善惡ともに策の施すべきものがないのである。此際當時の六號艇長海軍大尉鈴木貫太郎は、自ら進んで防材破壊の任に當つたのであるが、一方ならぬ困難の後、防材破壊の任務を果し、首尾よく本隊に歸著し、詳細なる報告をなしたのである。そこで我水雷艇隊(第二第三艇隊)は、二月五日午前二時を以て、其假泊地たる陰山口を發し、六號艇嚮導として灣内に入り、戦闘艦定遠を雷撃し、翌六日朝更に第一艇隊は來

遠外一二の小艦を撃沈したのである。加之三月九日に至り、靖遠は鹿角嘴占領砲臺の爲に撃沈せられ、北洋艦隊は到底全滅の外なき運命となり。(此際部下には反亂の兆顯はれたりと云ふ。)此上の抵抗は全然不可能と信ぜられたので、伊東司令長官は丁汝昌に一書を與へて降服の勸誘を試み、且美酒を贈つて心情を慰めたが丁汝昌は衷心之を感謝したるにもせよ、敵よりの贈品を受くるは義にあらず自分の心を曲げて辭退するといふ、悲壯な返事を寄來したといふ具合であつたが、遺憾にも部下の外人及將校下士卒は降服を以て大なる耻辱とせず、今降參すれば助かるのに、何故降參せぬか、妻子の戮辱せらるゝを看過する譯には行かぬ。」と論争して、脅迫する如き情勢となり、定遠艦長も憤慨の余り自殺したので、丁汝昌も不得已して降服に決すると同時に自殺したのである。終に臨み、當時丁汝昌の中央府より受けたる文書を載し、敗將の悲惨なる境遇を想見しやうと思ふ。

曩に旅順の警を告ぐるや、海軍功を奏すること能はざるに由り、提督丁汝昌の尙書銜を免し、頂戴(勳記)を褫き、以て薄懲を示したるに、今や旅順已に失し、該提督救援を力めず、其咎最も重し、即革職を命し、仍ほ暫く本職に留任して各海口を嚴防し、以て功を立て罪を購はしむ。

何と云ふ悲惨な、而も酷薄極まる事であらうか、斯くの如くんば如何にして、部下を統御することが出来やうか。

總理衙門本日旨を奉す、損傷を受くる所の各艦は、夙く既に陸續修理を了し、唯大艦二隻は、本月

中旬にあらざれば竣工し難しと、實に遲緩に失するものに似たり。宜しく工を加へて、日夜督責し、速に修齊せしめ、敵艦の闖入するを見れば、頭を迎へて截撃し、若し沿岸に進攻するが如きあらば、砲臺と前後力を合せて砲撃し、夾功の效を收むべし、曠延期を失し、咎戾を干す勿れ、此を欽めよ。



誠に無慈悲極まることではなからうか。而も斯くの如き冷酷なる所作こそは、實に敗戦の結果ともなり、亦實に敗戦の原因でもあらう。

(備考) 此際特に記載すべき一美談がある。六號水雷艇の鎮遠に對し魚雷攻撃を行はんとするに方り、一發は氷に閉ぢられ半ばにして出です。他の一發は港外の激浪の爲發射管を逸して之を

海中に失ひ、僅に二發を備ふるに過ぎざる同艇は、敵を攻撃するの武器を失ひ終つたのである。そこで、防材破壊の時、沈着に爆薬を取扱つた上等兵曹上崎辰二郎は、深く此失體を愧ぢ、責任觀念

に責められ、威海衛襲撃後、一ヶ月にして李鴻章が、支那全權大使として講和の爲渡日するを聞き、最早自己の責任を果すべき好機なきを知り、遂に割腹して死んだのである。餘事はさて置き此責任觀の旺盛なる、之を千歳に傳へて語るべき美談ではなからうか。

斯くの如くして、威海衛に對する作戰も終りを告げたのであるが、茲に日清戦役の結果として、澎湖島の攻略に従事し、二十八年三月二十五日を以て、同列島全部の鎮定を了し、茲に光輝ある日清戦争を終り、馬關の條約に於て、萬事の決定を得たのである。

第十章 日清戦争後に於ける三國干渉の概況

三國干渉の事は、最早國民全般（殊に青少年）に忘れられて仕舞ふたやうである。如何に健忘性の國民とは謂へ、餘りに甚しいではないか。元寇の亂といへば、殆ど誰一人として知らぬものなき有様で、六百五十年前の事實も、何となく眼のあたりに映ずる如く感ずるのであるが、僅に三十幾回の星霜を経たる三國干渉の事實の、全然國民に忘れられて仕舞ふたのは、如何なる原因によるであらうか。皆是、學校教育に於て之を重視せざるの結果であらう。今日の青年にして、當時の事情を説明し得るもの極めて尠きは、寔に慨嘆の至りである。吾輩は、聊か思ふ所あり、國民の刺戟の爲、海戦史談中に一節を設け、日露戦争の由來を明にすると同時に、當時の状況を略述しやうと思ふのであ

る。臥薪嘗膽十年の心理状態其儘を、今日に傳ふること至て困難なるにもせよ、其概説を掲げて之を永遠に傳へたならば、我日本帝國は、盡未來長へに榮光赫々たる状態、其儘を保維するであらう。三國干渉の遠因。

日露戦争開始の頃には、露國の鐵道は既に旅順大連の岸まで到達したのであるが、これは、露國幾百年の懸案たる不凍港獲得問題を解決したもので、明治三十一年の關東租借條約の結果である。此鐵道即ち南滿鐵道は「ハルビン」にて東清鐵道に連絡して居るのであるが、此東清鐵道は、明治三十年の起工で、明治二十九年の北滿鐵道布設權條約の結果である。此權利は、日本に對する露國の公債引受の謝禮で、つまり三國干渉で遼東半島を日本より還附せしめた報酬である。（露國一億留公債の件をいふのである。）つまり、第一には、其以前に獲得した黒龍江鐵道の利用を完からしめん爲、不凍港を得、第二には浦鹽を大連に移さんが爲、黒龍江鐵道——三國干渉——東清鐵道——南滿鐵道といふ風にして、日露戦争の準備となり、日露戦争大敗の結果また再び黒龍江鐵道時代に逆轉したといふ次第である。露國の不凍港問題は、對東洋問題の基礎であるが、清の康熙帝の爲に挫折した（清の陸軍二萬、黒龍江の北「アルバジン」城を抜き、尋で「ネルチンスク」條約時代となり、一度露國對東問題が支那の爲に敗れた歴史を有する。）歴史を繰返した様なもので、「ペートル」大帝は、此屈辱に憤慨して、「露國は黒龍江口太平洋に面する地に都市を建設するの必要がある」と叫んで終に「ニコライエ

フ」の都市が出来たのであるが、黒龍江には「ペートル」の望んだ不凍港がなかつたのである。櫛に乗じ積雪上を滑走して樺太に渡り得べき黒龍江口は、不凍港ではない。加之、浦鹽もまた同様である。従つて「ペートル」の遺業を完成するには、遼東半島を獲得する外はない、併ながら、假令遼東を獲得しても、決して長閑な太平洋岸に達したとは謂へない。どうしても朝鮮に手を伸ばさねばならぬのである。

露國の野心は、右の事實を實行する爲の行動として顯はれたのである。兎にも角にも、日本の勢力が關東半島に踏るのは、露國の東方政策として絶対に認め得ざる所であつたのである。

然るに露國の西隣には、惡辣味に於て「ペートル」以上の「カイゼル」があつたのである。三國干渉は、實に露國に恩を賣つて（恩を賣ると迄は行かぬ迄も）其好感を贏得せんが爲の野心であつたとも言はれて居る。而も、其目的とする所は、獨逸の東方政策を全うせんが爲の豫行準備で、此點に關しては、兩國互に耳語を打交はしつゝあつたのである。そこで佛國は自ら迷惑の立場に陥り畢竟無賴漢に金品を用立てたる因縁に搦まれて、其金品の爲に引摺られ、其無賴漢の利益の爲に働いたので、要するに、其仇敵たる獨逸と、己と腐れ縁を結べる露國との提携を恐れ、嫌々ながら露國に引摺られたといふ具合である。

兎にも角にも露獨間の耳打ちが、宣教師二名の殺害事件の利用となり。膠州灣の租借となつたので、

凡そ外交の裏面には、極めて深厚なる、而も長年月に亘る野心が、自ら燃えて居るのである。三國干渉の問題を、唯單に、日本の大陸に對する勢力の擴張を阻止せんが爲のみと見るも、強ち不當ではなからうが、其裏面の關係は實に右始末の如く醜穢極まるものであつたのである。

又、他の一方に於て、當時朝鮮は、東洋の「バルガン」半島なりと唱へられたのであるが、三國干渉以前は、朝鮮に直接の關係を有するものは、日清兩國のみであつた。其事實としては、日清戦争以前に於ても、露國が既に朝鮮に對し或る野心を包藏し居たのである。吾等の如きものすら、明治二十三年の頃、日清戦争の必ず來るべきを警告せんが爲、帝國々防私説と題し對清軍備の國防を論じた、際にも比較的精密に露國の野心を抉剔して、朝鮮海峽を清露のいづれにも渡してはならぬと論じた位であるが、要するに、直接の關係を有するものは、日清兩國に止まり、此兩國の間には、極めて敏感な關係を有して居たのである。

併し問題は簡單である。日本は、自衛の爲朝鮮を一個の獨立國と認め、清韓兩國の間に存在する、而も長年月の歴史を有する、曖昧なる宗屬關係を斷絶せしめやうと努め、清國は之に反し、其間を詮索すれば、如何にも不満足の至りではあるが、兎にも角にも、朝鮮は清國の屬邦なりとの認定を、世界に求めんが爲に努めたのである。況して、殆ど二千年を通して、日本と支那との間にあり、事大主義の御蔭を以て、曲りなりにも其生命を保護し來つた朝鮮が、事大主義の命ずるまゝに、——當時如何

なる國も、日支兩國を天秤に懸けやうとすらせない状況にある。——日本に對して事大主義を發揮するなどは、事實上無理なことである。況して明治十七年の變後、朝鮮に對する日本の勢力衰退に歸し、二十三年の憲法發布以來、政府と議會との衝突絶ゆることなき事實を見ては、到底日本に信賴する意見になれないのは、無理ならぬことである。支那としては、猶更である、日本は到底兵力を以て朝鮮問題を争ふが如き柄ではないと信じたのも無理からぬことであつたのである。

されど、朝鮮の宗屬問題は、實に日清間の大問題であつて、何れかと謂へば、他の列強は、支那の言に耳を傾け、朝鮮は支那の屬邦の如くに考へて居たので、日本が朝鮮政府に對し貴國は獨立國なりと明瞭に宣言しても、本氣になつて之を受け容れぬ程度であつた。然るに、日清戦争の結果は、彼等には意外であつた。殆ど勝負にもならぬ位に、清國の大敗となつたのである。露國が「これでは大變」と思ふたも、無理のないことである。其所にまた、獨逸と稱する教唆者あり、如何にしても、自分に隨從して進退するの必要ある佛國を有する露國として、三國干涉の先鋒となり、我國に向はんと決心したのは、實際尤な話である。

實際を云へば、三國干涉は、日清戦争の後に萌芽したといふ譯ではない、日清戦争以前清國——寧ろ李鴻章といふが適當であらう——に左の如きことがあつたのである。露國の駐清公使「カシニー」伯爵が、本國の允許を得て歸國の途次、遠謀深慮あり、今後の打合せを要すと見ての歸國なりや、とも考

へらるゝのである。(天津に立寄つた際、李鴻章は其袖を控えて、朝鮮問題の調停を求めたといふことである。「カシニー」は之を幸とし、足を駐めて李鴻章と相談し、其結果駐日公使「ヒトロボー」より陸奥外相に對する勸告となつたのである。「若し、清國が撤兵するなら、日本も亦撤兵するであらうか」といふが如く、誘ひを入れたのである。外相は是は異議のない事である、支那が誠意を以て撤兵するなら、何も問題はない、併し今は兩國の兵、正に相對峙して敵愾心の強盛なる場面に進入したので雙方とも何等の猜疑も誤解もなくして局面を治むることは困難であらう。元來、支那の筆法は、陰險である、容易に彼の言明を信ずる譯には行かぬ、併し若し清國が朝鮮の内政改革を完結する迄、日清兩國相共に擔任することに同意するか、又清國は何等の理由に拘らず、朝鮮の改革に關し、日本と協同することを欲せざれば、日本が獨力に之を實行するに當り、直接にも間接にも、妨害を加ふることが無いかの二點に就て、保證を得たならば、而して尙更に、此方針を基礎とし、軍隊の撤去を實施するならば、日本も決して撤兵を辭するものではない。日本は朝鮮の獨立と平和とを確立せしめんとする外、他の希望がないといふことを斷言する。而して又、清國は如何なる態度をとるも、日本帝國は決して攻勢的に戦を挑むことのないといふことを併せて斷言するといふたさうである。然るに其後露國から公文を以て、

朝鮮政府は、同國の内亂既に鎮定したる旨、公然同國駐在の各國使臣に告げ、又日清兩國の兵を均

しく撤去せしむる事に付、該使臣等の援助を求めたり。因て露國政府は、日本政府に向ひ、朝鮮の請求を容れられんことを勧告す。若日本政府が、清國政府と同時に、其軍隊を撤去するを拒まるゝに於ては、日本政府は自ら重大なる責に任ぜらるべきを忠告す。

是は、如何にも恐ろしい脅迫である。陸奥外相も、一存にては決し難いので、伊藤首相に話した所、首相は、今更露國に何といはれたとて、今日の有様どうして朝鮮から兵隊を引上げることが出来ようかと斷言したさうで、外相もこゝに決心の臍を堅め、終にあの時の様な態度をとつたと傳へられて居るのである。そこで、外相は聖裁を仰ぎ、斷然露國の忠告を斥くるに決し、其親切に謝意を表すると同時に、體よく拒絶したのであるが、露國もさるもので、此際の返事に、

露國政府は、其隣國たる故を以て、朝鮮の事變は之を傍觀する能はず。

變亂再發の虞無きに至らば、速に軍隊を撤去すべし、との意見を認めたるにより大に満足せり。の二點を明言し、將來容喙の地歩を豫占するの狡猾なる態度に出でたのである。

是と前後して、英國も亦仲裁したのであるが、是は支那に對する好意と、支那の必勝を信じての仲裁であるが、「オコンノール」駐清公使は、「カシニー」の關係を察し、總理衙門に向ひ、日清兩國の間に、速に平和協議を遂げて、最後の衝突を避けるが得策であるといふたさうであるが、清國政府は、露國の忠告の成功に信頼して居るので、耳を藉さんだといふことである。但、茲に注意するの必要

あるは總理衙門と李鴻章とは、決して好感を有する間柄ではなかつたといふことである。従つて、英國の非戰論に傾聽するの風潮あるやに見えたので、日本の意思を確めんが爲照會をよこしたのであつたが、「オコンノール」は、清國が小村代理公使に向ひ、清國政府は、日本が朝鮮から撤兵した後でなければ、何等の提議にても御免を蒙むるといふた言明を聞いたので、調停の態度を捨て、仕舞ふたのである。併し「オコンノール」も、これで指を噬へて引込むやうな人ではない。露國の勸告の失敗するや、否や、英國の仲裁を請ふのが得策であると、清國政府に忠告すると同時に、日本に向ひ清國は小村公使から「清國政府が徒らに事を好むものにあらずして何ぞや、時局既に茲に至る、將來不測の變を生ずることあるも、日本政府は其責に任ぜず」と申込んだことに就ては、清國側は大に憤慨して居るが、日本さへ平和の解決を望むなら、清國は必ずしも再び談判を開く望がないでもない、日本政府の決心を聞きたいと申出でたのであつたが、此時は既にもう如何にも致し方のなき程切迫して居たので、日本も不得已、

是迄のことは、皆清國の陰險と因循との爲、萬端の交渉を阻碍したのである。日本の提議に對し、五日間を限り諾否の應答をなさざる限り、日本は再び彼と應接することは出来ぬ。若し清國が朝鮮に増兵するが如きことあらば、之を脅嚇手段と認める、清國政府が此意味を承知の上で商議しようとするならば、日本でも商議に應じませう。

といふ意味の返答をしたのであつた。

大體の叙事が餘り長くなるから、日清戦争以前の仲裁に就ては、最早述べないが、此際米國の仲裁は、激烈を極めたのである。

當時、米國は、未だ東洋の利害の重大ならざる頃であつたので、輕々しく撤兵するのは、却つて東洋の平和を保持する所以でないと論ずる日本の言を是とし、最も恬淡に仲裁を止めたのである。

朝鮮の變亂既に鎮定したるに拘らず、日本政府が、清國と均しく其軍隊を該國から撤退するを拒み、且該國の内政に對し、急激なる改革をなさんとするは、米國政府の深く遺憾とする所なり。米國政府は、日本及朝鮮兩國に對し篤く友誼を抱くが故に、日本政府が朝鮮の獨立、並主權を重ぜられんことを希望す。若し日本にして、無名の師を興し、微弱にして防禦に堪えざる隣國を、兵火の修羅場たらしむるに至らば、北米合衆國の大統領は、痛く惋惜すべし。

以上の事實により推察すれば、日清兩國媾和の際に、何事もなくして終るべしとは考へられぬのである。況して東洋に利害を有すること大なる強國としては東洋の利權を日本の自由に委して顧みざるが如きことは、恐らくは堪え得る所でなかつたであらう。

何に致せ、此際歐米列強としては、其自ら期する處に深淺の差こそあれ、東洋の時局に對して常に注意を怠らず、機會の乗ずべきものあれば、極力之を捕捉せんとするに努むるは疑なきことである。

加之、清國は從來の筆法により、例の氣質を顯はし、見す／＼外國の爲に利用せられて、自繩自縛の究地に陥るをも察せず。眼前の苦しさを免れたき一心に迷はされ、歐洲各強國に仲裁を頼み廻つたのである。併ながら、相互に争鬭を試みたる場合相互の間に結末を附くること能はずして、第三者に依托するが如きは、耻づべき事である。假令一時は、凌ぎ得るとしても、終には國命を危くするに至るは當然である。此點に對しては常に注意し置くべき必要ありと信ずるのである。然るに、清國は之を察せず、外國の力を藉りて當面の敵に當らんとしたのである。而して、清國の依頼に應じて、第一に立つたのは英國で、他の諸國にも相談を持ちかけたのであるが、他の諸國も直接に清國の嘆願を受けたるにも關せず。英國の勧誘に對しては、比較的冷淡であつたのである（以太利は英國との關係上、英國提出の條件に同意した形跡がある。）換言すれば、歐洲各國が、胸裡に一物を藏しながら、清國の哀訴を拒絶し、英國の提案たる聯合仲裁に同意しなかつたのは、要するに、時機未だ可ならずと考へた爲であつた。斯くの如くして英國の仲裁は失敗したのであるが、各國共、日本が全勝に乗じて清國を極端迄苦しめて土崩瓦解に至らしむることは望まぬのである。第一に、東洋に一大強國を生ぜしむるは彼等の望まぬ所である。強ち拔懸の心でもあるまいが、露國政府は日露兩國互に意見を交換して、他の強國の干渉を防がうではないかなど、自分獨りの拔懸を企てやうとしたのは事實である。併し、日本からは彼等の満足する返答を與へないのであつた。獨逸皇帝の如きは、此際青木大使

に對し、英國は清國の歡心を得んとするに努め、露國は日本の歡心を得んとして一生懸命であると話されたそうであるが是とて、たゞの狸ではないので、現在に利害關係を有せぬ獨佛兩國は、此際としては殆ど超然主義をとつたのである。

此際眞率に友誼的仲裁を試みたのは米國であるが、是とても、正義人道の主張の下に、日本が海陸進攻を止めずに居れば、東洋方面に利害關係を有する歐洲諸國から、日本國將來の安固と康福を妨ぐべき不利なる要求をなして、戰爭の終局を促すやも計られぬのである。故に若し、東洋平和の爲、兩國均しく甚しく、名譽を毀損せざるやう仲裁の勞を執らうとしたならば、日本政府はそれを承諾するであらうか。と申込んだので、我政府は體よく之を斷り若し本統に時期が來つたならば、兎に角、特に友國の協力を乞ふべき必要を認めぬといふが如き意味合の返事をやつたのである。其後米國は、更に清國の依頼なりとして媾和條件を示して、我國の同意を求めて來たのであるが、外務大臣は清國の提議は、媾和の基礎として日本の承諾する能はざる所なるも、若し、清國が誠實に和睦を望み、正當の資格を有する全權委員を任命したならば、日本も同様の處置をとるであらうといふが如き意味合の返事をやつたのである。兎にも角にも、米國は平和克復の誠意より忠告を企てたので、信用すべき申出であつたのである。斯くの如くして清國と直接に交渉するの端緒が開かれ、種々の曲折を経て、下關の媾和會議となつたのである。

三國干涉の事實。

三國の兵力干涉の直接の原因に就ては、殆ど何の知る所がないのであるが、つまり、露國が兼て捕捉せんとしつゝ、而も利益の收獲に困難を感じて居つた、長年月の懸案たる東洋發展の爲、獨逸は露國の歡心を得つゝ、同じく東洋の發展上、發言權を收得するの基礎を作る等の爲、茲に、三國の兵力干涉の事實となつて顯はるゝに至つたのであるが、英國の期待も裏切られ、舞臺は露獨佛三國の兵力干涉を土臺として開かれたのである。

下關媾和條約は、明治二十八年四月二十日に御批准遊ばされたのであるが、待ちに待ちたる露獨佛三國は、早くも同二十三日に、其公使をして外務省に對し、遼東還附の忠告覺書を出さしめたのである。露國公使提出の分は、

露國皇帝陛下の政府は、日本國より清國に向つて要求したる、媾和條件を査閲し、遼東半島を日本にて所有することは、舊に清國首府を危うするのみならず、之と同時に、朝鮮の獨立を有名無實となすものにして、右は將來極東永遠の平和に對し、障礙を與ふるものと認む。因て露國政府は、日本皇帝陛下の政府に向つて、重ねて其誠實なる友誼を表せんが爲、茲に日本政府に勸告するに、遼東半島を確然領有することを放棄すべきを以てす。

といふのであつたが、他の二國の勸告も殆ど同一であつたので、無論三國間には、既に相提携して干

渉する約束があつたに相違なく、各代表者の進退も、無論一致すべき筈であるが、不思議にも斯ういふ事實があつたそうである。即ち御批准になつた二十日の日に、獨逸公使一人で、外務省に来て次官に逢ひ、本國政府から極めて重要な訓令を受取つたから、今は國名を明言することは出来ぬが、明日其國々の公使と重ねて訪問するから、外務大臣か首相かに面談したいといふので、何事か知らぬが外相が病氣であるから、自分が聞かうといふたそうである。そこで獨逸公使は、さらば明日また參ると云ふて歸つたそうである。然るに翌日に至り會見の日延を請求し來り、翌々日もまた日延を申込み、二十三日に至り初めて來省したので、此間に何か三國間に差し迫つて相談したこともあつたのであらうと云ふことである。

此干渉は、何となく分つて居たので、つまり列強より、強力なる干渉の來るべきは明白で、到底免れない段取である、とは豫め考へられたのであつたが、露國は二十七年以降、續々其軍艦を東洋に派遣し、強力なる太平洋艦隊を組織したのである。加之、此際露國は、此艦隊に對し、二十四時間以内に何時でも出動し得べき準備を爲すべしとの内命をすら下したといふことである。

此場合に於ける陸奥外務大臣の心事は、實に悲愴を極めたものであつたといふことである。三國干渉の結果、日本の戦捷を骨抜きにすることは、大臣自身として萬斛の怨を吞んで承諾を與へ、千譏萬罵の裡に將來の難局に當るを避けずとするも、異國の爲に斃れた戦友の血を浴びた陸海軍軍人は、如何

に激動するであらうか、戦勝に喜び勇んで居る國民は、如何に失望するであらうか、外來の禍機に應ぜんとするならば、内部の危機には何を以て備へ得るであらうか、實に以て悲愴極りなきものであつたのである。陸奥外相は熟慮の結果、

一應、三國の勸告を拒み、一面には、彼等の決心の程度を試み、一面には、我軍民の思惑をも察するは方策中の第一義である。

と決したので、之を首相に提言したといふことであるが、首相は陸海軍大臣と協議し、

一、假令新に敵國を増加するも、此際斷然三國の勸告を拒絶するか。

二、列國會議を招請し其決議を以て處理するか。

三、三國の忠告を容れ清國に遼東半島を還附するか。

の問題を提議したのであるが、第一は陸軍の精銳は、滿洲にありて本國の急に應ずるに由なく海軍の主力は澎湖島にありて空虚である。加之、長日月に亘りて戦ひたる結果、到底新來の外敵に當つて勝利の望がない、さりとて第三策は餘りに遺憾であるといふ見地より、不得已第二策をとるに決したのであつたが、陸奥外相は病中ながら大に之を憂ひ、一度拒絶して外交手段を講ぜんと主張したけれども、首相は此際結果をも考へずして三強國の勸告を拒絶するは、無謀である。恐らくは彼等に適當の口實を與へ、外交的手腕を揮ふの猶豫もなく、大危難に陥るであらうといふので、つまり首相と陸

海軍大臣とは第二策を取らんとし、陸奥外相は第一策をとらんとし、外相の舞子の病床に参加した松方大藏、野村内務の兩大臣も亦、首相に同意して、外相の主張に従はぬのであつた。そこで外相も、已むを得ず其自説を捨てたのであるが、尙列國會議を招請せんとすれば、英米伊等をも加ふるの必要があるが、果して承諾して呉れるであらうか、それにしても多少の時日を要する。加之各自々の利害上、勝手な説を主張し、其結果各國互に種々の注文を持出し、竟に下關係の全部を破壊するに至るも亦計られぬのである。清國も此間に處し、狡黠なる手段をとり媾和問題を迷宮裡に陥るゝやも、亦計られぬのであると主張したので、此主張には、首相初め皆々同意し、それでは三國に對しては讓歩の止むなきに至るとも、清國に對しては一步も讓歩しない事に決心したので、野村内相は即夜舞子を發して廣島に赴き、右の次第を奏上して、聖裁を仰いだといふことである。

そこで、今茲に少しく考究の要あるは、我日本政府は少くとも露國が何事をか言ひ出すに相違なく、其他の諸國も連袂か單獨かは知らぬが、兎に角一齊に何事をか云ひ出すに相違ないので、勝報連に至る頃より、露國と親善ならざる、若くは公平なる態度をとり得る強國に對し、相當の外交手段を講ずることを試みなんだであらうか、また一方より考察すれば、獨逸皇帝の如き、惡辣なる御方は斯くの如き際に果して、何事をもなさずに済ますであらうか。獨逸皇帝が、得意の火事泥的の手腕を弄し、往々にして成功したのも明白なことであるが、併し、其結果却つて人に用心される形となり、之が

爲「ビスマルク」の苦心になる露獨中立同盟は廢棄せられ、其結果彌々露佛の密接となつたのであるが、此露佛の親善に水をさすと同時に、露國への關係を深厚ならしめんとする辛辣なる手段を、將來東洋に地歩を得んが爲の道程として、此武力的三國干涉の率先者として、顯はれたのである此際戦は、貴國必ず敗れんと放言しつゝ、外務省に迫つたのは獨逸公使であつたといふことである。つまり、獨逸は露獨親善と東洋發展の地歩とを獲得せんが爲に、日本の努力を犠牲にしたのである、此際に於ける我外交官は、英、米、伊に對し心血を傾倒して努力したけれども露國の決心の強きを報ずるの外、曖昧なる謝絶であつた。つまり干渉側三國からは、斷乎たる峻拒で局外の三國からは、體のよい御斷りと云ふ状態であつた

そこで我政府も已むを得ず三國に對し

日本帝國政府は、露獨佛三國政府の友誼ある忠告に基き、遼東半島を、永久に所領することを抛棄することを約す。

といふ、結末になつたのである。

(備考)

此際、日本の各港灣に在つた露國軍艦は、いづれも「何時でも二十四時間以内に出動し得る準備をなすべし」との命令を受け各艦晝夜盛に黒烟を吐き、乗員の上陸を禁し戦闘が今にも起きるが如き

有様であつたのである。殊に浦鹽の如きは、急に豫備兵を召集し、五萬の兵を集め、何時にても出軍の準備を整へ、且日本人に對し、地方にあるものは浦鹽附近に歸り、再度の通知次第直に立退くべき準備をなすべしと傳へ、又獨逸皇帝は露帝に發電し、露國中將「チルトフ」の伎倆に信頼するが故に、獨逸艦隊の司令を、同人に依托せんと欲すとさへいふたさうである。

三國干渉は、右の如くにして干渉側の成功に終つたのであるが、抑三國側の意中は、果して誠實に清國及朝鮮と東洋全體の幸福とを望みつゝ我國に忠告したのであらうか。是は言ふまでもないことである。兎にも角にも、誠意なき言動は、夢の如くに消え去り、轉瞬間に其真相を暴露したのである。三國干渉の精神は、勿論公正なるものにならずして、つまりは露獨の野心と、佛國の自己の立場よりする必要的強要との混合で、日本の勢力の大陸に及ぼすことは、自分等の野心を満足すべき餘地を失ふことになるので、之を防がんが爲であるのは疑もないことで、友情黙止し難しなどは云ふ迄もなく虚偽である。

其證據としては、勸告文の墨痕未だ乾かざる二十九年の九月に、露國は清國を強要して東支鐵道敷設權を得、同十一月には、獨逸が二名の宣教師を殺されたるを名として、寢耳に水に膠州灣を占領し、翌三十一年に同灣の九十九年租借をなし（一八九八年三月六日）殆ど同時に、露國も亦旅順大連の租借を行ひ、（一八九八年三月二十七日）同年の夏には、英國も亦、清國の日本に拂ふべき償金を代償

し、日本の撤兵を期として、威海衛を租借——（一八九八年七月一日）、香港の防備上必要なりとの口實の下に、九龍半島の租借を行ひ、（一八九八年六月九日）佛國も亦、雲南廣東廣西に其勢力範圍を廣め、翌年十一月には、廣州灣の租借（一八九八年十一月十六日）を行ふので、何れも平和の維持、商業の保護等を理由とし、其甚しきに至つては宣教師二名の代償として、彼等が率先して東洋の平和の爲に、永久に、我帝國の領有することなからんことを勸告した地方は勿論、苟も支那沿岸の要地は悉く之を自己等の勢力圏内に收め、遂には東洋に利害を有し、居留民を有する強國としては、當然の措置なりと迄傲語するに至つたのである。若し此儘にして、彼等のなさんとするに委せたならば、支那分割は勿論、朝鮮は露國に入り、我日本帝國は必然の結果として、全然孤立し、蟄伏するの外なき状態となつたのであるが、畏れ多くも、明治天皇陛下宮廷の御費用を節してまでも、大御心の深さを御示しになり。四千萬の臣民が此難有き大御心を心として製艦の事業を促進せしめたるのみならず。三國干渉の爲に覺醒せしめられたる結果、所謂臥薪嘗膽十年の辛抱を續け、此十年の間に世界を震撼せしむべき、海上及陸上武力を整備し、國力も亦驚くべき程度の進歩をなしたのであるが、其結果として、日清戰爭以前には、殆ど何等の勢力だもなかつた、我日本海軍は、一躍して獨逸海軍を凌駕するに至つたのである。其の後に至り、獨逸皇帝は、「獨逸の未來は海上にあり」と絶叫しつゝ、海軍を擴張したる結果、我海軍は再び彼の下風に就くに至つたのであるが、三國干渉當時に比すれば、實に隔世

の感ある日本となつたのである。殊に我海軍は、殆ど同型にして有力なる戦艦六隻、装甲巡洋艦六隻を有し、戦略的にも、戦術的にも、有利なる行動を取り得べき艦隊を有するものは、英國の外一國もなかつたのである、斯る状態に於て、露國と戦端を開くに至つたので、如何に優勢なる露國艦隊と雖、終に彼の如き悲惨なる、終を告ぐるに至つたのである、是實に明治天皇陛下の御威徳と、參加將卒の努力によるとはいへ、實に三國干渉に對する國民的覺悟の力であるといはねばならぬ。

三國干渉の當時、明治天皇陛下より賜はりたる御詔書は、我國民の片時も忘れてはならぬ所で、此大御心と國民の決心的臥薪嘗膽と相合して、彼の如き美き結果を擧げ、以て今日に到つたのである。當時下された明治天皇陛下の御諭しに、

朕、嚮ニ、清國皇帝ノ請ニ依リ、全權辯理大臣ヲ會シ、其簡派スル所ノ使臣ト會商シ、兩國媾和ノ條約ヲ締結セシメタリ、然ルニ、露西亞、獨逸兩帝國及法朗西共和國ノ政府ハ、日本帝國ガ遼東半島ノ壤地ヲ永久ノ所領トスルヲ以テ、東洋永遠ノ平和ニ利アラズトナシ、交々朕ガ政府ニ慫慂スルニ、其ノ地域ノ保有ヲ永久ニスル勿ランコトヲ以テシタリ。

願フニ、朕ガ恆ニ平和ニ眷々タルヲ以テシテ、竟ニ清國ト兵ヲ交フルニ至リシモノ、洵ニ東洋ノ平和ヲシテ、永遠ニ鞏固ナラシメントスルノ目的ニ外ナラス、而シテ、三國政府ノ友誼ヲ以テ、切悞スル所、其ノ意味亦茲ニ存ス。朕平和ノ爲ニ計ル、素ヨリ之ヲ容ル、ニ吝ナラサルノミナラス。更

ニ時端ヲ滋クシ、時局ヲ艱クシ、治平ノ回復ヲ遲滯セシメ、以テ民生ノ疾苦ヲ醸シ、國運ノ伸張ヲ沮ムハ眞ニ朕ノ意ニアラス。且清國ハ、媾和條約ノ締結ニヨリ、既ニ淪盟ヲ悔ユルノ誠ヲ致シ、我カ交戦ノ理由及目的ヲシテ、天下ニ炳焉タラシム。今ニ於テ、大局ニ顧ミ、寛洪以テ事ヲ處スルモ、帝國ノ光榮ト威嚴トニ於テ毀損セル所アルヲ見ス。

朕、乃チ友邦ノ忠言ヲ容レ、朕カ政府ニ命シテ三國政府ニ照覆スルニ、其意ヲ以テセシメタリ。若シ夫レ半島壤地ノ還附ニ關スル一切ノ措置ハ、朕特ニ政府ヲシテ清國政府ト商定スル所アラシメント。今ヤ媾和條約既ニ批准交換ヲ了シ、兩國ノ和親モ舊ニ復シ、局外ノ列國亦斯ニ交誼ノ厚ヲ加フ。百僚臣庶、夫レ能ク朕カ意ヲ體シ、深ク時勢ノ大局ニ視、微ヲ慎ミ漸ヲ戒メ邦國ノ大計ヲ誤ルナキヲ期セヨ。(明治二十八年五月十日)

と仰出されたのであるが、「深く時勢の大局に視。」の御言葉は、國民たらんもの、痛切に感ぜざるを得ざる所であつたのである。

當時の日本國民は、一同此大御心を奉戴し、上下擧つて緊張したのである。自分の父子兄弟が血を流し、大戦勝を獲得し、其結果として入手したる遼東半島を其儘に、敵に返却せねばならぬ破目に陥つたのである。國民の悲愴なる、而も痛切なる感想は、自ら國民を覺醒せしめたのである。併し其時代の國民は、極めて健實で、今日の如く輕卒に騒ぎ廻るが如き、燥狂性のもものではなかつたので、誰一

人として慎を破つたものはなかつたのである。唯々齒を喰ひしばかり、臥薪嘗膽の心持を以て、十年一日の如き辛抱を續けたのである。

當時の事情を、精細に叙述すれば、殆ど限りもないことであるが、三國干渉の顛末は、先づ大要右の如くであつたのである。一言に之を曰へば、三國干渉は日清戦争大勝利後に於ける、最も有效なる注射劑であつたので、之が爲大勝後に於ける國民の一般に陥り易き諸弊害を免れ、必然の趨勢として來るべき日露戦争に大勝を再びすべき素地を造つたのである。

第三編 日露戦争中に於ける海戦

第一章 日露戦争の起因

前章にも述べたる如く、日清兩國の媾和に際し、露國を主とする三國干渉行はれ、終に、我日本をして清國の割讓せる滿洲の占領地を還附するの已むを得ざるに至らしめたのである。夫より以來、露國は常に清國政府の爲に庇護斡旋の勞を執り、露清兩國の友誼日に月に濃厚を加へ、滿洲に於ける特權獲得の基礎茲に固まり、或は露清銀行の設立となり、更に東清鐵道の敷設となり、西伯利鐵道後貝加爾線に連絡し、黒龍吉林の二省を横貫し、南烏蘇利鐵道に連絡し、露國の首府「ペテルボルク」(今の「レニングラード」)より浦汐港に至る連絡を全うし、併せて北清一帯地方との密接なる關係を生ずるの素地を造つたのであるが、更に清廷の多事なるに乘じ、南滿に一大利權を獲得し、曩に日本の爲に忠告し東洋の平和を維持せんが爲清國に還附せしめたる關東州の租借を行ふたのである。之を日本に忠告するに際し、朝鮮の獨立の爲、清國首都の安全の爲に必要なりと稱せる地域を、自己の手中に收めて平然たるが如き、如何に我日本國民をして、其仕打に憤慨せしめたであらうか。況んや、九款よりな

る一條約を、露清兩間に締結し、露國は二十五年の期限を以て關東州の租借をなし、軍隊の駐屯は勿論、之に必要な兵備をなし、尙東清鐵道幹線より大連に通ずる鐵道と、營口鴨綠江間より海濱適宜の所に至るべき支線の敷設に關する特權を收得する等、殆ど傍若無人の舉動を敢てしたのである。即ち露國は東清鐵道により、本國と日本海との直通連絡に成功し、今や一躍南下して、遼東半島に不凍港を獲得し、且鐵道を敷設して彼是の連絡を全うし、東に進むものは浦汐に、南に下るものは旅順大連に達し、其後明治三十三年に起りたる北清事變に於て、更に其地歩を確めたのである。

(備考)

明治三十年十一月、清國山東省の土匪が獨逸宣教師を殺害したるを名とし、獨逸は直に軍艦を派遣し、山東省膠州灣を占領し、翌年三月同灣を租借するの權利を得たり。

明治三十三年、清國山東省に義和團と稱する匪徒蜂起し、基督教徒に暴行を加へ、四方不逞の徒之に響應し、北京、天津方面に迄蔓延し、其勢頗る猖獗であつた。是に於て、關係列國は、各其兵を出し、自衛の策を講ずることゝなつたのであるが、其内清國軍隊にして、團匪と結托するもの尠からぬ事實が、暴露されたので、時局は愈々紛糾し、其騷亂滿洲に波及し、所在跳梁を逞くし、或は鐵道を破壊し、或は教會を焼く等亂暴狼籍至らざる所なき狀況となつたのである、そこで露國は名を鐵道の保護と、擾亂の鎮壓とに藉り、西伯利及旅順の兩方面より送兵して之を撃攘ひ、着々滿洲の諸要地を占領

したのである。又列國の組織したる聯合軍は、遲延ながら、八月十四日北京に入り、各國公使館の重圍を解き、爾來殘黨の戡定と共に秩序の回復を圖り、十月に至り、列國公使相會して清國と媾和豫備條項を協定し、各國其駐在兵を撤退せんとしたのであつたが、露國は獨り同一の歩調を取るを肯んぜぬので事態彌々混雜を極むることゝなつたのである。

斯くの如くして、一時餘程困難なる事局となつたのであるが、明治三十四年九月七日、清國と列國との間に議定書の調印を終り、北清事變も茲に一大段落を告げんとした頃より、駐清露國公使及關東州長官は、更に幾度か秘密運動を始めたのであるが、列國の反對の爲、成功に至らず、明治三十五年一月三十一日に至り、日英兩國は深く極東の形勢に考察する所あり。兩國間に同盟條約を締結するに及び、露國も亦佛國との同盟に關し宣言する所あつたので、列國の極東に對する旗幟鮮明となり、局面將に是より一轉せんとするが如き状態となつたのである。

爾來、露國は滿洲事件に關し、深く顧慮する所あり。何事をか感知したるものゝ如く、從來とは大に其筆法を異にする態度をとり、滿洲の主權を清國に還附し、清國は滿洲に於ける露國臣民並に既に創設したる事業を擁護し、露國は三期に分ち軍隊を撤退すべく、第一期は、協約調印後六ヶ月間に、盛京省西南部遼河に至る地方より撤退して鐵道を還附し、次の六ヶ月間には、盛京省の殘部及吉林省より、次の六ヶ月間は黑龍江省より撤退し、清國は自由に其地點及兵數を定めて駐屯軍隊を置くを得べ

きも、其員數は之を露國に報告し、露國は又、山海關、營口及新民廳の鐵道を還附すべきことを聲明し、明治三十五年四月八日を以て、公然と之を協定し其第一期の分は、約の如く之を實行したのであるが、如何なる故か、第二期以後の分は、毫も之を實行せず。第二撤兵期に迫りたる頃、俄然として其態度を一變し、舊に前約を履行せざるのみならず、撤退に關する新要求案を提出したのである。そこで、我帝國及他の一二列國は痛切なる警告を清國に與へ、米國も亦露國政府に抗議する所あつたのであつた。露國は之に對し、自ら特權を要求するの意思毫もこれなきを證言し、また決して滿洲開放を阻止するの意なきを表示したのであるが、撤兵は續て之を行ふの意なく、依然として占領の態度を變ぜぬので、已むを得ずして帝國と露國との交渉が始まつたのである。元來、朝鮮國に於ける我帝國と露國との關係は、一朝一夕のことではなかつたのである。我政府は明治九年二月二十六日を以て、列國に率先して朝鮮獨立の承認を與へたのであるが、一部朝鮮人は我國の眞意を察せず明治十五年及十七年の變亂を發生するに至つたのであるが、日清兩國の關係は、清國が朝鮮を屬邦とするの見地を捨てざるより破裂し、二十七八年戦争となつたのである。また他の一方に於ては、露國の朝鮮に對する野望は、遠く萬延元年頃に始まつたので、其後繼續して變ぜなかつたのである。何は兎もあれ、露國は實に、萬延元年に於ける北京條約により、清國より烏蘇利江以東の地を得たので、茲に豆滿江を以て朝鮮と相接することゝなつたのであるが、其後露國は朝鮮に公使を駐在せしむること

とし、明治二十一年には、咸鏡道に交通の道を開いたのであるが、二十七八年戦役の結果、我保護の下に朝鮮の爲に施設した諸般の改革中、動もすれば一部黨人の反對を惹起せんとするに乘じ、露國公使「ウエーバー」は、深く後宮の一派と結び、朋黨の軋轢を誘發せしめ、其結果、暗闘の状態、殆ど其極度に達し、明治二十八年に至り、遂に閔后殺害の騒亂をすら誘發するに至つたのである。然るに翌年一月に至り、江原道に暴徒起り、京城の衛兵が鎮壓の爲同地方に派遣せられたるを機とし、露兵俄に京城に入り、二月十一日には、國王躬ら宮廷を遁れて露國公使館に投じ、當時の總理大臣金宏集等は殺害せられ、反對黨内閣組織せらるゝに及び、露國の勢が俄然として勃興したのである。我帝國は之を見最早黙止するに忍びず、嚴重なる談判を開き、更に露國皇帝「ニコライ」二世の戴冠式に參列せる特派大使山縣有朋と、露國外務大臣との會見により、朝鮮の財政、軍隊、警察、電信等に關する兩國の關係を協定したのであるが、其後露國の朝鮮に對する行動漸く朝鮮人の厭惡を來し、聲望大に失墜したる際、露國は新租借の旅順大連に全力を注いで經營を行ふの必要に迫られたので、朝鮮のことは、暫く我帝國に讓歩するを賢なりと思料し、茲に互に朝鮮國の主張と獨立とを確認し、其内政に干渉せず、練兵教官若は財務顧問の任命は、相互に協定を經べく、又露國は朝鮮に於ける日本商工業の優約を認め、且之を阻碍するが如きこと決してなかるべきを議定したのである。然るに、明治三十二年五月、朝鮮政府が、朝鮮海峽に面する馬山浦を開放して貿易港と爲すに及び、露國は直に港

内優勝の一地域を選定し、艦隊附屬の營造物を建て、旅順と浦港との連絡を安全ならしめんが爲、相當の設備を同地に行ふことに關し、朝鮮政府に強要したのであつたが、議終に協はず、翌年僅に粟九味浦の租借に成功したのであつた。

露國と朝鮮との關係は、親疎常なき状態であつたが、外交方面のことは、年を逐ふて多端となり、露國は滿洲占領の餘勢に乘じ、不穩の經營を鴨綠江の左岸に開始し、朝鮮の領土權をも侵害せんとしたので、我帝國は終始慎重の態度を取り、成るべく禍患の少なからんことを望んだのであるが、事茲に至りては最早黙視すること能はず、蹶然起て露國と交渉を開始するに至つたのである。

元來、我帝國は滿洲問題發生以來、常に友誼的好意を以て露清兩國間に、圓滿なる協商を遂げ、永く平和を樂むを懇望しつゝあつたのであるが、露國は第二期撤兵も實行せず、突然此要求を提出するが如き状態となつたのである。しかのみならず、鴨綠江岸に於ける露國の敏活なる行動は、列國をして其真意果して平和にあるや否やを疑はしむるに至つたのである。

我帝國は此間に處し、深く國家の前途と東洋の形勢とに顧み、露國との協商を確めて後患を根絶するの必要を認め、明治三十六年七月、我提案を露國に示し、協商の基礎となすべく努力したのであるが、此際露國は關東州長官「アレキセイフ」を絶東太守となし、極東領土に於ける文武の最高權を與へ、且隣邦との外交權をも委ねたので、我帝國は直接露政府との交渉を主張したのであるが、露國は交渉の

場所を東京に指定すべきを主張して已まぬので、我政府も暫く之を許し、露國公使をして「アレキセイフ」と協議決定し、本國との直接交渉を間接にすることになつたのである。此一事を以ても、如何に露國が驕傲なる態度を取つたかの事實を證明するに足るのである。元來朝鮮に對する我帝國の主張は、

- 一、清韓兩國の獨立及領土保全を尊重すること。
- 二、日本は朝鮮に於ける優越なる利益と、同國の行政を改良すべき助言及援助を同國に與ふるの權利を有すること。
- 三、露國は朝鮮に於ける日本の商工業の活動を阻礙せず、是等の利益を保護する日本の總ての措置に反對せざること。
- 四、日本は前文の目的、又は國際紛争を起すべき騒亂を鎮定せんが爲朝鮮に軍隊を派遣し得ること。
- 五、朝鮮海峽の自由航行を迫害すべき兵要工事を同國沿岸に設けざること。
- 六、滿韓の境土に於て、其兩側各五十吉米の中立地帯を設置し、該地帯には相互の承諾なくして軍隊を入れざること。
- 七、日本は滿洲を以て其特殊利益の範圍外なることを承認するを以て、露國も亦韓國を以て其特殊利益の範圍なることを承認すること。

八、日本は、露國が滿洲に特殊利益を有し、是等の利益の保護の爲必要なる措置を採り得べきことを承認し、且露國が朝鮮より得たる商業及居住上の權利及免除を妨碍せざるを以て、露國も亦當に日本が清國との條約に依り滿洲に於て得たる同上の權利及免除を妨碍せざるべく、今後朝鮮鐵道及東清鐵道にして鴨綠江まで延長するに至らば、該鐵道の連絡を阻礙せざること。

等であつたのである。露國は我提案に對し復答を遷延し、再三再四督促の後、初めて修正對案を送致したのであるが、依然として協商の範圍を朝鮮にのみ局限し、同國を軍略上の目的に使用することを非難し、中立地帯も北緯三十九度以北説を固執し、我帝國が協定の必要を認めたる滿洲の事に關しては、全然之に觸れざるの方針を固執するので、帝國が協定の必要を認めたる兩國利害の接觸地域内に在る滿洲に關しても、同様商議するの妥當なるを辯じ、朝鮮領土の使用に關しては、制限を設けられざらんことを要求し若し露國にして中立地帯を滿韓の兩野に跨らしむるを肯んぜずんば、寧ろ全然其一項を削除するの至當なるを主張したのであるが、露國は韓國に對する自説を斷乎として譲る色なく若し帝國にして韓國に對する露國の主張を認容したならば、帝國及列國が已に滿洲に於て清國より獲得したる權利及特權を阻礙せざるべきことを承認すべき回答を與へたのである。さりながら、露國にして絶對的に清國の主張と領土保全とを保證せざる限り、假令滿洲に於ける帝國及列國の既得權を尊重すべき約束を了しても、何等の効力がない、要するに我國にして露國の主張を容れ、滿洲及其

沿岸の我利益範圍外なるを承認する以上は、露國も亦朝鮮に對し同様の保證を與ふべき筈であるので明治三十七年一月十三日、更に右の趣旨を以て露國の熟考を求めたのであるが、露國は一月三十一日に至るも猶確答期日すら指定せぬのであつた。

我帝國は、明治三十六年八月以降、誠意妥協に力めたのであるが、露國は其回答を遷延すると同時に着々軍事行動を試み、軍事外交相照して其眞意を忖度するに難からざる事態を示したので、二月五日に至り、我帝國は最早事を外交に決するの餘地なきを認め、翌六日公文を露國政府に送り、公使館を引拂ひ、兩國の國交は茲に斷絶したのである。

第二章 日露戰爭の開始

露國との交渉は前述の如く、不幸にして全然妥協の望を失ひ、已むを得ずして外交の斷絶を見るに至つたのである。そこで、我帝國は遺憾ながら、世界にまたとなき大國に對し、獨立自衛の道を講ぜねばならぬ境遇となつたので、明治三十七年二月五日、明治天皇より左の詔勅を陸海軍に賜はり、軍人一同の決心を促されたのであつた。

朕ハ東洋ノ平和ヲ以テ朕カ衷心ノ欣幸トスル所ナルカ故ニ清韓ノ兩國ニ關スル時局ノ問題ニ付キ
朕カ政府ヲシテ昨年来露國ト交渉セシメタリ然ルニ露國政府ハ東洋ノ平和ヲ顧念スルノ誠意ナキコ

トヲ確認セシムルノ已ヲ得サルニ達シタリ蓋シ清韓兩國領土ノ保全ハ我日本ノ獨立自衛ト密接ノ關係ヲ育ス茲ニ於テ朕ハ朕カ政府ニ命シテ露國ト交渉ヲ斷チ我獨立自衛ノ爲ニ自由ノ行動ヲ執ラシムルコトニ決定セリ。

朕ハ卿等ノ忠誠勇武ニ信賴シ其目的を達シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセンコトヲ期ス。

右の如く大命が已に降下したので、海軍大臣男爵山本權兵衛、海軍軍令部長子爵伊東祐亨、各鎮守府及艦隊司令長官は奉答文を捧げ、粉骨碎身して報旨に報ひ奉らんことを誓ひ、我聯合艦隊は豫定の畫策に従ひ、先づ露國太平洋艦隊を擊滅して海上を制壓するを目的とし、翌六日を以て出征の途に就き、仁川旅順の二方面に於て同時に彼我艦隊の衝突を見るに至り、二月十日露國に對し彌、左の如き宣戰の大詔を發せられ、同十一日を以て大本營を宮中に置かせられたのである。

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス。

朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜シク全力ヲ極メテ露國ト交戰ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜シク各、其職務ニ率ヒ其權能ニ應シテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ遺算ナカラシムルコトヲ期セヨ。

惟フニ文明ヲ平和ニ求メ外國ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各國ノ權利利益ヲ損傷セスシテ永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スヘキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ外交ノ要義ト

爲シ且暮敢テ違ハサラムコトヲ期ス朕カ有司モ亦能ク朕カ意ヲ體シテ事ニ從ヒ、外國トノ關係年ヲ逐フテ益、親厚ニ赴クヲ見ル今ヤ不幸ニシテ露國ト釁端ヲ開クニ至ル豈朕カ志ナラムヤ帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所タレバナリ然ルニ露國ハ其清國トノ明約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ハラス依然滿洲ニ占據シ益、其地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併合セントス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸セン乎韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持センコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歲ノ久シキニ亘リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ラニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス凡ソ露國カ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ露國ハ既ニ帝國ノ提議ヲ容レス韓國ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セラレントス事既ニ茲ニ至ル帝國カ平和ノ交渉ニ依リ求メムトシタル將來ノ保障ハ今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

明治三十七年二月十日

總理大臣伯爵桂太郎以下各大臣副署

當時、我國は遺憾ながら尙世界的大國としての威望がなかつたので、露國に對し戦闘を開始するなどは、無謀の甚しきものと言はれたのであらう。従つて策戦計畫の如きは余程慎重に吟味せられたのであつた。

既に上文にも述べたる如く、日露戦争の起因は、三國干渉の結果、日本は折角日清戦争によりて贏得したる凡ての發展的進路を塞がれたのみならず、三國干渉の際、露國は「我々は平和を愛好するの念極めて痛切である、従つて後來の平和を攪亂するやうな事柄は、黙つて居られぬから已むを得ず忠告するのであるが、日本帝國が遼東半島を占有するは、獨り朝鮮の獨立を有名無實にするのみならず、後來親好を重ねべき清國の國都をも脅かすことになるから、東洋將來の平和の爲、清國に還附するがよからう。」といふて如何にも親切らしき忠告をして呉れたのであるが、其實、自分等の野心の目標を、日本帝國に奪はれては遺憾であるといふ、私心を含みつゝ、親切ごかしをやつたに過ぎぬので、我國の當路者も其深意を知らぬではないが、一體外交なるものは、總て斯くの如く裏には裏があるのが通例で其背景には、必ず國力が伴ふのである。従つて力のない外交は、一方に好結果を擧げても、反對に悪い結果を生ずるを常とするので、此邊の所は、余程の注意を要するのである。若しも萬一外交上の紛糾

を惹起する場合に於ては、其結果として愈々實力を以て争ふことにもなるので、遺憾ながら日清戦争の結果、我國も甚大の疲勞を覺へ、我海軍の如きも、一年間の活動と數回の戦闘の爲、物質的にも余程の損害を受けたので、今更露獨佛三國艦隊の新手に對しては、遺憾ながら勝算ありとは考へられぬのであつた。そこで、我帝國も已むを得ず、隱忍して三國の勸誘に従ふこととなり、明治天皇よりは、世界の大勢に鑑みて我慢せよとの思召を仰出されたので、國民も其心になり、所謂臥薪嘗膽十年の苦節を全うし、彼の如き大勝を得殆ど全世界を驚倒せしめ、世界歴史の「レコード」を破つたのである。従つて日露戦争の勝利は、國民が隱忍保持せる敵愾心の結晶であるので、此意味よりすれば三國干渉は實に我國の爲に世界的大國として立つべき機運を與へて呉れたのである。況して日本に忠告して撤退せしめたる滿洲を、何の遠慮もなく之を自國の手に收むるが如き、露國の不徳義を現實に目睹したる我日本國民の心中、果して如何であつたであらうか。此際心あるものは痛憤の涙を押へて更に臥薪嘗膽の氣分を加へたのであるが、此事實の如きも解釋の仕方によりては、我日本國の隆盛を促進したる一原因ともなつたのであらう。是等の點に就ては、今日に於ても沈思默考すべき所であらう。

要するに、日露戦争といひ日清戦争といひ、日本は決して自己の領土を廣げんとするの野心からではないが、朝鮮國を我屬邦にするか、或はまた獨立國にするか、其いづれにもせよ、「朝鮮をして清國若は露國の屬邦たらしめず」との一事が日本帝國の國防上、此上もなく大切なことである。従つて日露戦

争は、國防戦にして決して侵略主義（所謂帝國主義）の戦争ではない。之を古來の歴史に徴するに、之に類似したる性質を有する海戦は、「サラミス」の戦争であつた。即ち希臘聯邦は、此海戦によつて、土耳其の東方勢力が西歐地方に伸びんとするを打止め、それと同時に、希臘自身が其大を爲したのである。若し彼際土耳其の英雄「クセルクセス」をして、其志を爲さしめたならば、希臘文明も歐羅巴文明もなかつたであらう。あの海戦に於ける希臘の將軍は、彼の有名なる「テミストクレス」で、「サラミス」の大勝利は、實に將軍其人の大功によるとも言はるゝのであるが、當時の希臘國民の意氣は實に燃ゆるが如く、如何にするも土耳其の勢力を押へねばならぬとの決心が極めて旺盛であつたのであつた。

彼の時代、希臘に於ては、「サラミス」海戦の前に、「マラソン」の戦があつた。此戦は、歴史上といはんよりも、寧ろ劇的意義に於て有名な戦争であるが、是は宛も弘安の外戦の前に、文永の役があり日清戦争の後に日露戦争が起つたのと酷似するのである。従つて、日清戦争は、つまり「マラソン」の立場になり、日露戦争が「サラミス」の立場をとると同關係にあるのである。即ち一國の興隆若は崩壊に關する歴史は、一戦争を以て決するものにあらず。而も戦勝は必ずしも一勝一敗の歴史を構成するものにあらずして、第一勝は次の敗戦を將來せず、寧ろ第二勝の原因となり、第一敗が第二敗の原因となるのである。斯くの如くして、第一勝は第二勝を生み、第二勝は更に第三勝を齎すと同時に、第一敗

は第二、第三敗の原因となるので、此間の消息は、英對佛關係の海戦史を繙くものゝ等しく首肯する所であらう。即ち英國は勝利の情力を握り、常勝艦隊の譽を全うし得たので、是は歴史上極めて明瞭なる事實である。即ち第一、第二戦に勝利を得たる國民は、第三戦にも必勝の堅き自信を以て戦ふからである。之に反し、一度敗戦の憂き目を見たる國民は、之とは全然反對に第二、第三敗を累ねたる後は常に敗戦の豫感を以て戦に臨むので、其士氣は如何にするも旺盛ならず、終に第四敗の原因となるので、此邊のことは、深く注意せねばならぬ。即ち第一敗は、敗戦其物の禍は姑く措き、實に惡影響を永遠に貽すのである。然るに我日本國は、幸にも外戦に敗れたる歴史を有せぬ、（上古白村江の敗戦ありしも之を繰返へさず済んだのは、誠に幸福である。）日清戦争も彼の如く連戦連勝の成績を挙げ日露戦争も亦連戦連勝であつた。而も、日本海々戦の如きは、世界歴史の第一頁以來、匹儔なき大勝利であつたのである。是等の事實に徴すれば、日清戦争は實に日露戦争に動かすべからざる決定を與へた大原因となつたのである。世人の多くは、日露戦争は日露戦争として單獨に考察し、日清戦争と何等重大なる關係なきが如くに觀察し去るのであるが、要するに、日清戦争に大勝を博し得たればこそ、世界第一の強國と相對するの氣力をも養成し得たので、其結果として日露戦争の如き偉大なる事實を残し、やがては第三勝の原因ともなるべきである。當時世界の各國は、日清戦争すらも、殆ど勝負にもなるまじとさへ考へて居たのに、況して露西亞に對しては、百に一も勝算あるべき理由なしと

まで、言はれて居たのは實際無理ならぬことであつたのである。

之を要するに、日露戦争の前に、日清戦争があり、日清戦争によつて試練された我帝國は、冒險と迄評せられたる日露戦争にも、有史以來未曾有の大成功を収めたのであるが。從來東洋に於ける眠れる獅子として買被られた支那帝國の假面は、遺憾なく剝脱され、列強の間に支那分割の野心をすら惹起せしむるに至つたのであるが、是と同時に、日本の勝利に對しては、歐洲諸國の驚愕一方ならぬ有様であつたが、併ながら、此時代に於ては、未だ日本の實力を畏敬するに至らず、支那の敗戦を以て支那羸弱の致す所と信じたので、三國干渉の起因も、畢竟此の迷想到に支配された結果で、此邊の事はよくよく注意すべきことと信するのである。前にも再三述べた如く、日露戦争前の露國の態度は、實に傍若無人であつた、(我國民の臥薪嘗膽時代)、日本の言ふ所は、一切耳を假さず、一度は滿洲に於ける自己の勢力を扶植する爲、朝鮮方面の事は日本に委すといふが如き、態度を示したのであるが、滿洲方面に對する態度は、勿論、全體に於ける態度は、實に言語に絶し、若も此儘に放置し了つたならば、獨り滿洲のみならず、朝鮮も亦彼の勢力圏内に入り、終には屬國となるであらうと信ずべき形勢が逼迫し來つたのである。そこで、我國は、後憂を除かんが爲、露國との交渉を進めんとしたのであるが、露國は頑として我國の公明なる進言を容れないので、不得已國交の斷絶を宣するに至つたのである。

此場合、我陸軍は對露作戰上、豫め朝鮮北部に地歩を占むるの必要ありとの意見で、それが爲には支那の故智に倣ひ、變装したる軍隊を送らんとしたのであるが、其事たるや、如何にも必要には相違ないが、是實に云ふべくして行はるべきにあらずとの議により、遂に沙汰止みとなつたのであるが、さうらばと言つて、國交が斷絶したる以上、既に國境に進出する露兵に機先を制せられ、朝鮮國內に敵を見るが如きは、如何にも手遅れの形となつて、遺憾千萬である、加之、我陸軍は開戦の劈頭に於て既に一籌を輸するは、全體の勝敗に大關係を有すること勿論であるので、如何なることを押切ても適當の手段を講ぜねばならぬ、さりとて、國交斷絶以前公然と大兵を動かして朝鮮に入らしむるが如きは、言ふべくして行ふべからざる而も拙劣なる方策である。又假令之を實行するも、露西亞は既に十分なる準備時日を得、制先の利を擅するので、如何なる策を講ずるも、拱手して此儘に放置する譯には行かぬ。果して我らば、一時、警官若は人夫の名を附けて、秘密裡に豫め多數の兵を朝鮮に入らしむるより外には、道がないといふことになるのである。

さりながら、右の如きは、公然の秘密とも稱すべく、漏洩の虞れ極めて多きは、當然である。又之を海軍の方より考察すれば、作戰上大なる困難に陥ることは勿論である。何となれば、我海軍の實力は露國に對し、十七分の十に過ぎざる現狀に於ては、少くとも、劈頭第一に如何なる奇策を講じてなりとも敵軍に大損害を與へなければ、勝算が少い、然るに、若し萬一陸軍が、北韓方面に戦を交へたなら

ば、此奇策を行ふこと到底不可能である。奇襲は敵の油断に乗ずるの外他策がない、従つて此情勢に對する判断は、難中の至難事で、陸海各自の立場として迂濶の決定を委さぬのである。要するに、今回の戦争は、陸戦を以て戦端を開くべきか、海軍を以て開かるべきやの問題の決定が緊要であつたのである。

此問題に對しては胸中の秘策を口外すべき次第ではないので是實に吾等の先輩が最も頭を悩ました所で、結局海軍の作戦を先とするに決したのである。併ながら、陸軍の身になつて考察すれば、其戦策上、大なる不利を感ぜぬ様には行かぬ。若し海軍の作戦を先にし、戦端を開いた場合、朝鮮方面に對する露軍に警告を與へたるに等しく、當分不利の戦争を繼續せねばならぬ、是實に陸軍の最も苦痛とする所であつた、此場合に於て、我海軍の立場より考察すれば、當時我艦隊の勢力は、戦闘艦六隻、装甲巡洋艦六隻で、露國の太平洋艦隊は戦闘艦七隻、装甲巡洋艦二隻、巡洋艦六隻で、實際上我艦隊が少しく優勢であつたが、此艦隊を以てする決戦の場合、假令敵艦を全滅に歸せしめても、我艦隊も亦若干の損害を免れない、而して後此損害を受けた艦隊を以てしては、歐露より新來の戦艦七隻に對し、到度勝算がない、此苦境に際し、海軍の取るべき戦策は、我艦隊に殆ど何等の損害をも蒙らずして、敵の太平洋艦隊を撃滅するのが、唯一の良策である。之が爲には、第一戦を奇襲に訴ふる外には道がないのである。

是等の點に關しては、陸軍當局も、眞面白に研究したであらうが、最初には、陸海軍互に相譲らず、一時大に紛糾したさうである。吾等の聞く所によれば、此時の最高會議に於ては、陸軍の山縣元帥議長となり、兩軍の代表出席して議論を戦はした結果、參謀次長は海軍の意見も尤である、併ながら、陸軍の立場も亦之を諒として貫はねばならぬ若し海軍の主張する如く、海軍を以て戦を始め、それまで陸軍の行動を開始せざる爲、北韓方面に於て陸軍の不利を招くが如きことあつても、其責任を負ふ譯には行かぬ、と迄極言したさうである。併し大山參謀總長は、日清戦争に鑑み制海を第一とし、然して後陸軍作戦に移るべきを可とせられ、雙方意思の疎通を計つた結果漸く協議決定し、茲に初めて海軍の作戦を以て、戦争の幕を開くことになつたといふことである。國家の大局より達觀し、陸海兩軍が相譲り相協力して戦はされは勝利の榮冠を得ること困難なるは、今更論を待たぬのであるが、此際此事の如きは、確に千古の龜鑑として傳ふべき價值あり、日露戦争大勝の原因の一として十分に尊重すべき點であらうと信ずる。此際海軍では山本海軍大臣が大局より觀察し、最も公平に最も強硬に、海軍の意見を主張した結果、參謀總長も之に同意するの大雅量を示されたさうである、凡そ斯くの如き場合に於ては、兎角に兩軍意見の相違を生じ易く、而も互に自己の立場を重視するの餘り、大局的觀察を閉却し去るは、一般にあり得ることである。然るに、此際の最高會議が、大體の上より觀察したる結果として、旅順奇襲を以て戦争を開始することゝなつたのは、如何にも美しくまた痛快な

ることである。

右の如く、我帝國は露國と開戦の決心を確めたのみならず。大戦策の第一大方針をすら決定し、茲に彌々戦争の序幕を開くに至つたので、此際決定の大方針こそは、實に日露戦争勝敗の鑰を握つたものと斷言し得るであらう。

第三章 開戦前に於ける日露艦隊の行動

我帝國も、日露戦争の到底免るべからざるを觀破したる結果、我國海軍の全力を以て、先づ第一に聯合艦隊及第三艦隊を編制し、一は攻勢的策動を、一は對馬海峽方面の警戒に任せしめたのである。

聯合艦隊

第一艦隊

司令長官(聯合艦隊司令長官) (旗艦三笠) 海軍中將 東郷平八郎
 參謀長 海軍大佐 島村速雄
 參謀 海軍中佐 有馬良橘
 參謀 海軍少佐 秋山眞之
 參謀 海軍大尉 松村菊勇

副官

權關長

海軍少佐 永田泰次郎

司令官(旗艦初瀬)

海軍機關大監 山本安次郎

參謀

海軍少將 梨羽時起

參謀

海軍少佐 塚本善五郎

司令官(旗艦千歲)

海軍大尉 齋藤七五郎

參謀

海軍少將 出羽重遠

參謀

海軍少佐 山路一善

海軍大尉 竹内重利

隊名	艦名	艦種	噸數	速力	官	氏名	長
第一艦隊	三笠	一等戰艦	一五、一四〇	一八	海軍大佐	伊地知彦次郎	
第一艦隊	朝日	右	一五、二〇〇	一八	右	山田彦八	
第一艦隊	富士	右	一二、五三三	一八	右	松本和	
第一艦隊	八島	右	一二、三二〇	一八	右	坂本一	
第一艦隊	敷島	右	一四、八五〇	一八	右	寺垣猪三	
第一艦隊	初瀬	右	一五、〇〇〇	一八	右	中尾雄	

第三驅逐隊	第二驅逐隊	第一驅逐隊	通報艦	第三戰隊
薄雲 東雲 連雲	雷艦 電艦 曙艦	白雲 朝雲 霞雲 曉雲	龍田	千歲 高砂 笠置 吉野
司令(乘艦薄雲)	司令(乘艦雷)	司令(乘艦白雲)		
右驅逐艦 右同艦 右同艦	右驅逐艦 右同艦 右同艦	右驅逐艦 右同艦 右同艦	通報艦	二等巡洋艦 右同艦 右同艦 右同艦
二七四 二七四 三〇五	三〇五 三〇五 三〇五	三四一 三四一 三六一 三六三	八六六	四、七六〇 四、一五五 四、九〇〇 四、一五〇
三〇 三〇 三一	三一 三一 三一	三一 三一 三一	二一	二二、五 二二、五 二二、五
海軍少佐 海軍大尉 海軍少佐	海軍中佐 海軍大尉 海軍少佐	海軍大佐 海軍少佐 右同艦	海軍中佐	右同艦 右同艦 右同艦
關重孝 司令兼務 平眞雄 和田博愛 森本義寛	土屋光金 三村錦三郎 竹村伴吾 篠原利七 九津見雅雄	石田一郎 末次直次郎 大島正毅 松永光敬 狹間光太	釜屋忠道 淺井正次郎	高木助一 石橋甫 井手麟六 佐伯闊

第一驅逐隊	第四十驅逐隊
第六十九號 第六十七號 第六十八號 第七十號	千鳥 隼鳥 眞鶴 鷗
司令(乘艦六九號)	司令(乘艦千鳥)
右水雷艇 右同艇 右同艇 右同艇	右水雷艇 右同艇 右同艇 右同艇
八九 八九 八九 八九	一五二 一五二 一五二 一五二
二三、五 二三、五 二三、五 二三、五	二九 二九 二九 二九
海軍少佐 海軍中尉 海軍大尉 右同	海軍少佐 海軍大尉 右同 右同
關重孝 司令兼務 平眞雄 和田博愛 森本義寛	櫻井吉丸 司令兼務 桑島省三 飯田延太郎 吉川安平

第二艦隊

司令長官(旗艦出雲)

參謀長

參謀

參謀

參謀

副官

海軍中將

海軍大佐

海軍中佐

海軍少佐

海軍大尉

海軍少佐

上村彦之丞

加藤友三郎

佐藤鐵太郎

下村延太郎

山本英輔

舟越楫四郎

第三編 日露戰爭中に於ける海戦 第三章 開戦前に於ける日露艦隊の行動

機關長

司令官(旗艦磐手)

參謀

參謀

司令官(旗艦浪速)

參謀

參謀

海軍機關大監

海軍少將

海軍少佐

海軍少將

海軍大尉

海軍少佐

海軍少將

山崎鶴之助

三須宗太郎

松井健吉

飯田久恒

瓜生外吉

森山慶三郎

谷口尙真

隊名	艦種	噸數	速力	官名	氏名
出雲	一等巡洋艦	九、七三三	二〇 ^三 / _四	海軍大佐	伊地知季珍
吾妻	右	九、三二六	二〇	右	藤井較一
淺間	右	九、七〇〇	二〇	右	八代六郎
八雲	右	九、六九五	二〇	右	松本有信
常磐	右	九、七〇〇	二一、五 ^三 / _四	右	吉松茂太郎
磐手	右	九、七七三	二〇 ^三 / _四	右	武富邦鼎
浪速	二等巡洋艦	三、六五〇	一八	海軍大佐	和田賢助
明石	三等巡洋艦	二、七五五	一九、五	海軍中佐	宮地貞辰

隊名	艦種	噸數	速力	官名	氏名
高千穂	二等巡洋艦	三、六五〇	一八	海軍大佐	毛利一兵衛
新高	三等巡洋艦	三、三六六	二〇	海軍中佐	莊司義基
千早	通報艦	一、二三八	二一	海軍中佐	福井正義
速鳥	驅逐艦	三七五	二九	海軍少佐	竹内次郎
春雨	右	三七五	二九	右	有馬律三郎
村雨	右	三七五	二九	右	水町壽次郎
朝霧	右	三七五	二九	右	石川壽次郎
司令官(乘艦速鳥)				海軍少佐	長井群吉
陽炎	驅逐艦	二四七	三〇	海軍少佐	眞野巖二郎
叢雲	右	二四七	三〇	右	井手篤行
夕霧	右	二四七	三〇	右	松岡修藏
不知火	右	二四七	三〇	右	鍵和田專太郎
司令官(乘艦蒼鷹)				海軍中佐	矢島純吉
蒼鷹	水雷艇	一五二	二九	海軍大尉	司令官 兼 務
鶴	右	一五二	二九	右	原田松次郎
雁	右	一五二	二九	右	坂本重國
燕	右	一五二	二九	右	庄野義雄
司令官(乘艦第六十二號)				海軍少佐	荒川仲吾

聯合艦隊附屬特務艦船

第十二號	第六十二號	第六十三號	第六十四號	第六十五號
水雷艇	右	右	右	右
同	同	同	同	同
一〇九	一〇九	一〇九	一〇九	一〇九
二七	二九	二七	二九	二九
右	右	海軍大尉	右	同
司令兼務	中正奇	田尻唯二	三宅太郎	

艦名	噸數	速力	官名	氏名
春日	三、八一九	一六、六	海軍大佐	有川貞白
香日	六、一六九	一七、一一	右	井上敏夫
大島	六、一六八	一七、五三	右	梶川良吉
赤城	六、二〇〇	一〇	海軍中佐	廣瀬比古
臺南	三、三一九	一六	右	藤本秀四郎
臺中	三、三一九	一六	右	松村直臣
日南	三、三一	一七、七六	右	高橋助一
三光	五、八二三	一四、五	右	木村浩吉
神戶	三、三六四	一四	海軍少佐	國枝勝三郎
金州	二、八七七	一四、三八	右	三戶與三郎
江都	三、八五三	一四、三八	右	溝口武五郎
山口	三、一八二	一五、五	右	佐多直道
山丸	三、三二〇	一二、五	海軍中尉	秋山米吉

艦名	噸數	速力	官名	氏名
福丸	二、七四四	一二	右	淡中晴海
仁川丸	一、四四五	一一	右	島崎保三
太郎丸	三、一一七	一二	右	岡田政次郎
彦丸	三、七一二	一二、二〇	右	岡田般二郎

第三艦隊

司令長官(旗艦嚴島)

參謀長

參謀

參謀

參謀

副官

機關長

司令官(旗艦和泉)

參謀

參謀

司令官(旗艦扶桑)

海軍中將 片岡七郎

海軍大佐 中村靜嘉

海軍中佐 岩村團次郎

海軍少佐 松本直吉

海軍大尉 橫山傳

海軍少佐 高橋雄一

海軍機關大監 齊藤利昌

海軍少將 東郷正路

海軍少佐 吉田清風

海軍大尉 野崎小十郎

海軍少將 細谷資氏

隊名	艦名	艦種	噸數	速力	官名	氏名
第五戰隊	松橋 鎮 殿	二等巡洋艦	四、二一〇	一六	海軍大佐	成田 勝郎
	島立 遠 島	二等巡洋艦	七、六七〇	一四、五	右 同	今井 兼昌
		二等巡洋艦	四、二一〇	一六	右 同	加藤 定吉
		二等巡洋艦	四、二一〇	一六	右 同	川島 令次郎
第六戰隊	和 泉	三等巡洋艦	二、九八七	一七	海軍中佐	池中小次郎
	須磨	右 同	二、六五七	二〇	海軍中佐	土屋 他保
	秋津	右 同	三、一五九	一九	海軍中佐	山屋 格
	千代田	右 同	二、四五〇	一九	海軍大佐	村上 一人
第七戰隊	扶桑	二等戰艦	三、七八三	一三	海軍中佐	(心得) 奥 宮 衛
	平遠	一等戰艦	二、一五〇	一〇、五	右 同	淺羽 金三郎
	海防	二等戰艦	一、三五〇	一二	右 同	高橋 守道
	磐城	二等戰艦	六、五六	一〇	右 同	佐伯 胤貞
	鳥海	右 同	六、一二	一〇	右 同	山澄 太郎
	愛宕	右 同	六、一二	一〇	右 同	久保 田彦七
	濟遠	海防	二、五一九	一五	右 同	但馬 惟孝
	筑紫	一等戰艦	一、三五〇	一六	右 同	西山 保吉
	摩耶	二等戰艦	六、一二	一〇	右 同	中川 重光

隊名	艦名	艦種	噸數	速力	官名	氏名
第十戰隊	四十三號	水雷艇	一〇九	二七	海軍少佐	金子 滿喜
	四十二號	右 同	一〇九	二七	海軍中佐	梶内 曾次郎
	四十一號	右 同	一〇九	二七	海軍中佐	大瀧 道助
第十一戰隊	司令(乘艇七十三號)	水雷艇	八九	二五	海軍少佐	武部 岸郎
	七十七號	右 同	八九	二五	海軍大尉	司令 兼 務
	七十四號	右 同	八九	二五	海軍大尉	山口 傳一
	七十五號	右 同	八九	二五	海軍大尉	井口 第二郎
第十六戰隊	司令(乘艇白鷹)	水雷艇	二六	二八	海軍少佐	若林 欽
	七十一號	右 同	八九	二五	海軍大尉	司令 兼 務
	三十九號	右 同	八九	二五	海軍大尉	大谷 幸四郎
	三十六號	右 同	八九	二五	海軍大尉	横尾 義達
		右 同	八九	二五	海軍大尉	角田 貫三

附屬特務艦船

第三編 日露戰爭中に於ける海戦 第三章 開戦前に於ける日露艦隊の行動

艦名	噸數	速力	官名	艦長氏名
豐橋丸	四、〇五五	一二、五	海軍大佐	丹羽 敦忠
有明丸	二、九八七	一二	海軍中尉	永野 修身
			監督官	

右の如く、我海軍は全力を盡して聯合艦隊及第三艦隊を編制し、第三艦隊は吳軍港及竹敷に、聯合艦隊は佐世保に集中し、大命の降るを待つたのである。

露國太平洋艦隊は、之を旅順大連及浦港の三所に分駐せられたのであるが、明治三十六年末一等戦艦「ツエサレウイチ」及装甲巡洋艦「バヤーン」本國より來り、更に一層勢力を増加したのである。此際浦港に於ては、日々碎氷船を用ゐて結氷の破碎を行ひ、常に汽力を蓄へて不時の出港に備へ、旅順口の主力艦隊は、當時修理中なる「セワストポリ」を除き、他の戦艦六隻、巡洋艦六隻近海を遊弋し、四日午後歸港、黄金山下の外港に投錨したのである、但し當時に於ける太平洋艦隊の勢力は左の通りであつたのである。

露國太平洋艦隊

旅順方面

司令長官(旗艦「ペトロバウロウスク」)
參謀長

海軍中將 スタルク
海軍大佐 エベルガルツ

參謀

海軍大尉 アザリエフ

參謀

海軍大尉 ヒレメテフ

參謀

海軍少尉 スミルノフ

水雷士官

海軍大尉 デニソフ

砲術士官

海軍大尉 ミヤキシエフ

司令官(旗艦「ツエザレウキチ」)

海軍少將侯爵ウフトムスキ

參謀

海軍大尉 スタフラキ

艦名	艦種	噸數	速力	官名	氏名
ペトロバウロウスク	一等戦艦	一〇、九六〇	一六、九	海軍大佐	ヤーコレフ
ツエザレウキチ	右 同	一二、九一二	一八	右 同	グリゴロウキツチ
レトウキザン	右 同	一二、九〇二	一八	右 同	シチエンスノウキツチ
ペレスウエート	右 同	一二、六七四	一八	右 同	ポイスマン
ポベード	右 同	一二、六七四	一八	右 同	ザツアリヨンスイ
ポルターワ	右 同	一〇、九六〇	一七	右 同	ウスペンスキー
セワストーポリ	右 同	一〇、九六〇	一七	右 同	チエルヌイシエフ
バヤーン	一等巡洋艦	七、七二六	二一	右 同	ウキーレン
バルラーダ	二等巡洋艦	六、七三一	一九、三	右 同	コロスソーウキツチ

チーヤートナ	二等巡洋艦	六、七三一	一九	海軍大佐	ザレスキー
アスコリド	右 同	五、九〇五	二三、三六	右 同	グラムマチコフ
ボヤーリン	三等巡洋艦	三、〇二〇	二二	海軍中佐	サルイチエフ
ノールキク	右 同	三、〇八〇	二二	右 同	フォン、エスセン
ザビヤートカ	右 同	一、二三六	一四、二	右 同	レベテフ
グレミヤーシチー	砲艦	一、四九二	一四、五	右 同	ザゴリヤレスキー、キーセク
アツワージヌイ	右 同	一、四九二	一四、二	右 同	エルジツコウキツチ
ギリヤーク	右 同	九六三	一二	右 同	アレキセーエフ
ボープル	右 同	九五〇	一一、二	右 同	ブーブノフ
フサードニク	水雷砲艦	四〇〇	二〇	右 同	ダウイドフ
ガイダマーク	右 同	四〇五	二〇	右 同	ストラタノキウツチ
ボエウオイ	驅逐艦	三五〇	二七	右 同	エリセーエフ
ブチーテリヌイ	右 同	三五〇	二七	海軍大尉	フメリヨフ
ベズボシチャーツヌイ	右 同	三五〇	二七	右 同	ルーキン
ベズストラーシヌイ	右 同	三五〇	二七	海軍中佐	チンメルマン
ベズシユームヌイ	右 同	三〇〇	二七	右 同	コーランツ
ウニマーテリヌイ	右 同	三一二	二六	右 同	シーモン
ウイースリーヌイ	右 同	三一二	二六	海軍大尉	リフテル
ウヌシューテリヌイ	右 同	三一二	二六	右 同	ボゾーシキン
ウラーヌツヌイ	右 同	三一二	二六	右 同	カルツオフ
レシューテリヌイ	右 同	二四〇	二七、五	海軍大尉	コルニリエフ
セルヂーツイ	右 同	二四〇	二六、五	右 同	クージミン、コロワーエフ
レイテナント、ブラーコフ	右 同	二八〇	二三、五	海軍中佐	イワーノフ

ボイキー	右 同	三五〇	二六	右 同	ツウキングマン
ブルヌイ	右 同	三五〇	二六	右 同	ボゴレリスキー
グロゾウオイ	右 同	三一二	二六	海軍大尉	シエリチンガ
スメールイ	右 同	二四〇	二六、五	海軍中佐	フォン、シウリツ
ストロジエウオイ	右 同	二四〇	二六、五	右 同	キーツキン
ストレグーシチー	右 同	二四〇	二六、五	海軍大尉	クージミン、コロワーエフ

以下三隻は開戦後に至りて竣工したるものゝ如し

スコールイ	右 同	二四〇	二六、五	右 同	ホメンコ
ラジヤーシチー	右 同	二四〇	二七、五	海軍中佐	シモノフ
ラストローブヌイ	右 同	二四〇	二七、五	右 同	サークス

以下四隻は開戦後就役せるものゝ如し

ストロイヌイ	右 同	二四〇	二六、五	海軍大尉	不詳
シューリヌイ	右 同	二四〇	二六、五	海軍大尉	ホドローウキツチ
ストラーシヌイ	右 同	二四〇	二六、五	海軍中佐	ユラソフスキー
スターツヌイ	右 同	二四〇	二六、五	右 同	コシンスキー
アムール	水雷布設艦	二、六五三	一七、四	右 同	ベルナドウキツチ
エニセイ	水雷布設艦	二、六五三	一八	右 同	ステパーノフ
アンガーラ	假裝巡洋艦	一、〇〇〇	二〇	右 同	不詳

大連灣

ラズボイニク	三等巡洋艦	一、三二九	一三	海軍中佐	リーウエン
ブジギート	右 同	一、三三四	一二	海軍中佐	ナザレプスキ

仁川

ワリヤーグ	二等巡洋艦	六、五〇〇	二三	海軍大佐	ルードネフ
コレーツ	砲艦	一、二一三	一三、五	海軍中佐	ベリヤーエフ

營口

シウーチ	右 同	九五〇	一一、七	海軍中佐	ギンテル
------	-----	-----	------	------	------

上海

マンヂウール	右 同	一、四一六	一三、三	右 同	クロウン
--------	-----	-------	------	-----	------

浦鹽方面

ロシーヤ	一等巡洋艦	一二、一九五	一九、四	海軍大佐	アルノートフ
------	-------	--------	------	------	--------

司令官 (旗艦「ロシーヤ」)

海軍大佐 レイツエンシテイン

グロモボイ	右 同	一二、三五九	二〇	右 同	ダビッチ
リユーリク	右 同	一〇、九三六	一八、八	右 同	マツセウキツチ
ボカツイリ	二等巡洋艦	六、六七五	二三	右 同	ステムマン
レーナ	假裝巡洋艦	一〇、六七五	一九、五	右 同	不詳

右の外水雷艇十七隻内百噸以上百四十噸以下のもの八隻、七十六噸のもの二隻、二十四噸以下二十噸以上のもの七隻あり。

斯くて、聯合艦隊は情報により敵艦隊主力の旅順港外にあるを知つたので、二月六日午前一時、東郷司令長官は部下の司令長官司令官及艦長等を旗艦三笠に召集し、勅語を宣示し且左の如き戦策を示したのであつた。

- 一、聯合艦隊は、直に黄海に進み旅順口及仁川に在る敵の艦隊を撃破せんとす。
- 二、瓜生第二艦隊司令官は、第四戦隊(淺間を加ふ)及第九第十艇隊を率ゐて、仁川の敵に當り且つ其方面に於ける陸兵の上陸を掩護すべし。
- 三、第一、第二、第三戦隊及各驅逐隊は、直に旅順方面に向ひ、驅逐隊は闇に乗じて先づ敵艦を襲撃し、艦隊は翌日更に攻撃せんとす。

聯合艦隊は、右の戦策を實行せんが爲め、二月六日午前九時出港、直に戦場に向ふたのであるが、東

郷司令長官は、佐世保出發に際し、部下一同を代表し、勅語の奉答文を上つたのである。

臣 平 八 郎

謹テ奏ス茲ニ優渥ナル

勅語ヲ下シ賜ヒ臣等感激ノ至リニ堪ヘス臣ハ麾下ノ將卒ト共ニ本日佐世保軍港ヲ發シ叡旨ヲ奉體シ犬馬ノ勞ヲ盡シ以テ

聖恩ノ萬分ノ一ニ報ヒ奉ランコトヲ期ス出師ニ臨ミ臣平八郎誠惶誠懼謹テ奉答ス

既にして、彌々出發の時刻となつたので、旅順偵察の任務を有する出羽第一艦隊司令官は、第三戰隊及驅逐隊五隊、(第一、第二、第三、第四、及第五驅逐隊) 水雷艇隊二隊、(第九、第十四艇隊)並特務艦船三隻(春日丸、日光丸及金州丸)を率ゐて先發し、上村第二艦隊司令官は、第二戰隊を率ゐて之に續き、東郷聯合艦隊司令長官は第一戰隊を率ゐて又之に續き、瓜生第二艦隊司令官は、第四戰隊(淺間を加ふ)及陸軍運送船三隻(大連丸、小樽丸及平壤丸)を率ゐ、在仁川の露艦を處分し、陸軍兵の輸送を護衛すべき特別任務を帯びて之に續き、堂々として佐世保を出發し、九針岩附近に於て、露船「ロシヤ」號を拿捕し、瓜生戰隊は「シングル」島附近に於て聯合艦隊に分れ、第四戰隊(淺間を加ふ)水雷艇隊、春日丸、金州丸及陸軍運送船を率ゐる露艦隊撃滅の目的に向て進んだのである。

第四章 仁川沖の海戦

明治三十七年一月、朝鮮國仁川港に於ては、同港碇泊の列國軍艦時局に顧みる所あり、公使館及居留民保護の爲、其水兵を上陸入京せしめたので、人心甚しく動搖し、一人として其堵に安んずるものなき狀況であつたが、是迄仁川に碇泊中の露艦は、悉く旅順に歸り「ワリヤーグ」一隻のみとなつたのであるが。我軍艦千代田は、一月十八日を以て仁川に入港し、朝鮮國警備の任に服することとなり、其後同港に在泊したのである。

千代田入港と同日、露國軍艦「コレット」入港し、「ワリヤーグ」と共に千代田を夾みて投錨したのであるが、三十一日に至り、更に其東方に移泊し、形勢何となく警戒すべき状態を示すに至つたので、千代田艦長海軍大佐村上格一は、萬一の際に處せんが爲、二月三日錨地を仁川埠頭に通ずる水路口に移し、以て進退の便を圖つたのであるが、同五日に至り國交斷絶の急電に接したので、全艦員に警戒を命じ、將に佐世保より來らんとする第四戰隊に會する爲、七日午後密に航海の諸準備を整へ、夜半徐に錨を揚げ、闇に乗じて出港し八尾島を回りに外洋に出たのである。

瓜生第二艦隊司令官は、二月七日午後四時三十分主力艦隊に分れ、第四戰隊、軍艦淺間、第九、第十四水雷艇隊、春日丸、金州丸及陸軍運送船隊を率ゐ、仁川港外に向て北上したのであるが。薄暮頃、

七發島の北東に於て、先頭に占位したる軍艦高千穂は、突然にも其衝角を以て鯨を突き、海水之が爲に紅くなつたので、一同快哉を呼んで戦運の芽出度を祝したといふことである。斯くて、翌八日黎明千代田の無線電信を感受し、次に同艦と會し、仁川碇泊中なる露艦の動靜等を詳知したので、諸般の情況に鑑み陸兵を仁川に上陸せしむべきに決し、先づ同港附近に到り、各艦長を旗艦に集め、各艦船の部署を定め、臨時派遣司令官陸軍少將木越安綱に信號し、運送船錨地に到着せば、最も迅速に陸兵の揚陸を了らんことを希望し、午後二時十五分、隊列を作つて仁川港に向ふたのである。午後四時二十分には、艦隊八尾島附近に達したので、千代田高千穂は列を離れて前進し、第九艇隊は其後方に従ひ、淺間は少し後れて運送船隊の先頭に立つたのであるが、此時偶々「コレイツ」が出港し來つたので千代田、高千穂は更に前進し、彼我漸く接近し、「コレイツ」は二艦の左側を通過する如き狀況となつたので、淺間は運送船隊を掩護せんが爲、直に左旋して、「コレイツ」と運送船隊との中間に入り込み第九艇隊は、「コレイツ」を左舷正横に見る頃、二隻づゝ分離して其左右を夾んだのである。此際其一隻は誤つて淺堆に擱坐したので、他の三隻は「コレイツ」に向ひ疾走して之に薄つたのである。此時「コレイツ」は八尾島附近に於て右方に回頭せんとし、我艇隊の近づくを見て砲火を開いたのであつた、此時は、時正に四時四十分で、日露戦争開戦の第一砲火は、此時此際「コレイツ」によつて開かれたのである。

此時既に、前針路に復して進航しつゝあつた淺間は、之を見て旗艦浪速に對し、「コレイツ」發砲せりと信號し、運送船隊に「引返せ」と命じ、己も亦沖合に出でんとしたのであるが、「コレイツ」は直に錨地に退却したので、再び前針路に復し、浪速新高も一時少しく左方に變針したる後、亦直に港内に向て進んだのであつた。

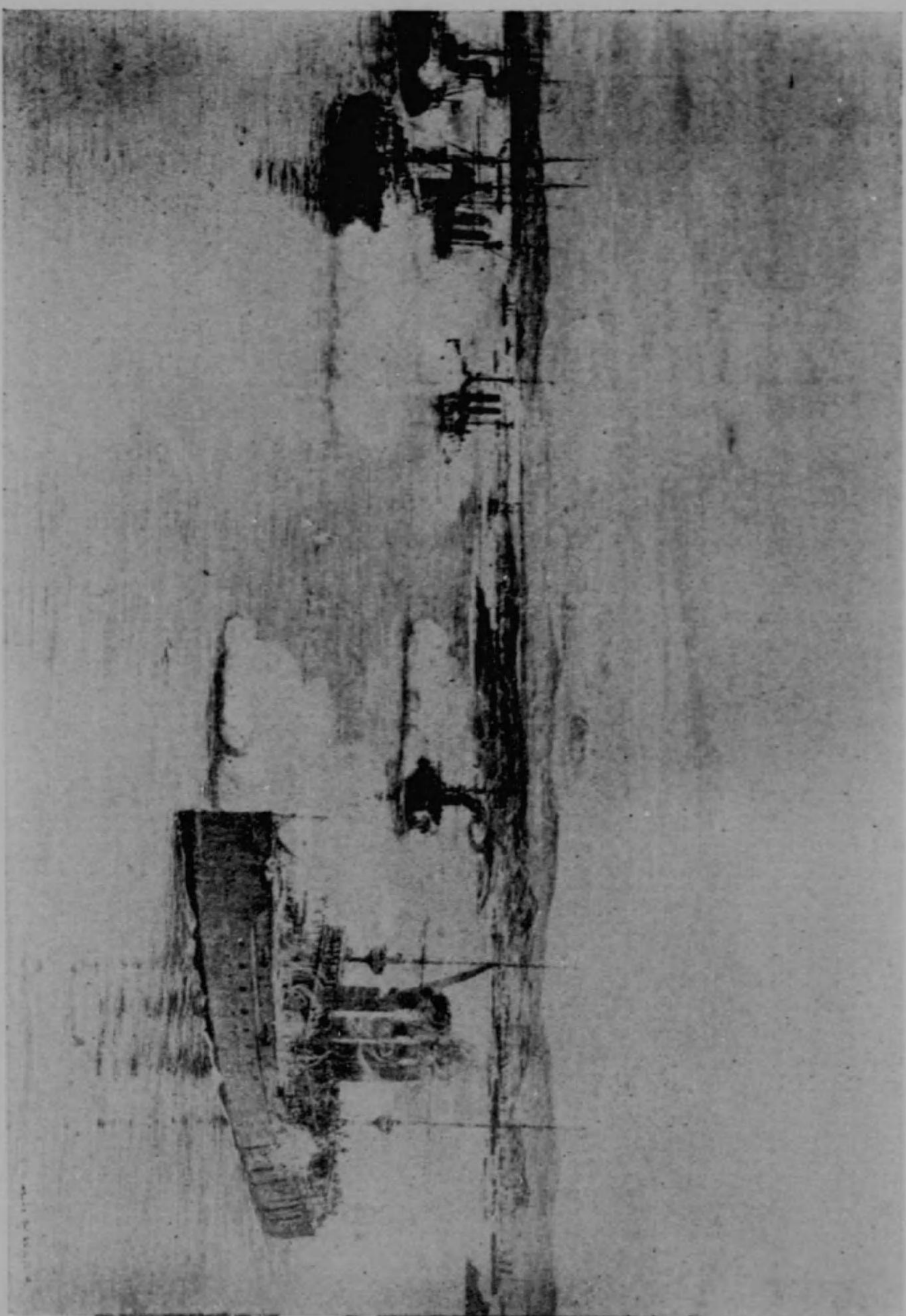
(備考)「コレイツ」艦長の報告によれば、同艦は此際京城露國領事より、秘密文書を受領し、之を旅順口に送らん爲出港したのであるといふことである。又同艦は、日本水雷艇の發射管の覆を撤して近づき來つたより考ふるも、彼等の此運動は我艦をして外港に出づる能はざらしむるの考察であつたであらう、自分は國交斷絶の事實を知らぬので、舊錨地に引返したといふことである。

此日は是で済んだのであるが、第二日目は、豫定の如く上陸を行ひ、九日午前二時半頃には、全然揚兵の事業を了つたのである。此際瓜生第二艦隊司令官は、高千穂艦長よりの通信により、翌九日午前六時頃迄には、揚兵事業の終了すべきことを確めたので、參謀海軍大尉谷口尙眞を仁川に遣はし、帝國領事を介し、露國領事を経、公文を在港の露國先任艦長に送り、九日正午迄に露艦の退去を要求し若し之を肯せざれば已むを得ず港内に於て砲撃を開始すべきを通告し、又我領事を介し、内外の官公衙の長及居留地會長にも之を通知し、且砲撃は九日午後四時までは實行せざることをも通告したのであるが、尙別に英、佛、米、伊、韓五國の先任艦長にも公文を送り、若し彌々戦鬪を交ふる場合に於

ては、危害を列國軍艦に及ぼすやも計り難き趣をも通知し、午後四時迄に錨地を安全なる場所に變更せられんことを請求し、午前五時水雷艇を港外警戒中の千早に送り、共に蔚島附近を巡邏せしめ、尋で諸艦艇の配備を定め、露艦の出港を待つたのである。又他の一方に於ては、高千穂、明石及第九艇隊は七時頃揚兵掩護の任務を終り、運送船と前後して仁川を發し、千代田は九時二十三分を以て抜錨し、何れも「フキリツプ」島の東側なる艦隊錨地に到達し、第九艇隊は炭水補給の爲直に港口附近に回航したのである。然るに錨地變更の要求を受けたる列國艦長中、連署して抗議を唱ふるものあるのみならず。露艦の態度も亦甚だ沈靜で出港の状態少しもなかつたのである。然るに午後〇時十分頃、最も内方に碇泊したる淺間は遙に「ワリャーグ」及「コレーツ」の出港するを認め、直に之を司令官に報告し、茲に日露戦争の緒戦たる仁川沖海戦を見るに至つたのである。

仁川沖海戦の事實は、三十七八年海戦史掲載する所繁簡其宜しきを得、且當時の情勢を知るに最も適當なりと信ずるが故に、其儘に之を左に引用することにした。

二月九日午後〇時十分、淺間より露艦出港の信號あるや、瓜生司令官は、直に各艦艇をして豫定配置に就かしめ、全軍の戦備立ところに成れり、時に露艦は八尾島の北方約四海里を航し、橋上高く軍艦旗を掲げ、戦闘の決意を示し二艦雁行して徐に航下し來る、是に於て淺間、千代田は前頭に進み浪速、新高之に次ぎ、高千穂、明石は後方に控へ、第十四艇隊（鵜は千早と共に蔚島附近にあり）は



旗艦浪速の非戦闘側に在りて襲撃の時機を俟てり。此日、天朗に氣清くして南東の微風あるも波濤起らず。「コレイツ」は「ワリヤグ」の左舷側に位置して、零時十五分には彼我の距離約七千米に接近せしを以て、淺間は敵を左舷に見、其前路を横斷しつゝ、同二十分「ワリヤグ」に向ひ轟然砲火を開き、敵も亦直に應戦し、次で淺間は右方に旋回し、敵を艦首に置きて猛撃を加へ、千代田は専ら「コレイツ」に當り、浪速、新高も亦砲火を交へ、高千穂、明石は機を見て緩射を試み、各艦持重して散布せる淺堆を避け、急潮を弛駢し、彈着漸次精確となりて、巨彈屢「ワリヤグ」に命中し火焔盛に颯れり、敵亦應戦大に力めしも、遂に支ふる能はず、「ワリヤグ」先づ右方に回頭して八尾島の陰に隠る、瓜生司令官乃ち進撃を淺間に命じ、同艦は速力を増して之を追ひ、千代田も亦暫く隨航して之を追ひしが、速力及ばざるを以て之を中止し、後浪速新高の列に入り、獨り淺間は「ワリヤグ」を追ふて愈々猛撃を續け、敵は損害甚しきものゝ如く艦體著しく左舷に傾き、火焔に包まれつゝ仁川錨地を望みて遁走し、「コレイツ」も亦之に隨へり、一時十五分に至り仁川錨地に近づきたるを以て、淺間は發砲を止め、針路を反轉し諸艦艇相前後して「フキツブ」島附近に至り、第九艇隊の三隻も港口附近より來會せり、此一戦敵彈の命中するものなく我は寸害をも被らず。此際に於ける「ワリヤグ」艦長が先任艦長として取りたる所置態度は敵ながら天晴と思はざるを得ざる状態であつた。同戦史備考には、「ワリヤグ」艦長「ルードネフ」大佐の記事を掲げてあるが、

其大要によれば。

(備考)「ワリヤーグ」艦長の戦闘記事によれば、同艦長は、午食終るや、總員を集め、大要左の如き口達を爲せり。余は本日日本司令官より、戦闘行爲を開始するに付、正午迄に出港せんことを要求せる書面を受領せり。勿論吾人は優勢なる日本艦隊と戦闘を試みるの覺悟にて進出し、本艦も我等の一身も決して敵に委せず、最後の血滴迄戦はん、諸子克く此意を體し、固く神明を信仰し吾皇と祖國との爲、勇壯に戦場に赴くべし。(ウラー)尋で軍樂隊に國歌を奏せしめ、拔錨し「コレイツ」を従へ港口に向へり。云々、

瓜生司令官は、午後一時五十分諸艦を率ゐて「フキリツア」島附近に假泊せしに、四時三十分仁川方面に方り、爆聲地を撼かし、白煙天に漲るものあり。仍て直に明石及水雷艇眞鶴をして之を偵察せしめ、尙命令を發して各艦艇の行動を豫定し、以て敵の遁走に備ふ。明石、眞鶴は仁川錨地に近づくに及び「ワリヤーグ」の火災に罹りつゝあるを望見せしも、「コレイツ」の艦影を認めざるを以て、直に之を司令官に報じ、尙敵艦を距る四千米の地點に進み、詳に偵察を遂げ、「ワリヤーグ」の艦體は著しく左舷に傾きて後部沈水し、後部上甲板面及艦窓より熾に火焰を吐き、軍艦旗、艦首旗の如きは、依然掲揚しあるも、艦上人なく、英艦の艦尾には幾多の端舟繋ぎありて、其狀殆も救助に使用したるもの、如く、「コレイツ」は既に爆沈して今や深く海底に沈み、僅に其端舟五隻の月尾島前に

遺棄せられあるを見るのみ、「ズンガリー」號は猶月尾島燈臺の下に碇泊するを復命す、是に於て全體の兵員は東方に向ひて祝聲を連呼せり。

此時已に夜に入り、敵の動靜を詳にすること能はず、瓜生司令官は、各艦をして益々警戒を嚴にしめ、尙第十四艇隊の二隻を青島附近に、第九艇隊の一艇を八尾島附近に、他の二艇を「フライング、フキツシ」水道に派し、又千早を「ボンデキ」島附近に置き、以て遙に旅順方面の敵に備ふ。此夜八時、商船「スンガリー」號は自ら爆沈し、火災に罹りたる「ワリヤーグ」も亦遂に覆没せり。

斯くて仁川沖海戦は終つたので瓜生司令官は戦後の始末を行ひつゝあつたのであるが、二月十日に至り畏くも左の勅語を賜ふたのであつた。

聯合艦隊第四戰隊ハ陸軍ヲ擁護シ仁川上陸ノ任務ヲ全クシ加フルニ敵艦ヲ港外ニ擊破シ遂ニ之ヲ殲滅セシムルニ至ル
朕深ク之ヲ嘉尙ス

十三日瓜生司令官は左の奉答文を捧げた。

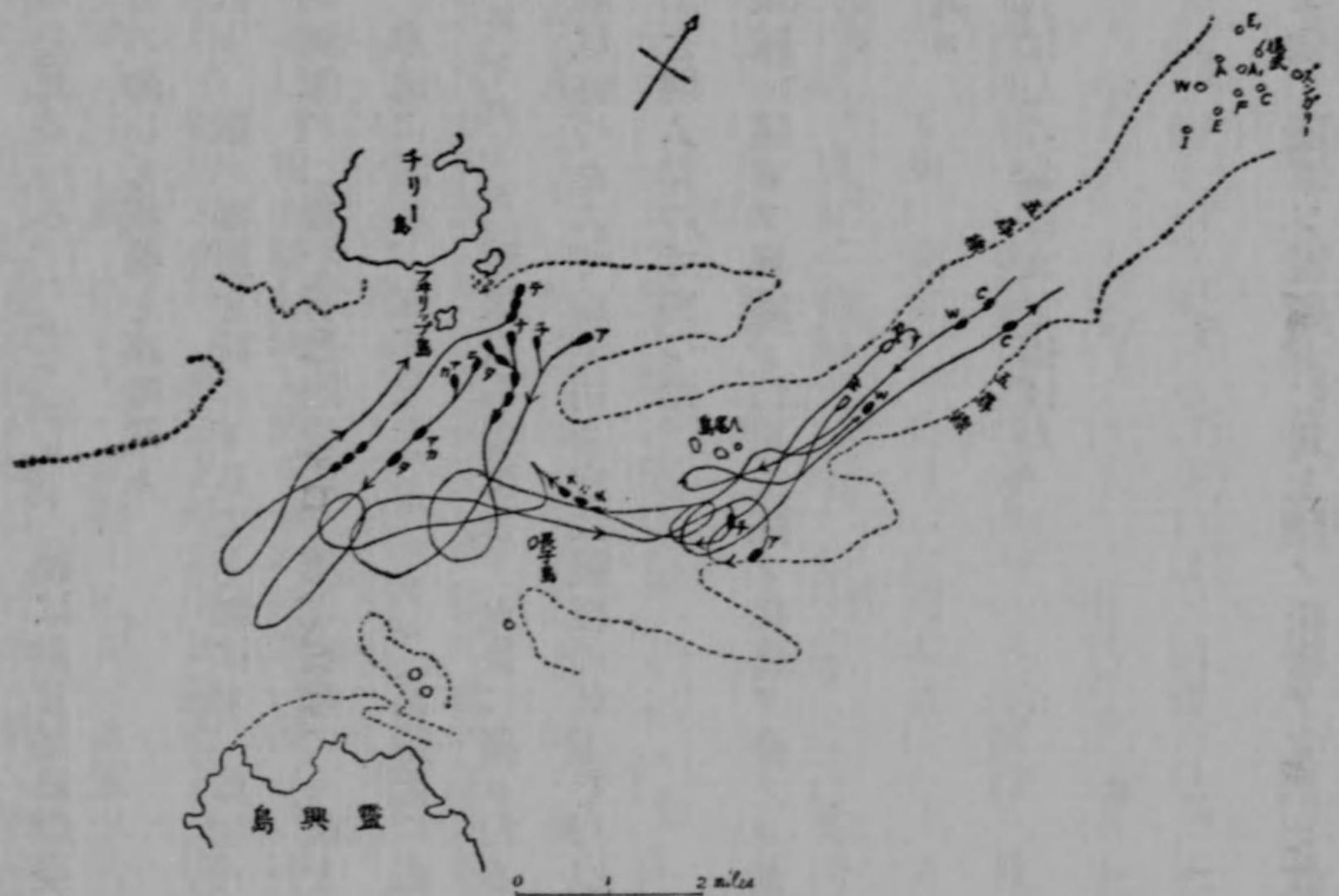
臣 外 吉

謹テ奏ス

陛下ノ御稜威ニ依リ陸軍ヲ護衛シ仁川上陸ノ任務ヲ完クシ敵艦ヲ港外ニ擊破シタルニ對シ優渥ナル

明治三十七年二月九日
仁川沖八尾島附近
戦闘圖

ナ	浪速
ア	浅間
チ	千代田
タ	高千穂
アカ	明石
ニ	新高
テ	新隊
W	ワリヤーク
C	コレーツ
S	スガリ
B	揚武
E	英商
A	米艦
F	佛艦
E	英艦
A	米運送船
W	ワリヤーク
C	コレーツ
I	伊艦



勅語ヲ下シ賜ヒ臣等感激ノ至リニ堪
ヘス臣外吉麾下將卒ト共ニ益々奮
勵
皇恩ノ篤キニ報ヒ奉ランコトヲ期
ス臣外吉誠恐誠惶謹テ奉答ス
因に、此際に於ける露國の負傷者に
對しては、露國公使は英國公使を經
て、之が治療を我林公使に請ひ、我
は之を容れ、仁川赤十字病院に移し
て救療せしめたといふことである。
(明治三十八年海戦史第一卷第七〇頁の項に據
る)

第五章 旅順口攻撃

聯合艦隊の旅順攻撃は、海戦として之を見るべき性質のものではない、従つて海戦史談として之を掲ぐることは適當でないのである。さりながら、日露戦争の勝利は、旅順の奇襲を以て第一の原因とするので、對露作戦の大方針として決定されたる重要性を有することは、既に前にも述べた通りである、況して其一部とも謂ふべき驅逐隊の襲撃及艦隊對艦隊の戦闘は、海戦として之を見るの價値あるが故に、今茲に聯合艦隊の旅順攻撃を略叙して、讀者の精讀を請はんと欲するのである。

聯合艦隊は、二月六日佐世保軍港を出發し、翌七日午後三時朝鮮の南西端にある「シングル」水道に集合し、旅順仁川の兩方面に於ける露艦の近狀を確知したる東郷司令長官は、茲に命令を發し、航行序列を定め、天祐を確信して大成功を遂ぐべきを訓示したのであつた。此時、其附近にある七發島の南方に、一汽船の南航するを見たる上村第二艦隊司令長官は、吾妻をして之を追はしめ、露國商船「アルゲン」なるを知り、直に之を拿捕せしめたのである。既にして第三戦隊は、豫定の行動に従ひ、單獨に先發し、次第に速力を加へ小青島附近に向ひ、第四戦隊之に次ぎ、艦隊に分れて仁川に向ひ、東郷司令長官は、午後五時第一第二戦隊及驅逐隊を率ゐて旅順に向ひ前進したのである。

第三戦隊は、八日午前八時頃小青島附近に達して其附近を偵察したのであるが、何の異状をも認めぬので、同十一時を以て本隊に歸投したのである。そこで、各隊は更に進んで圓島（旅順の東微南四分一南約四十四海里にある小島）の南東方に到達し、茲に彌、旅順攻撃の行動に着手し、東郷司令長官は驅逐隊に對し、

豫定の如く進撃せよ、一同の成功を祈る。

の信號命令を發し、第一、第二、第三驅逐隊は旅順口外の敵艦隊に對し、第四、第五驅逐隊は大連灣に向ひ、全艦隊の祝聲に送られて、暮靄の裡に隠れたのである。そこで主力艦隊も、彌々明旦を以て旅順口外に現はるべき豫定行動に移ることになつたのである。

（驅逐隊の旅順口外泊地に對する夜襲）。

二月八日午後六時、第一、第二、第三驅逐隊は、圓島沖に於て艦隊の祝聲に送られ、速力を増加して旅順口外に向ひ航進し、先づ第一に、遙に旅順口の探海燈を眺め、老鐵山高角に向つたのであるが。途中二個の燈光を發見したので、之を諦視したる結果、警戒の任務に服しつゝある敵の驅逐艦なるを知り、嚴に警戒を加へ、艦尾燈を滅して敵の注意を避け、右方に回頭しつゝ、我所在を晦ましたのであるが、此際、不幸にも第二驅逐隊の二番艦は、一番艦雷と衝突して艦首を傷け、續航に堪えざる状態となつたので、三番艦電は之が爲に前進を妨げられて雷の所在を見失ひ、同隊の各艦は遺憾ながら

全然分離して第一驅逐艦と相失し、第三驅逐隊とも互に相失し三隊各別個の行動を取らざるを得ざる状態となつたのである。

第一驅逐隊は、敵を右方に避けたる後原針路に復し、十一時八分始めて老鐵山の燈光を認め之によりて艦位を定め、更に敵艦隊の探海燈を目標とし、速力を低下し、徐に敵艦に近づいたのである。此時正に午前〇時二十分、弦月未だ昇らず、獨り敵の探海燈のみ海面に躍り、闇中覺束なくも幾多巨艦の横たはるを發見し得たるのみにて、四圍の状態如何にも凄愴を極めたといふことである。

第一驅逐隊は、同司令海軍中佐淺井正次郎の襲撃命令に基き攻撃を開始し、其先頭に立ちたる白雲は左方に回頭し、〇時二十分、先づ三煙突の敵艦を襲ひ、更に一撃を二煙突の一艦に試み、全速力を以て南方に退却したのであるが、毎發皆悉く爆發するを認めたといふことである。二番艦朝潮は、白雲の航跡を進み、之に倣ひ左方に回頭し、〇時三十二分先づ「ペレスウェイト」型の戦艦を襲ひ、尋で「レトウイサン」型の戦艦に迫り、魚雷の命中を認めて南々東に急航したのであつた。

敵は我襲撃を覺知し、各艦俄に騷擾し始め、砲聲殷々として四方に起り、彈丸雨の如く我驅逐艦の所在に落ち、如何にも物すごき有様となつたのである。斯くて、其後を受けたる三番艦霞は、朝潮に倣ひ左方に回頭するや忽ちにして敵の探海燈に照射せられたるも、未だ砲撃を蒙むらざるに乗じ、〇時三十三分二橋三煙突の一艦に第一撃を加へ、尋で「バルラダ」型艦を襲ひ、敵の艦側より水柱の奔騰

するを見、砲撃を受けながら全速南方に避過したのであつた。殿艦は、屢々探海燈に照射せられたのであるが、〇時三十三分左方に回頭し、艦首を西に定め、同三十五分「レトウキザン」型艦に一撃を加へ、尙西駛して二橋三煙突の一艦を襲ひ、共に水雷の爆發するを認め、雨飛の彈丸を冒し全速南方に退却したのであつた。

是より先、第二驅逐隊は各艦全く相分離したので、同隊司令海軍中佐石田一郎は、獨り其乗艦雷を率ゐ、豫定の針路を疾走して旅順沖に向ひ、九日午前〇時五分、敵の探海燈と老鐵山砲臺の燈光とによりて其艦位を按し、微速力にて正北方に潜航中、屢々敵燈の照す所となつたのであるが、幸にも敵に發見せらるゝことなく、同三十分に至り間中敵の艦列を認め得たので、漸次速力を増加して之に近接し、同三十五分急に右方に回頭しつゝ、二橋三煙突の一艦に向ひ水雷を發射したのである。而して全速退航中、「アスコリド」型艦より照射されたるも飛彈悉く艦上を掠めて損害を受けず、終に無事歸隊することが出来たといふことである。又第三驅逐隊は前續隊と分離したる後、北西方に探海燈の光芒を認め、其必ず敵艦なるべきを察し、暫く行進を停めて動靜を窺ひつゝあつたのであるが、會々驅逐艦二隻の接近し來るものがあつたので、近づいて之を見れば、正に第二驅逐隊の電、朧の二艦であつた。其時雷より第三驅逐隊司令海軍中佐土屋光金に對し、朧は故障あつて大速力には堪へぬから襲撃に参加し難いが、本艦は司令の乗艦を見失ふたので、爾今貴官の指揮を受け度と申込んだ、當時

第三驅逐隊にても殿艦連の所在分明ならざる折柄、土屋司令は雷の請求を許し之を加ふることに決し探海燈の光を目標として進航したのであつたが、暫くして十數隻の敵艦の碇泊しあるを發見したのである。此時恰も前續隊は襲撃を決行したるものゝ如く、敵の諸艦は俄に探海燈を點し、盛に砲撃を開始したので、土屋司令は好機逸すべからずとなし、午前〇時三十分、先頭艦薄雲は左方に回頭し、先づ「チャナ」型の敵艦に一撃を加へ、續て其西隣なる一艦を襲ひ、二番東雲も之に續いて敵に接近し、同四十二分右方に回頭して魚雷を發射し、共に雨の如き飛彈を冒して南東方に退航したのであつた。此際殿艦雷は、砲火を冒して前續二艦の中間より突進し、同四十五分左方に回頭し、「チャナ」型艦に對して發射を行ひ、更に轉じて「レトウキザン」型を襲ひ、然る後退航したのであつた。第三驅逐隊の三番艦連は、八日午後十一時頃、僚艦を見失ひ、前方遙に二點の燈光を認めたので、或は僚艦にあらずやと思考し、之に近づいたのであるが豈計らんや、疑もなく航海燈を點じつゝ警戒に従事する敵の驅逐艦であつたので、直に之を避け、更に僚艦を搜索したのであるが、終に之を發見し得ず、遂に單獨に敵艦隊を襲撃するに決し、旅順口の燈光に向ひ、續いて艦首を黄金山頂に轉じて潜行したのであつたが敵は俄に探海燈を點じたので、午前一時二十五分、中央とも思ひき「ボルタワ」型の敵艦に近づき、之を襲撃して退航したのであつた。

第二驅逐隊の朧は、雷と衝突して艦首を傷め、進航につれ白波を起こし、潜航に不適當なる状態とな

つたが、操舵にして若干の故障あるにもせよ、艦體には異状がないので、單獨旅順に向ひ、午前一時過ぎ我各艦が襲撃を終り、敵の探海燈も砲火もやゝ緩慢となつたのに乗じ、徐に港口に近づき、同四十五分頃、四煙突の一艦に向ひ水雷を發射し、砲火を冒して南東方に退却したのである。

斯くの如くして、旅順口にある露國艦隊は大なる損害を受けたのであるが、我驅逐隊の奇襲も其終結を告げたので、思ひ思ひに歸航の途に就き、九日夕刻朝鮮北西岸の集合地點に會し、翌十日を以て仁川港口附近の假根據地に歸着したのである。

此夜襲の爲、敵の戦艦「ツエサレウイチ」は、舵機室を破壊せられて浸水し、左舷に傾くこと十八度に及んだといふことである。戦艦「レトウイザン」も亦、水線下唧筒室の艦側に大孔を穿たれ巡洋艦「バルラーダ」は、中央水線下汽罐室の附近を傷つけられたと云ふことである。尙當夜のことに關し、露國海軍大佐「ブーノフ」の記する所によれば。

予は、一月二十六日（我二月八日）午後四時、「スタルク」中將夫人の許にて、大守附外交事務官「ブランソン」より、内密に雙方公使の召還せられたる事實を聞きたり。是より先、我軍艦は長官の信號により毎夜水雷艇防禦を行ひたるも、防禦網は張らず斯る前後の關係より、水雷艇防禦の信號ある毎に之を以て操練と心得たるのみならず、概して夜中の哨戒は緩にして大口徑砲は裝填せず、總兵員は脱衣して眠り、或艦の如きは釣床内に入るを許せり。二十六日より二十七日に亘るの夜の

如き、外港碇泊の多數軍艦は、大艇を用ゐて石炭を搭載し、戦争の避くべからざること明白なりしにも拘らず。全艦隊は警戒に關し、何等の處置をも取らざりしなり。而して二十六日の夜、二隻の驅逐艦は「決して射撃すべからず、若し疑はしきものを見たる時は引還して長官に報告すべし」との訓令を受けて巡邏に出でたり。此結果我驅逐隊は、襲撃を決行せんとして航行せる日本驅逐隊に遭遇せるも、之に對して砲火を開かず、訓令の趣旨を遵奉して引還し、敵と殆ど同時に艦隊に歸投し、其中の一隻の艦長は、敵驅逐艦出現の報を旗艦に齎したるとき、「バルラーダ」は既に爆發の難に遭ひ、又「ツエサレウキチ」も艦底に水雷爆發したるとき、始めて砲火を開き、日本驅逐隊は連續襲撃し來れり。爆破せられたる「バルラーダ」は、西方砲臺下の岸に乗上げて坐礁し、同じく「レトウキザン」は内港に向はんとして通路の礁上に坐して横に港口を塞ぎ「ツエサレウキチ」は之に踵きて同方向に向ひ、「レトウキザン」を避けんとして同しく坐洲せり。月出つるに及び、四邊の光景漸く靜寂に歸し、哨艦に當れる二隻の外の驅逐艦は、内港に在りて敵の襲撃を知るや否や直に汽釀追撃の命下りたれども、其出發後何物をも發見する能はずして早朝空しく歸航せり。

又露國某將校の記事なりとして傳ふる所によれば。

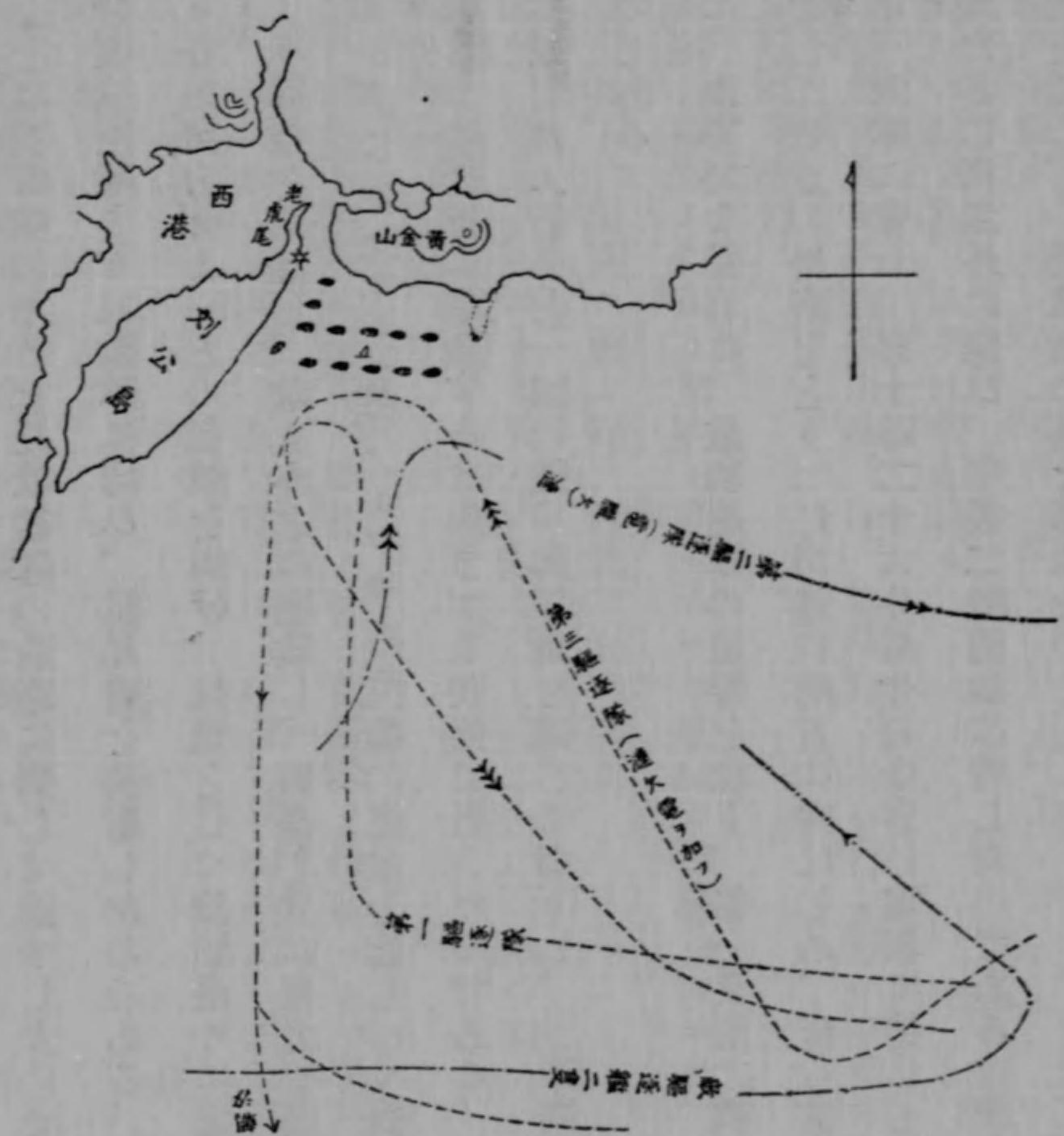
一月二十六日は、恰も一般に「マツヤ」と命名せる婦人の祝日なるを以て、上下共に之を祝し、艦隊

の將卒過半陸上に在り「スタルク」中將夫人も亦、此名を冒せる爲、陸上官舎に舞踏會の催あり。海軍の主なる將校を招待し、陸軍將校は某軍醫夫人の許に集り、夜半砲聲を港外に聞きしも、此夜軍艦「レトウキザン」に於て夜中演習射撃の擧あるを聞き、別に疑念を抱くものなかりしが、須臾にして砲聲再び起り、刻一刻激甚を加へ、尋で警戒の號音あるに及び、始めて日本驅逐隊の夜襲せるものなるを知り、衆皆驚愕し、各先を争ふて其勤務艦廳に歸り、軍隊は急速警戒線へ進み出て、應戦せんことを努めたりと雖、或は隊伍を離るゝものあり、或は彈藥の携帯を忘るゝものあり、殊に二三砲臺の如きは、彈丸火藥の備なき等、防備未だ完からざりしを以て、日軍若し急に陸戦隊を上陸せしむるが如きことあらば、之を防ぐの策なきを思ひ、孰も戦々兢兢として終に一夜を過せり。とあるので、當夜の情況も推し測られ、誠により訓戒を後世に貽したのである。又同夜大連灣に向つた第四第五驅逐隊は、豫定の如く行動したのであるが、灣内に敵艦を認めぬので夜襲を行ふことなくして歸航したのであつた。

又、他の一方に於て、聯合艦隊は二月八日午後六時、驅逐隊を先發せしめたる後、豫定の如く行動し迂回の航路を取りて旅順口に向つたのであるが、翌九日早曉敵情を探知する爲、出羽司令官に電命し、旅順口外の敵情を偵察せしめ、同戦隊は命を受け速力を増加して前進したのである。

第三戦隊は、旅順口に近づき、煙靄模糊の間に敵艦隊を認めたのであるが、更に七千米まで接近し、

旅順口外驅逐艦襲撃行動概略圖



敵の大艦十二隻其他砲艦水雷敷設艦等港外に羅列し、其三四隻は前夜の襲撃に罹り、或は傾斜し或は擱岸する等、相當の結果を擧げ得たる模様であるが、「アスコリッド」及「バヤーン」の二隻と驅逐艦數隻とが其附近を徘徊して居たのみであつた、出羽司令官は之を視て聯合艦隊に歸投し、左の報告を提出した。

敵の大部分港外にあり、我七千米まで近づくと砲火を開かず、敵艦數隻は我水雷に罹りたるものゝ如し、之を攻撃するの利なるを思ふ。

そこで、聯合艦隊は、第一戦隊、第二戦隊、第三戦隊の順序にて旅順口に近づいたのであるが、敵艦「ヂャナ」は我艦隊の来るを見我艦隊の前路に對して進來したのであるが、少時にして退却し、十一時三十分頃遠距離より我艦隊に向ひ、艦尾砲を發射したのである。東郷司令長官は、「勝敗の決此一戦に在り各員努力せよ」との信號を掲げ、猛然として旅順港外に近づいたのである、斯くの如くして正午頃より砲撃を開始し、敵も亦之に應戦し、砲臺と共に死力を盡して戦ふたのであるが、敵は「アスコリッド」「バヤーン」及「ノーウキク」三艦の運動を起しつゝ對戦するのみ、其他の諸艦は碇泊のみ、甚しき騷擾裡に應戦するに過ぎざる状態であつたのである。斯くて、各戦隊は、右舷側の戦闘に於て猛撃を加ふること一回の後、其針路を轉じて南下し、〇時四十五分攻撃をやめて、歸航の途に就いたのである。

斯くて、東郷司令長官は、敵驅逐隊の追撃を慮り、第一及第二戦隊には高速を以て南航せしめ、第三戦隊をして任意の針路をとりて仁川港口附近に向はしめ、自ら第一、第二戦隊を率ゐ、二月十日午前八時第三戦隊に會し、同十時二十六分瓜生司令官の電報に接して仁川の戦況を詳知し、我艦隊の豫定集合地たる仁川港外に向ひ、午後二時同地に着したのである。此際東郷司令長官は、左の如き優詔と御沙汰を爲し、一同感激の涙を揮ふたのである。

勅語。

聯合艦隊ハ陸兵韓國上陸ノ任務ヲ完クシテ其西岸ヲ掃ヒ敵ヲ旅順ニ撃チテ其數隻ヲ破リ氣勢大ニ振フト聞ク

朕太タ之ヲ嘉ミス將士益奮勵セヨ

次で、皇后宮大夫子爵香川敬三は、皇后陛下の令旨を傳へたのであつたが其御令旨は、

皇后陛下令旨

我聯合艦隊ハ仁川及旅順ニ於テ大イニ敵艦ヲ撃破シタル趣

皇后陛下ノ懿聞ニ達シ深ク感賞アラセラル

同十三日、皇太子殿下よりも左の御令旨を拜したのであつた

皇太子殿下令旨

仁川旅順ニ於ケル海戦ノ勝報ニ接シ我艦隊ノ機敏ニシテ勇敢ナル行動ヲ嘆賞ス

十四日、東郷聯合艦隊司令長官は部下を代表し、御勅語に對し謹で左の如き奉答文を捧げたのである

臣 平 八 郎

謹テ奏ス

聯合艦隊カ初度ノ作戰ニ於テ勝利ヲ獲タルハ

大元帥陛下ノ御威徳ニ依ルモノニシテ之ニ對シ優渥ナル

勅語ヲ賜ハリ臣等感激ニ堪ヘス臣等尙益々奮勵殘敵ヲ海上ニ掃蕩シ以テ聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス臣平八郎謹テ奏ス

又皇后陛下の御令旨に對しては、

聯合艦隊初度ノ戦勝ニ對シ、優渥ナル

令旨ヲ賜ハリ臣等感激ニ堪ヘス今後尙益々奮勵シテ有終ノ勝ヲ收メ以テ令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス謹テ奉答ス

又皇太子殿下の令旨に對しては、

聯合艦隊初度ノ戦捷ニ對シ優渥ナル

令旨ヲ賜ハリ感激ニ堪ヘス尙今後益々奮勵以テ令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス謹テ奉答ス
の奉答文を捧げ感激の意を表したのであつた。

(驅逐隊の夜襲後に於ける旅順艦隊に對する作戰。)

爾後旅順港にある敵艦隊に對しては、此攻撃を第一次として攻撃の度數を累ね、或は風雪を冒して驅逐隊の襲撃を行ひ、或は港口を閉塞して敵艦を押込め、或は間接射撃を行ふて港内に避泊する敵の諸艦を苦めたのであるが、特に閉塞作業の如きは、我軍將士の如何に勇敢にして、報國の念に厚きやを表すべき悲壯なる戦話に富んで居るのである。斯くて、旅順攻撃は回を累ねて第八回に及び、其間

閉塞作業を執行すること三回、驅逐隊間の激戦二回、間接射撃一回等殆ど寧日なき攻撃を加へたのであるが、第一回閉塞作業實施の後、東郷司令長官は第一、第二戦隊を率ゐる二月二十四日旅順港の直接攻撃を行ひ、他の諸艦も之に参加したのであるが、此日は別に敵に對して施すべき奇策もないので著しき效果なくして已んだのである。此際露國艦隊は、一時旅順方面の攻撃に全然沮喪したる士氣も、損害を受けたる諸艦の修理を完了するに従ひ、漸く回復の色を示し。殊に露國海軍の第一人者とも稱すべき、世界的戦術家たる、海軍中將「ステバン・オシポウキツチ、マカロフ」新に艦隊司令長官に補せられ、舊司令長官「スタルク」中將に代り、近日中著任すべしとの報に接し、士氣頗る振興したといふことであるが、何に致せ、難攻不落の旅順は、攻者を苦むること頗る大に、其效果も渺々しからざる状態に苦んだのである。既にして第一驅逐隊及第三驅逐隊と敵驅逐隊との激戦もあり、相當に賑かなる場面を見るに至つたのであるが、間接射撃の効果は相當に大なりしものゝ如く、當時西港に碇泊する戦艦に大なる脅威を感ぜしめたといふことである。

第一閉塞隊は、二月二十四日第二閉塞隊は三月二十六日に實行せられたのであるが、遺憾ながら二回とも十分の効果を擧げ得ぬので、更に第三回の閉塞を行ふに決し、之が決行に先ち、潜に機械水雷を旅順口外に布設することに決定したのである。

此機械水雷布設事業は、諸戦隊驅逐隊等の掩護の下に、艦隊附屬布設隊司令海軍中佐小田喜代藏監督

の下に、第四、第五驅逐隊第十四艇隊及特務船蛟龍丸を以て之を實行すべき計畫であつたが、是實に露國艦隊が、常に旅順港口以東黄金山下を往復しつゝ、沖合に顯はれたる我艦隊に對應するを見、其海面に機械水雷を沈置して之を撃沈せんとするの企圖に基くものであつたが、水雷沈置の任務を有する驅逐隊艇隊及蛟龍丸は、十二日午後圓島の南東約二十五海里の位置に漂泊して諸準備を整へ、午後十一時頃より旅順口に近づき、巧に敵眼を避けて豫定區域に機械水雷の沈置を終つたのである。

此際第二驅逐隊は、沈置諸隊掩護の任に當り、其前衛となつて旅順口に向ふたのであるが、同隊の石田司令は、時機尙早きを慮り、中途に速力を減じたのである。此際第五驅逐隊及第十四艇隊は、第二驅逐隊を追ひ越して前進したので、第二驅逐隊は専ら蛟龍丸の掩護に當り、適當の時機に於て之と相分れたる後、鮮生角の東方に漂泊しつゝあつたのであるが、幾もなくして、城頭山の方向に十數發の砲火を見たるのみにて、終夜異状なく翌曉港外に我沈置部隊の隻影をすら認めぬので、明瞭に水雷敷設の完全に結了せるを察知し、芽出度歸航の途に就かんとしたのであるが。翌曉(十三日)午前五時五十分頃、老鐵山の南方に於て遙に敵驅逐艦を發見したので石田司令は、之を見て直に其前路を扼し、激戦の後大損害を與へ、火焰迸發、蒸氣噴逸、全然頼りなき状況に陥らしめたのであつたが、此時他の驅逐艦一隻の來るを發見し、直に轉じて之を追ふたのであるが、逸早くも港内に遁走したので、再び歸て前記の驅逐艦に近寄り、其始末をなさんとしたのである。然るに敵驅逐艦は其損害殊に甚しく

將に沈没せんとしつゝあるので、生存者を救助せんが爲、端舟を卸さんとする際、敵艦「バーヤン」の忽然として港外に現はれ、白波を蹴立て、突進し來るを見、已むを得ずして退却したのである。此際大損害を受けて沈没したる露國驅逐艦は、「ストラーシヌイ」で同七時頃全く沈没したつたといふことである。

又右機械水雷沈置を有效ならしむる目的を以て、旅順艦隊を誘出するの任務を有する第三戰隊は、十二日午後六時三十分、第一戰隊と分れて旅順に向ひ、翌十三日未明敵の探海燈を發見し、午前七時頃砲火を同方面に開き、又「バーヤン」の港外に遊弋するを望見したのであるが、幾もなくして第二驅逐隊の來るに會ひ、之を右側に從へ、前進したのである。此時敵艦二隻また港口に現はれ、港内の諸艦熾に黒煙を噴き、出港準備に餘念なきものゝ如く見えたのであるが、「バーヤン」は、如何なる故か、兎にも角にも唯一隻、猛然として第三戰隊に向つて突進し來り、約一萬米の距離に到達するや否や、砲火を開いて戦を挑むのであつた。そこで出羽司令官は、七時二十分頃各艦に戦闘を令し、第二驅逐隊をして彈着距離外に避けしめ、千歳、高砂、笠置、吉野及常磐、淺間の順序を以て之に對抗し、艦隊の砲火を「バーヤン」に集中したので、「バーヤン」も之に僻易し、遽に港口に向つて退却したのである。そこで、出羽戰隊は一先づ射撃を止めて北東に航進したのであるが、此時恰も敵の驅逐艦數隻小羊島方面より旅順に向ひ、「ノーウキク」、「アスコリド」、「チャナ」等相踵で出港し、港口の附近は煤

煙立ち籠め、他の諸艦も亦出動せんとするの氣勢を示すのであつた。

既にして、「バヤーン」再び老鐵山の東方より挺進し來り、之に續いて「ペトロバウロスク」、「セワストポリ」、「アスコリット」、「ヂャナ」、「ノークキク」の五艦は、驅逐艦九隻を右側に從へて濃霧中より現はれ、「バヤーン」は左轉して「ヂャナ」、「ノークキク」の間に入り、同時に「ポベータ」型一隻も亦出港して之に合したのである。是に於て、敵は優勢を恃み、俄に攻勢をとり、第三戦隊を追撃するの對勢を取つたので、出羽司令官は之に應戦しつゝ、洋中に誘出するに努め、尙三笠に向ひ「敵艦隊主力港外にあり、我今之と砲戦中。」との電報を發し、九時五分各艦齊しく右方に回頭し、速力を加へ、第一戦隊の所在に向ふたのであるが、敵も亦左方に一齊回頭を行ひ、右先鋒單梯陣の如き隊形をとりて第三戦隊に薄り、其距離六千五百米に過ぎざる關係となり、敵の彈丸雨の如く落下し、如何にも壯觀を呈したのであつた。

第三戦隊は、敵と觸接して之を洋心に導き、敵は勢に乗じ、要塞の彈着界を出で、遠く十五海里の外洋に出で、戦を繼續するのであつたが、九時十五分頃、南方遙に我第一戦隊が出現したので、露艦隊は忽ちにして追撃を止め、港口に向つて退却したのである。

此際旅順に向つて航進中であつた聯合艦隊は、十三日の午前六時半、蛟龍丸以下第九驅逐隊及第十四艇隊と會して機械水雷沈置の報告を受け、又第二戦隊第三驅逐隊及第九艇隊の朝鮮國の北西岸より來る

に會し、之を遇岩の南方に留め、春日日進を第一戦隊に合せて前進中、出羽司令官の警報に接し、同時に砲聲を聞いたのであるが、折柄の濛氣深くして戦況を審にするに由なく、先づ三笠を先頭に、朝日、富士、八島、敷島、初瀬、春日、日進の順序を以て單縱陣を制り、港口に向つて急進し、暫くして敵艦隊の主力を望見するに至つたのである。

此時露艦隊は急遽艦首を回らし、要塞の掩護圏内に退いたのであるが、露軍の爲には此上もなき不運が、此際勃發したのである

(露將「マカロフ」の戦死)

既にして港外の濛氣全く散し、港口の状態も明瞭に見ることが出來たのであるが、旅順艦隊は、港内に入らんとはせずして徐に鮮生角の方に航進し、何となく我艦隊を招いて要塞の砲力圏内に入らしめ砲臺と共に我艦隊に痛撃を加へんとするが如き意圖とも見えたのであるが、先頭に占位した「マカロフ」將軍の旗艦「ペトロバウロスク」が、「ルチン」岩附近に到るや、驚くべき爆發の聲を聞くと同時に黒烟忽ち天に沖し、瞬く間に沈没して仕舞ふたのである。此時は、正に午前十時三十二分であつた。尋で他の戦艦一隻も、俄然傾斜し、自餘の諸艦は、狼狽其極に達し、殆ど狂態を演じ、附近の水面を猛射しつゝ、先を争ふて港内に通れ入り、午後には、一隻も港外に止るものなき状態となつたのである。東郷司令長官は、之を見て敵に再戦の氣力なきを察し、第三戦隊を留めて今後の敵狀を偵はしめ、午

前十一時五十分第一戦隊を率ゐて黄海の北部に向ひ、途に第二戦隊及驅逐隊を合せ、春日日進をして第二戦隊に復歸せしめ、第一戦隊、第二戦隊は十四日午前十時海洋島の北方錨地に碇泊したのである。

「ペトロバウロスク」は、我軍の所に沈置した機械水雷に觸れて爆沈せられたので、此時同艦に將旗を掲げたる「マカロフ」將軍は、其幕僚と共に戦歿し、戦艦「ホベータ」も亦機雷にかゝり、大損害を受けて僅に沈没を免れたのであつた。

是より先、露國政府は、太平洋艦隊の戦運彼等に利あらずして形勢頗る振はざる状態となつたのを憂ひ、海軍中將「ステバン」、オシボウキツチ、マカロフ」を擧げ、同將軍は上下の信頼を荷ふて新に太平洋艦隊司令長官に補せられ、三月初旬頃旅順に着任したのであるが、それより後善く敗殘の艦隊を整へ士氣を鼓舞し、軍紀を振肅し、苦心慘憺一日も早く、其面目を一新せんと圖つたのであるが、四月十三日驅逐艦「ストラヌイ」が我驅逐隊に歸途を絶たれて苦境に陥りたりとの報に接し、直に其援助を「バヤーン」に命じ、續いて自ら「ペトロバウロスク」に乘じ、「ホルタワ」、「アスコリト」、「チャナ」、「ノヅキク」等を率ゐて出港したのであるが、「バヤーン」は時機既に後れ、其目的を果すに由なく、僅に波間に漂ふ殘卒五名を收容せるのみにて、却つて我第三戦隊に威壓せられて退却したので、「マカロフ」將軍は悲憤已まず、第三戦隊を追撃すること十餘海里に及んだのであるが、我第一戦隊の來るを見、戦鬪を繼續するの不利なるを思ひ、一旦港口に却き、更に出港し來れる「ペレスウエート」、「ホベータ」

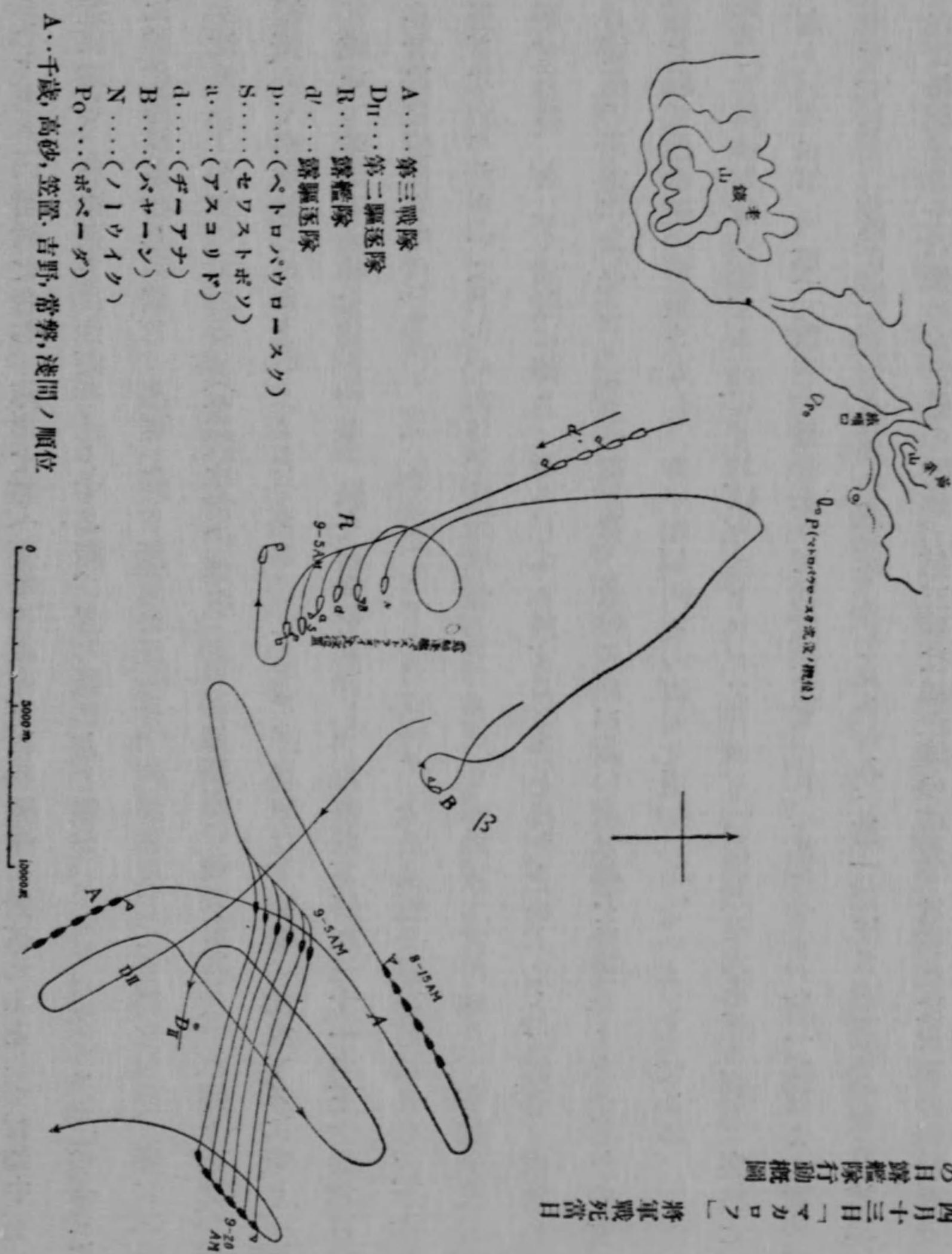
「セワストポリ」の諸艦を合し、陣形を整へ要塞掩護の下に我艦隊に對抗せんとして行動中、「ルチン」岩附近に達し、將に西方に回頭せんとする際、忽ち轟然たる爆聲「ペトロバウロスク」の艦底に起ると同時に、艦體は激動し傾斜し、黒煙を吐き蒸氣を迸らせ、汽煙相混じて全艦を包み、僅に二分間にして全く沈没したつたのである。(敷設水雷の爆發の爲、彈藥庫の爆發を起し、汽罐も亦之が爲に破裂し、艦體全く兩斷せられたといふことである。)「マカロフ」將軍は、乗艦の沈没するに際し、直に外套を脱ぎ跪いて最後の祈禱を爲しつゝ、艦と運命を共にし、幕僚以下將校三十一名下士兵六百餘名戦死し生存者は幕僚海軍中佐「キリール」、ウラヂミロウキツチ」大公及艦長以下將校九名、下士兵百二十名に過ぎなかつたといふことである。此際戦艦「ホベータ」も亦機械水雷に觸れ、右舷中央部の石炭庫を破壊せられ、著しく右舷に傾き、辛うじて入港することを得たといふことである。尙聞く所によれば此日諸艦の出港に臨み「マカロフ」將軍は、各艦に向ひ敵の潜水艦を警戒せよと命じたので、二戦艦の遭難を以て潜水艦の襲撃となし、倉皇艦側附近の海面を亂射したといふことである。

(備考)

露國將校の記する所によれば、「ペトロバウロスク」の回頭せんとする刹那、突然として爆聲

起り、次に第二、第三、第四の爆聲ありて同艦は忽ちにして沈没せり。第一爆聲より實に二分時を出でずして、其跡には空しく盤渦の洶湧するを見るのみ。第一回は日本水雷の爆發、第二回は自艦内に格納せる十八個の水雷罐の爆發、第三回は總汽罐の破裂、第四回は火藥の爆發せるなり。從

四月十三日「マカロフ」將軍戦死當日
の日露艦隊行動概圖



來「マカロフ」長官は艦隊の出港するに先ち、必ず港口の水道と附近の海面とに掃海を行ふ例なりしに、此日に限り「ヌトラーシヌイ」の僚艦と相失し敵に發見せられたる不注意を憤り、怒に乗じ掃海をも施さずして出港せりと云ふ

以上記する所の如く、第三回閉塞以前に實行したる機雷沈置は、豫想外の大功を奏したのであるが、尙敵を苦めて旅順の陥落を促さんが爲、第三回の閉塞を行ふに決し、之を實行したのであるが、是亦豫期の効果を奏すること能はず、彌、以て、旅順陥落の目的を貫徹するの困難を感ずることになつたのである。

(旅順方面に於ける我艦隊艦船の遭難)

旅順閉塞の成否に關せず、一面には極力旅順を封鎖すると共に、他の一面には陸軍と協同し、以て遼東方面に於ける海陸の敵を撃滅せんとするは、夙に我海軍の決定的作戰計畫である。東郷司令長官は、此趣旨により、第三回閉塞の決行せらるゝに及び、五月四日、第一艦隊を率ゐて一旦光祿島に赴き、第二軍の上陸の爲端舟を送り、翌五日再び旅順沖に來り、閉塞の成果を視察し、六日には鹽大澳に入り、恰も第三艦隊の掩護の下に、第二軍の上陸を行ひつゝあるに會し、翌七日戰時集合地たるべき裏長山列島の錨地の設備完整を期とし、艦隊の根據地を同錨地に移し、第一艦隊をして旅順口の直接封鎖に従事せしめ、第三艦隊をして引續き陸軍揚陸の掩護と策應とに従事せしめつゝあつたのであ

るが、我軍も従來の如き戦運を久遠に維持すること難く、軍艦宮古と水雷艇第四十八號とは、大密口に於ける掃海中機雷に觸れ、吉野は春日と衝突し、初瀬八島も亦旅順口外監哨中、機雷に罹りて沈没し、龍田は坐礁し大島は赤城と觸れ、驅逐艦曉も機雷に觸れて沈み、我艦隊は、乍遺憾、數日にして數隻の堅艦を失ふが如き不運に會したのであつた。

右の遭難に關し、三十七八年戦史の傳ふる所に據れば。

初め第二軍の上陸漸次進行するや、片岡第三艦隊司令長官は、東郷司令長官の訓令を受け、五月十日より大密口の掃海を開始せしに、第二十一艇隊の第四十八號艇は、黒嘴子附近にて沈置水雷に觸れ多大の損害を被りて浸水甚しく約七分時にて沈没し、十四日「ロビンソン」角附近（「ロビンソン」角は、小密口の東方に於て南方に突出せる一角なり。）に投錨せる宮古は、陸上の敵兵を撃攘して掃海隊を掩護し、既に大部の掃海を了りて將に其の小蒸氣船を引揚げんとするの際、忽ち残存せる沈置水雷に觸れ左舷機關室大破して潮水浸入し、二十三分時を経て亦遂に沈没せり。

出羽第一艦隊司令官は、第三戰隊及富士春日を率ゐて裏長山列島を發し、千歳吉野を第一小隊とし春日、八雲、富士を第二小隊とし、十三日早曉旅順口外に到り、敵驅逐艦六隻の遊弋するを見、薄暮に及び、又小蒸氣船一隻の他舟を曳きて饅頭山下に到るを認めたりしも、曉來の濛氣に遮られ港内を偵察する能はず、翌日に至るも濛氣依然として霽れず、僅に饅頭山方面に敵驅逐艦四隻の遊弋

するを望見せるのみ。是に於て、第三戰隊は、午後四時港外を去り、裏長山列島に向ひ、單縱陣を作り、旗艦千歳を先頭とし、吉野、春日、八雲、富士之に續航せり、此航進中深夜遽然濃霧に遭遇し、三番艦春日は、前續艦の航跡を失はんことを慮り、稍、速力を増したるも、忽ちにして其の如く所を知らず、翌日午前一時三十分の交に至り、右舷前方に探海燈光の如きものを認め、吉野の前進しつゝあるものとなし、之に續航せんが爲め右轉せんとするの際、又赤色舷燈を同舷艦首に發見し、相距る僅に呼應の間に在り、同艦長は急に全速後退を命ぜしも、遂に艦首を以て吉野の左舷を衝けり、當時吉野は恰も回轉中に在り、其の乗員は危機を見て大聲春日に向ひ注意を喚起せしも及ばず、咄嗟の間に衝突し、吉野の燈火全滅すると同時に、海水は水線下の穿孔より奔入し、艦體忽ち右舷に傾き、到底救ふべからざるに至れり、是に於て艦長海軍大佐佐伯間は、艦員を集めて萬歳を三唱せしめ、先づ聖影を端舟に奉移し、次で總員を退去せしめしに、艦體遂に覆没し、（概位北緯三十八度七分東經百二十度三十三分）諸端舟皆之が爲に壓没せられ、僅に無事なりしものは聖影を奉戴せる一隻のみ、初め艦の將に覆没せんとするや、佐伯艦長は前艦橋に在りて諸般の指揮を了り、副長心得海軍少佐廣瀬顯一と握手したる後、相共に艦と運命を同らし、其の他難に殉せしもの、准士官以上三十名下士卒二百八十四名、傭人三名に及べり。

春日は衝突後直に機關を停止せしも、既に吉野に遠ざかり、四顧暗澹として其の所在を知るに由な

く唯漠々たる濃霧中、「我浸水救助を要す」との無線電信を感受せしのみ、乃ち直に端舟を下して救助に従はしめしも、既に沈没の後なりしが爲め、僅に准士官以上六名、下士卒及傭人九十三名（千歳に救助せられたるもの外に七名）を救助せしのみ、春日も亦其の衝角を損し、浸水あるを以て之が應急修理を爲せり。

旗艦千歳にありし出羽司令官は、初め大霧の來襲を見るや、先づ艦尾速力燈を掲げしめ、次で舷燈及「ヤーダーム」速力燈を出すべきを命じ、午前一時三十分豫定の新航路に向ひ、轉針を終りたるとき、忽ち吉野の方位に當り非常なる音響を聞き、衝突の難ありしを察知せしを以て、直に無線電信にて吉野に損害の状況を尋問せしも應信を得ず、已むなく各艦をして、相互安全なる距離に到り投錨せしめたり、斯くして春日の外は僚艦の危急を救ふに由なく、八雲、富士は翌朝に至り始めて千歳と相會するを得たり、（中略）

初瀬八島の遭難も、亦實に吉野春日の衝突と日を同らせり。其の遭難に先つこと一日、梨羽第一艦隊司令官は、初瀬、敷島、八島、笠置及龍田を率ゐ、裏長山列島を發して旅順口の直接封鎖に向ひ、十五日午前十時五十分頃、老鐵山の南東に達せり、偶、第六戦隊の明石、須磨、千代田、秋津洲第七戦隊の宇治、第十四艇隊の千鳥、隼及大島、赤城より成る一隊並、他の特別任務を帯びたる高砂も其の附近に在りしが、初瀬は俄に沈置水雷に觸れ、激震艦尾に起り、滔々たる浸水忽ち舵機室に充

てり、梨羽司令官は直に針路の變換を後續諸艦に命ぜしに、未だ數分時を出でずして八島も亦水雷に觸れて其の舷側を破られ、瞬時にして更に第二の爆發を受けたるを以て、梨羽司令官は直に高砂をして八島を救助せしめ、笠置に初瀬の曳行を命ぜしに、午後〇時三十三分初瀬は再度機械水雷に觸れ、轟然たる爆聲と共に黄褐色の火焰を騰げ、後橋折れ煙突倒れ僅に一二分にして全く沈没し、副長外准士官以上三十五名下士卒四百四十五名傭人十二名此難に殉せり。是に於て、笠置は附近の各艦と共に端舟を下して遭難者の收容に従事せしが、會、敵驅逐艦四隻、我難に乗じて港口より突出し、午後二時頃には、更に増加して十一隻となり、轟然として突進し來れり、（中略）二時三十分、笠置を距る六千五百米に達し、頻に發砲せしが、次第に退却して一旦煙靄の裡に没し去り、暫くして復現れ、再び我に向へり。時に八島の傾斜益甚しかりしも、高砂、敷島等其附近に在りしを以て、笠置は直に敵を邀へ、龍田及第六戦隊と共に力を合せて之を砲撃す、既にして敵驅逐艦は更に増加して十六隻となり、初瀬の沈没位置に急進し、諸端舟を掩撃し、我艦隊の近くを見て遽に港口に遁去せり。仍て笠置は戦を止め、須磨、龍田と共に八島の乗員を收容して歸途に就けり。

八島艦長海軍大佐坂本一は、遭難後直に艦員を督勵し、排水に努めしも、浸水劇甚にして到底沈没の免れ難きを知り、先づ乗員の一部を高砂に移し、午後〇時二十五分より徐航して遇岩方面に向ひしが、艦體の傾斜刻一刻より甚しく、五時三十五分には十六度三十分に及び、到底救ふべからざる

に至りたるを以て、同四十一分遇岩の東北東約五海里の處に投錨し、(此時聖影は既に須磨に奉移したるを以て)乗員を後甲板に整列せしめ、君が代を吹奏し、軍艦旗を撤し、萬歳を三唱して後總員退去し、同艦は終に其投錨位置に沈没せり。

東郷第三艦隊司令官は、敵陸軍の南下を牽制して第二軍に策應せんが爲め、此日午前五時、第六戦隊等を率ゐて鹽大澳を發したりしが、十一時頃無線電信により、初瀬八島の遭難を知り、明石、須磨、千代田、秋津洲を率ゐて急航之に赴き、敵驅逐艦を撃攘し、翌日午前大島、赤城、宇治を合して共に塔山方面(營口の南方約二十五海里にあり、頂上に顯著なる一塔あり)を砲撃し、午後金州灣に向ひ、夜に入り濃霧に會したるを以て、諸艦便宜投錨せんとするの際、赤城は大島を衝き、十七日午前三時三十八分大島は終に右舷に傾きて沈没し、總員赤城に收容せらる。(中略)

驅逐艦曉は封鎖勤務に従事中、十七日午後六時二十分、老鐵山の南方に煤烟を望み之を追蹶せしに乍ち艦影を失ひたる爲め、哨區に向ふ途次、十時二十二分老鐵山頂の南東微南約八海里の地點に於て機械水雷に觸れ、瞬時にして沈没せり、僚艦は直に之が救助に努め、下士卒三十六名を收容せしも艦長以下准士官以上七名及下士卒十六名は遂に其の難に殉せり。

十八日、第四、第五驅逐隊は第一、第十、第十六艇隊と共に哨戒の任務に従事して居たのであるが、「ノロウキク」以下驅逐艦二隻の出勤するを發見し、茲に敵軍の既に閉塞港口に通路を開きたるの確證

を得たので、聯合艦隊司令官は益々監視を嚴にすると同時に、敵の我不幸に乗じて攻勢を取らんことを憂慮し、更に裏長山列島に於ける根據地の警戒を嚴重にしたのであつた。

右に述べたる如き我艦隊の受けたる不幸中、我海軍にとりて最も重大なる損害は、言ふ迄もなく初瀬八島の沈没で、之を「ペトロパウロスク」及「ホベータ」の場合に比し、物質的損害に於て、殆ど比較にもなり難き程の輕重あるは疑を容れざる所である。而も其損害たるや、我軍が黄金山下に機械水雷を沈置したると同巧に出で、別に嶄新なる方策にあらざりしは、吾輩等の特に遺憾とする所である。封鎖艦隊が毎日同一の航路を取るが如き不用心は注意すべきことである。

(備考) 敵の將校等は、我封鎖艦隊の行動を研究し、就中水雷敷設船「アムール」艦長海軍中佐「フエオドル、ニコライウキツチ、イワノフ」及乗組將校等は「マカロフ」將軍戦死後、臨時司令官となつた「ウキトゲフト」少將の許可を得、五月十四日の夜半港外に出で距岸約十海里の所に、五十乃至百尺の間隔を以て一海里の間に、機械水雷を沈置したのであるが、其計畫奇效を奏し、初瀬の爆沈、八島の損傷するを見、「ウキトゲフト」司令官は、機乗ずべしとなし、直に驅逐隊を放ち、又黄金山に在る將校は、日本軍を迷はさんが爲普通の無線電信符號を以て、第一潜水艇隊は歸れり、第二潜水艇隊は未だし等の語を發信したといふことである。

第六章 旅順口封鎖の宣言

第十師團は、第七戦隊掩護の下に、五月十九日鴨綠江口の西方約四十三海里にある、東青堆子角に上陸し、第一、第二兩軍の中間に策動することになったのであるが。第二軍は、二十六日を以て金州を攻撃して之を占領し、直に大連灣の西角に出でんとする計畫を定め、聯合艦隊は之と相呼應して敵艦隊の遁走を防ぎ、彌、旅順口の封鎖を嚴重にし、之と同時に、第二軍殘部の上陸を掩護し、尙一支隊を以て第二軍の攻戦と相策應し、陸海兩軍の攻圍の裡に旅順口を窘蹙せしめ、手足を出すに處なからしめんとしたのであるが、敵も亦種々の方法を講じ、暗夜或は濃霧の場合、巧に「ジャンク」を利用して封鎖を破るのみならず、是等の「ジャンク」を用ゐて機械水雷の沈置をさへ行はんとするの懸念が濃厚になつたので、東郷聯合艦隊司令長官は、大本營の命に基き、二十六日を以て左の如き封鎖宣言を發布したのであつた。

本官は、帝國政府の命を受け、明治三十七年五月二十六日、清國盛京省關東州南部、即ち貔子窩より普蘭店に至る一直線以南の沿岸を、帝國軍艦の充分なる兵力を以て封鎖し、之を維持すること、并に封鎖を破らんとする一切の船舶に對し、國際法及帝國と他の中立諸國との條約に於て許容せられたる一切の強制手段を用ふべきことを茲に宣言す。

於帝國軍艦三笠

聯合艦隊司令長官 海軍中將 東郷平八郎

同日早曉、第二軍は豫定計畫に従ひ、金州方面の攻撃を開始し、筑紫、平遠、赤城、烏海及第一艇隊は、筑紫艦長海軍中佐西山保吉の指揮下に金州灣に進み、陸軍と策應して奮闘したのであるが、此際烏海艦長海軍中佐林三子雄は戦死し、第二軍は激戦の後、南山を陥れ、次で南關嶺の陣地を取り、二十八日には大連灣一帶の陸地悉く我軍の占領に歸したのであつたが、大連灣には、露國の敷設したる多數の機械水雷があつて、中々に航路の開通が出来ぬ状態であつた。そこで、東郷司令長官は、二十九日片岡第三艦隊司令長官に訓令して、同灣の掃海と陸上の經營とに任せしめたのである。而して他の一面に於ては、封鎖宣言を勵行して「ジャンク」其他の拿捕と臨檢とに努め、尙旅順港口附近に多數の機械水雷を沈置する等、極力敵艦隊を壓迫したのであるが、敵軍は南山の一敗以來、北は蓋平附近まで一兵團を進めて、更に南下を企て、南は雙臺溝を扼守し、「ジャンク」を利用して南北の通信連絡を試みる等、敏捷なる行動に出でつゝあるので、艦隊の一部を渤海灣内に作動せしむるに決し、之を實行したのであるが、敵艦隊も、我作戦の進捗に伴ひ熱心に遁走を企てんとするが如く、隨時活動の氣勢を示し、六月四日には薄暮を機とし、砲艦二隻驅逐艦四隻及小汽船三隻旅順口前に顯はれたので、我第四驅逐隊は之を洋心に誘致するに力め、鮮生角の南方に進み、嶗嶗嘴砲臺よりの射撃を受

けて南方に避けたのであつたが、午後七時四十分頃、城頭山下に大爆煙が起り、敵の艦船の倉皇として港口に通れ去るを見たのであつたが、此爆煙は先記の汽船一隻の我軍の沈置したる機械水雷に觸れたのであつた、是より後、敵は艦隊の爲に航路を開かんとするに熱中し、砲艦及驅逐艦の掩護の下に掃海を行ひ、之と同時に、港内に於ては損傷艦の修理を急ぎ、封鎖を脱出するに腐心しつゝあつたが、陸上方面に於ける我軍の作戦彌々進歩するに従ひ、彌々脱出の氣分を高むるに至つたのであつた、加之此際露帝は切に旅順の陥落を憂ひ、其守將「ステツセル」に電命し、堅城鐵壁も救ふべき見込なきに至つたならば、砲臺と諸建造物は悉く之を破壊し、軍艦は死力を盡して浦港に通れよ、若し到底逸する能はざる情勢となつたならば、寧ろ自ら爆沈し、斷じて降服すること勿れ、との勅命を受けたといふことである。

何は兎もあれ東郷司令長官は、四圍の事情より察し、浦汐艦隊も亦時々邊海に出没して、遙に旅順と策應するの意なきにあらざる等、彌々以て旅順艦隊の脱出の實現せんことを察し、敵艦脱出に對する豫定行動を定めて、艦隊を戒飾しつゝ、其實現を待つたのであつた。

第七章 旅順艦隊の出港

既に前章にも述べたる如く、當時旅順口の敵艦隊は枚々として損傷艦の修理を急ぎ、又掃海を勵行し

て港口に安全なる航路を開き、一意に封鎖を脱せんとするもの、如く、當時聯合艦隊司令部に達する諸情報は、一として旅順艦隊脱出の兆として見るべき性質を備へざるはなく、浦港の敵艦隊も時々出動して遙に相應するの情勢を示すに至つたので、東郷司令長官は益々警戒を嚴にし、一面に敵艦隊脱出に備ふると同時に、海陸合作戦の計畫を進め、第三艦隊司令長官海軍中將片岡七郎に命じ、重砲隊を編成して上陸せしめ、之を第三軍司令官陸軍大將男爵乃木希典の麾下に附屬せしむる等、遺漏なき畫策に餘念なき有様であつたが、旅順口内の敵艦隊も、六月中旬に至り、大體損害箇所を修理をも完了したので、西港の浚渫に使用し來つた汽船を以て、新に掃海隊を編成し、日々掃海を督勵實施し又通信の爲驅逐艦を營口に派遣し、絶東大守と二回の連絡を企てたのであるが、常に滿洲に於ける露軍の敗報を齎し、且第二回歸港の際には艦隊は決戦の覺悟を以て出港すべしとの命令を傳へたので、「ウキトゲフト」少將は、麾下將官及艦長を集め、六月二十二日を以て出港のことに決し、左の如き命令を發したといふことである。

狡猾なる敵の爲、宣戰布告前に破壊せられたる諸軍艦は、爰に修理完成を告げ、今や艦隊は大守の命により、出港して旅順の陸上防禦者に協力するの秋となれり、冀くは神明と靈驗ある海主「ニコライ」の加護とにより、各人各自の本分を盡し、吾皇に對する誓詞を全くし、近來我水雷に罹り一部の艦艇を喪失せる敵艦隊を殲滅せしめよ。云云

斯くて、旅順艦隊は彌、出戦の臍を堅めたのであるが、出港の前日、「ポベード」艦長急病の爲、轉補を行ふの要あり、出港を一日延期し、二十三日を以て彌、我艦隊と接戦するの目的と覺悟とを以て出港したのであつた。

當時、旅順港封鎖の任務にあつた第一驅逐隊は、六月二十三日早朝、敵艦「ノーク」及驅逐艦三隻其他汽艇及商船の黄金山下より饅頭山に懸けて運動するを發見し、尋で多數の敵艦の出港せんとしつゝあるが如き狀勢を認めたので、當時遇岩附近にあつた出羽司令官に報告し、同司令官は直に「敵艦隊港外に出づ」との警電を發したのであつた。

東郷司令長官は、此警電を受け、諸隊に出動を命じて之に應じたのであるが、此際、逐次出港し來りたる敵艦は、「ノーク」、「バヤーン」、「ペレスウエート」、「ボルタワ」、「セバストポリ」、「バラダ」、「アスコリド」、「ヂャナ」、「ツエサレウイチ」、「レトウキザン」及「ポベード」の十一隻で、午後三時には掃海隊を前頭とし、「ガイドマーク」其他の小砲艦及戰艦巡洋艦は其後に繼ぎ、「ノーク」及驅逐艦七八隻は掃海隊の左側を掩護し、漸次外洋に出て、老鐵山以南の海上に達し、掃海の強行を開始し、戰艦巡洋艦は城頭山下に留まつたのであつた。

兩軍の接觸は我驅逐隊の敵の掃海を妨げんとするに起り、先づ第一に「ノーク」及驅逐艦との砲戦となつたのであるが、出羽司令官は、笠置、高砂を朝島方面に派して我驅逐隊に協力しつゝ敵情を偵

察せしめ、更に千歳、千代田を増派したのである。此時敵は「ノーク」を先頭とし、掃海隊の後方に續航して漸次外洋に進出するので、出羽司令官は、八雲、淺間を率ゐて之に向ひ、午後五時四十分、笠置、高砂、千歳を列に加へ、千代田を第六戰隊に復歸せしめ、敵を誘出して第一戰隊所在の方向に近づかしむべき行動を取つたのである。

東郷司令長官は、遇岩の東方に驅逐隊を集合し、午後五時五十分之に襲撃準備を命じ、親ら三笠、朝日、富士、敷島、日進、春日の六隻を率ゐて東北東に航進し、徐に敵の洋中に出づるのを待つたのであるが、午後六時十五分に至り、始めて明白に敵艦隊を遇岩の北西約八海里の所に認めることが出来たのであつた。

そこで、東郷司令長官は、六時三十分を以て、西南西に變計し、第三戰隊を左前約五海里、第六戰隊を後方約六海里に占位せしめ、驅逐隊艇隊の大部を非戦側に置き、戦機の熟するを待つたのであるが尙驅逐隊及艇隊に對し、敵と觸接を保ち日没を待て之を襲撃すべき命令を發したのであるが、七時五分に至り、敵艦隊は第一戰隊の右舷正横約一萬五六千米に到つたので、第一戰隊は、其先頭を壓迫せんが爲、其速力を増加し、一萬四千米に近づいたのである。此時敵は次第に針路を右轉し、我と同方向に進まんとするの態度を示したので、我艦隊は、漸次敵を壓して其前方に出て、益々之に薄つたのである。然るに敵は午後八時頃、俄に北方に轉針して港口に向ふべき態度を示したので、第一戰隊は、

直に右八點の一齊回頭を行ひ、單横陣にて之に薄り、第三第五第六戰隊と共に之を追撃したのであるが、八時二十分に至り、海面漸く暗く、水雷攻撃の時機到来したので、艦隊の北航は之を取り止め、各驅逐隊、艇隊は直に襲撃に移つたのである、於是驅逐隊艇隊は奮躍しつゝ、敵を追躡し、終夜襲撃を繼續したのであるが、遺憾にも豫期の効果を奏せずして止んだのである。

此日、露艦隊は我艦隊を見ると同時に、掃海隊と砲艦とを旅順口に歸らしめ、艦隊は戦艦を先にし、巡洋艦之に續き、「ノーウキク」及驅逐隊を右側に備へて南下したのであるが、幾くもなく我艦隊の優勢なるを認めただのみならず、其針路を遮つて戦を強ゆるの意あるを察し、自他艦隊の勢力に鑑み、一旦旅順に歸り、再び時機を見て行動するに如かざるを悟つたので、夕刻より漸次針路を轉じて北方に向ひ、艦隊を二列に配し、戦艦六隻を左に、巡洋艦四隻を右に、「ノーウキク」及驅逐隊を戦艦の左側に備へて退却したのであるが、深更に至り艦隊の後尾に數回の攻撃を受けて苦みたるも、幸にして大なる損害を受けず（此際「セツストポリ」の左舷側に魚雷を受けて左舷に傾斜したるも、幸にして沈没を免れ、翌朝辛うじて入港することが出来た。）港外の豫定錨地に入泊したのである。

斯くの如くして、聯合艦隊は遂に敵艦隊の脱出を制壓し得たので、茲に此回の行動を終り、旅順の警戒は彌々之を嚴重にすると同時に、艦隊の主力は裏長山の根據地に歸つたのであるが、同二十六日に至り、東郷司令長官に對し、畏れ多くも左の勅語を賜はり、尙皇后陛下よりも優渥なる 令旨を賜

はつたのである。

勅語

聯合艦隊ハ百難ヲ排シテ敵ノ艦隊ヲ制壓シ我陸軍ヲ敵地ニ上陸セシメ確實ナル根據地ヲ作成シ更ニ敵ノ艦隊ヲ旅順港外ニ撃チ其數隻ヲ破リ偉功ヲ奏セリ

朕深ク將校下士卒ノ勤勞勇武ヲ嘉尙ス汝等益々奮勵シテ前途ノ大成ヲ期セヨ

東郷司令長官奉答

犬馬ノ勞ニ對シ茲ニ又優渥ナル 勅語ヲ賜ハリ感激ニ堪ヘス臣等益々奮勵以テ 聖旨ニ副ヒ奉ラン

コトヲ期ス

右謹テ奏ス

是より後、旅順方面に於ては、海陸相協力して猛烈なる攻撃を繼續したのであるが、遂に顯著なる効果を奏すること能はず、従つて我艦隊としては、一も海戦として記述すべき事實に遭遇せず、敵艦隊の一部の時として港外に出ることあるにもせよ、一たびも外洋に出で、輸贏を決せんとするの壯舉を見なかつたのであるが、東郷司令長官は、我海陸の戦局日に發展し、旅順口總攻撃の時機彌々切迫するを見、八月以後第一艦隊の哨區を變じ、夜間は特に圓島附近を警戒せしめたのである、若し此際依然として裏長山列島附近を根據として其儘に維持したならば、萬一敵艦が濃霧に乗じて脱出を企つる

が如き場合に於て之に應ずること困難であつたであらう、果然露艦隊は此頃に至り、再び活動の色を顯はし、我驅逐隊及第三戰隊との間に若干の小戦を見たのであるが、八月十日に至り、全力を込めたる旅順艦隊の脱出となり、茲に黄海海戦が行はるゝに至つたのである。

第八章 旅順艦隊の出港

(八月十日の黄海海戦)

聯合艦隊が、六月二十三日旅順艦隊の脱出に威壓を加へた以來、各隊相協力して愈々封鎖を強行したのであるが、此間第三軍の作戦も大に進捗し、總進撃の期も追々近づいたので、東郷司令長官は、其前進に助力を與ふると共に、依然敵艦隊の脱出に備へんが爲、七月下旬に至り之に關する命令を發し濟遠を主とする一隊、(濟遠、平遠、烏海、赤城、假裝砲艦二隻、水雷艇二隻)と嚴島以下の第五戰隊とを、第三軍に協力せしめ、第一戰隊以下の主力をして、交々旅順口外を監視し、益々嚴重に封鎖を續行したのである。

八月十日には、東郷司令長官は第一戰隊(三笠、朝日、富士、敷島)及通報艦八重山を率ゐて圓島の北方に居つたのであるが、午前六時半頃より敵艦出港の警報續々相踵で來るので、先づ遇岩の南方迄前進し、裏長山列島にある淺間、及清泥窪にある驅逐隊艇隊の全部に、至急出動の命を下したのであつ

たが、暫くして更に小平島附近にある橋立より、

敵の主力艦隊出航し、南東方に進む。

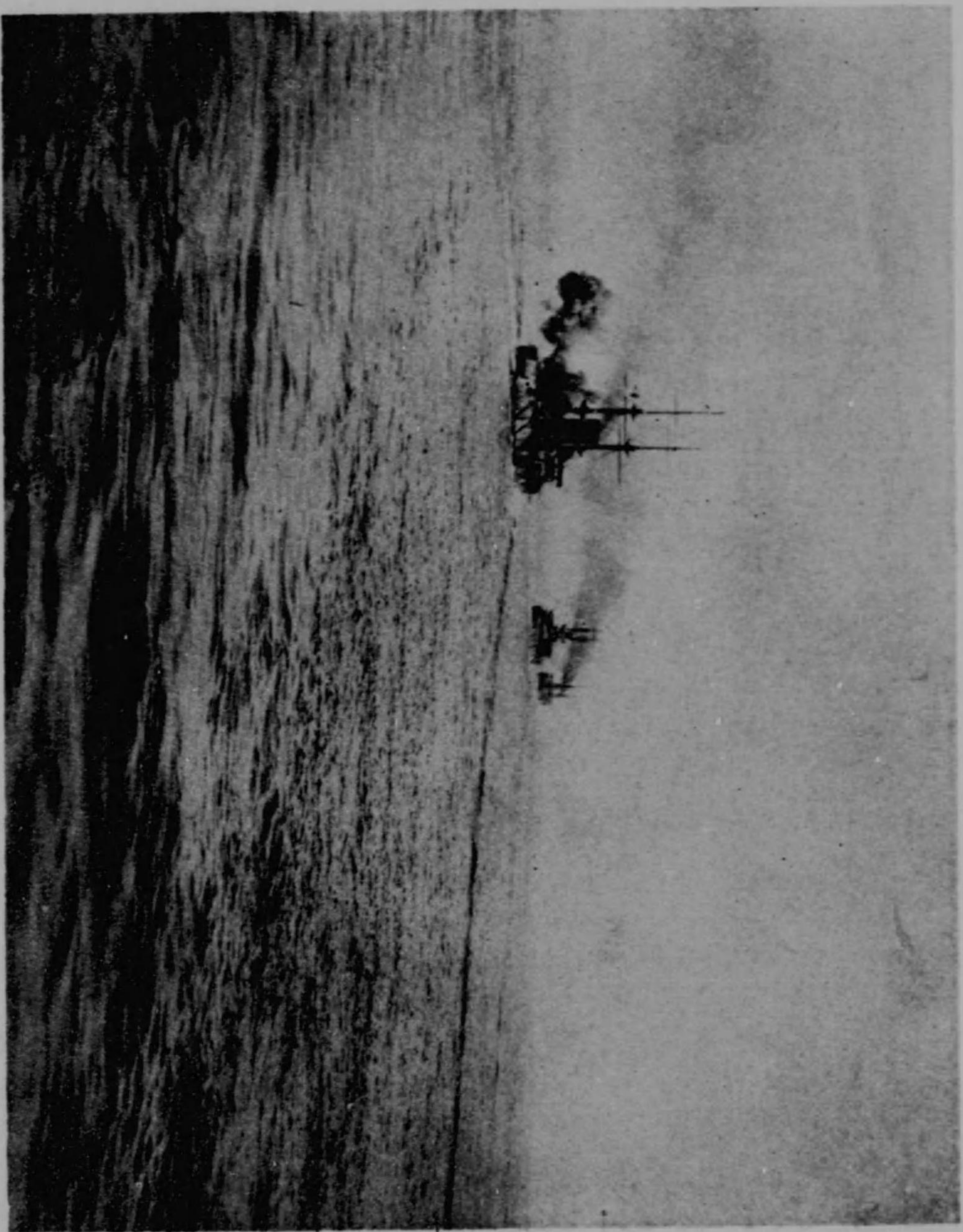
敵は渤海灣方面に向ふ。

といふ無線電信報告に接したので、東郷司令長官は帽島の南方に在る日進春日に合同を命じ、又八重山を急派し、驅逐隊艇隊を嚮導して來會せしめんとしたのであるが、既にして日進、春日の二艦が來會したので、第一戰隊は三笠、朝日、富士、敷島、春日、日進の順序に單縱陣を作り、午後〇時九分遇岩の南東微東三海里の一地點に達し、更に西南西に轉針航進中、同三十分に至り遇岩の西北西約十海里に方り、敵艦隊の南東に航進するを發見したのであつた、そこで、東郷司令長官は旗艦の橋頭高く軍艦旗を掲げて戰鬪の開始を命じ、彌々第一會戰の場面に入つたのである。

此頃旅順艦隊は戰艦「ツエサレウキチ」(旗艦)、「レトウキザン」、「ポペーダ」、「ベレスウエート」、「セワストポリ」、「ホルタワ」、「巡洋艦「アスコリド」、「バルラーダ」、「ヂイヤナ」の九隻單縱陣となり、巡洋艦「ノイウキク」及八隻の驅逐艦は其左側に並航し、病院船「モンゴリヤ」は後方に従ひ、威風堂々として航進し來るのであつた。東郷司令長官は敵の旅順口に退却せんことを憂ひ、可成洋心に敵を誘出せんとするに努め、午後一時左八點に一齊回頭を命じ、横陣の儘南々東に進んだのであるが、敵は之に應ぜず、一意に南東に逸走せんとするので、更に左八點に一齊回頭を行ひ、逆番號の單縱陣となり、

日進を嚮導として北東に進み、同十五分より各艦徐々に遠距離射撃を開始したのであつた。尋で第一戦隊は北東に變針し、敵の先頭を壓せんとしたのであるが、敵は一旦左轉したる後、次第に右轉して南方に向ひ、我後方より逸出せんとするが如き企圖を示したので、第一戦隊は一時三十分、右十六點の一齊回頭を行ひ、三笠を先頭とする單縱陣に復歸して南西に急航し、敵の陣列に對し、丁字を畫き、其最前艦に集彈したのである。敵は此時再び左轉し陣形爲に波狀を呈し、一時艦々互に相重なるに至つたのである。第一戦隊は之を見、漸次北方に轉針し之を掩撃せんとしたので、其後列にあつた巡洋艦は悉く戦艦の非戦闘側に遁れ、隊形自ら變じて不規則なる二列縱陣となり、只管南東に逸走せんとするのであつた、是に於て東郷司令長官は、其西方に行動しつゝある第三戦隊に、敵巡洋艦隊の攻撃を命じ、第一戦隊は右轉して敵の前路を遮らんとしたのであるが、此時機既に後れ、自ら敵と並航するが如き對勢となり、而も敵は少しく前進の位置にあつたのである。於是彼我の對勢已むを得ず、敵の陣列の中央と相對して砲火を交ふるが如き姿となつたのであるが、敵は次第に其針路を左轉したる爲、彼我の距離も漸く遠かり、午後三時二十分頃には、一時射撃を中止し、更に速力を増加して敵を追躡するの對勢となり、茲に第一合戦を終つたのであつた。此合戦に際しては特記する程の成績なく又左迄大なる損害もなかつたのである。

斯くの如くして、敵艦隊の旅順に退去することは、先づ大體に於て防ぎ得た形となつたのであるが、



敵は意外にも一意南下を企圖するものゝ如く、我諸部隊に追躡せられつゝ、益々外海に逸出したのである。東郷司令長官は、彼我の距離伸長するを見て、一旦射撃を中止せしめたのであるが、更に速力を増加して敵と並馳すること約二時間に及び、午後五時三十分には、山東高角の北方約四十五海里の地點に於て、其先頭に對する射距離七千米に近づき得たのであるが敵艦「ボルタワ」が先づ我艦隊に向つて第一彈を送つたので、我も亦直に應戦し、第一戦隊は敵の先頭を壓して猛射撃を加へ、激戦約一時間の後には、彼の砲火も漸く衰へたる如く感ぜられたのであつた、殊に午後六時三十七分頃には、我主砲彈一發敵の旗艦「ツエサレウイチ」の司令塔附近に炸裂し、之が爲舵機に故障を生じたるが如く、忽然左轉して自己の列中に突入したので、陣列之が爲に崩壊し、各艦或は右し或は左し、甚しく混亂の體を現はしたのであつた。

我第一戦隊は、之に乗じ、七時より北方に彎航しつゝ彼を包圍し、次で左四點に回頭し、梯陣を以て敵の前路を壓迫したので、敵の諸艦は彌々潰亂し、概ね西方に通れんとしたのである、恰もよし、此時淺間及第五戦隊の一部は、敵の北西に現はれ、第三戦隊は其南東に迫り、各隊相應じて之を包圍したので、敵は遂に四分五裂して戦ふこと能はず、「アスコロド」、「ノーウキク」及數隻の驅逐艦は、包圍を脱して南方に通れんとしたのであつた。

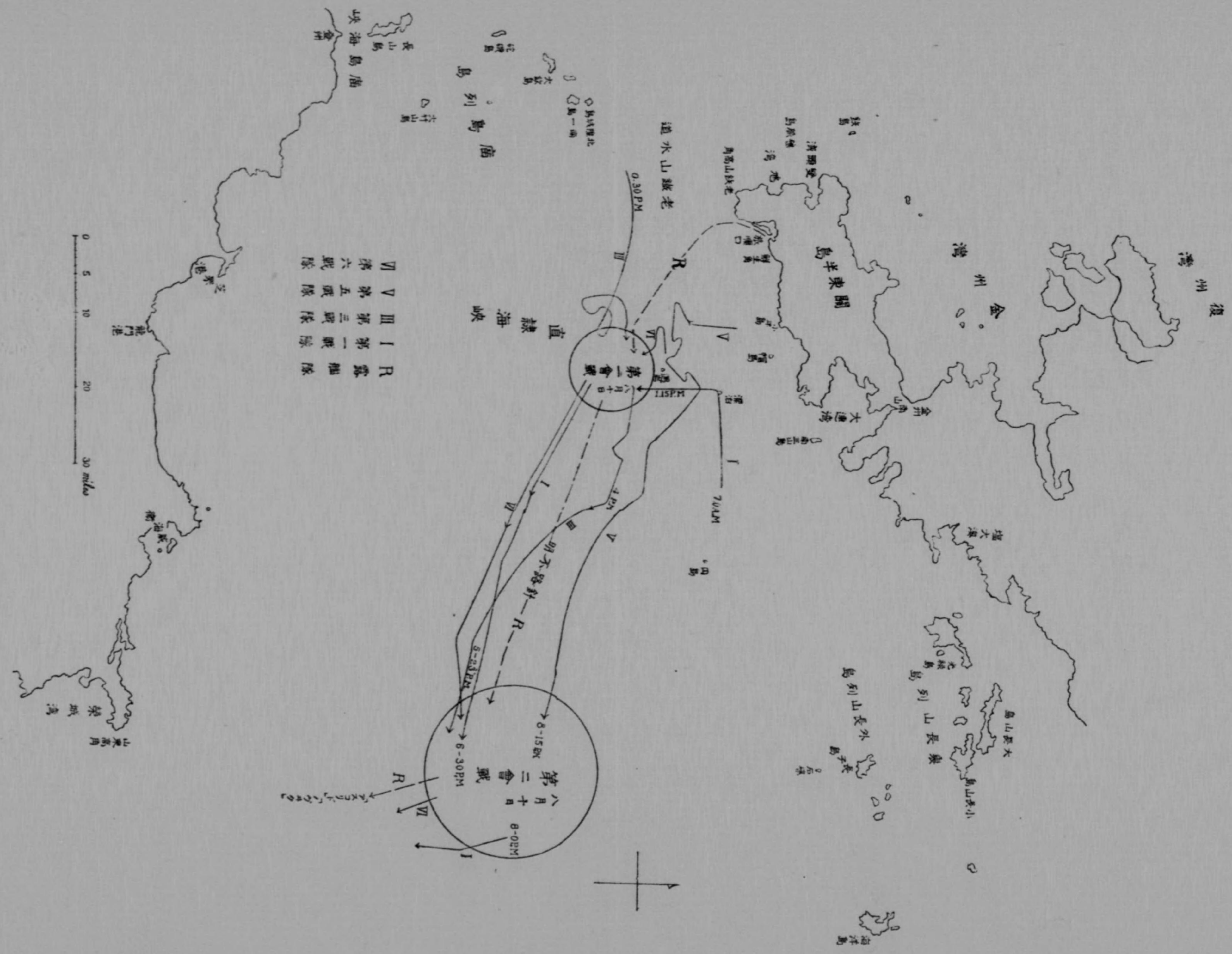
此時、遙に第一戦隊の南々東にあつた第六戦隊は、之を見其前路を扼して猛撃を加へ、第三戦隊も亦

直に左轉して之を追撃し、其他の諸艦は一層奮勵して戦鬪を繼續したのであるが、如何せん日は既に暮れて艦體を識別すること能はざる状態となつたので、不得已して戦鬪を中止して豫定の如く戰場を去つたのである。

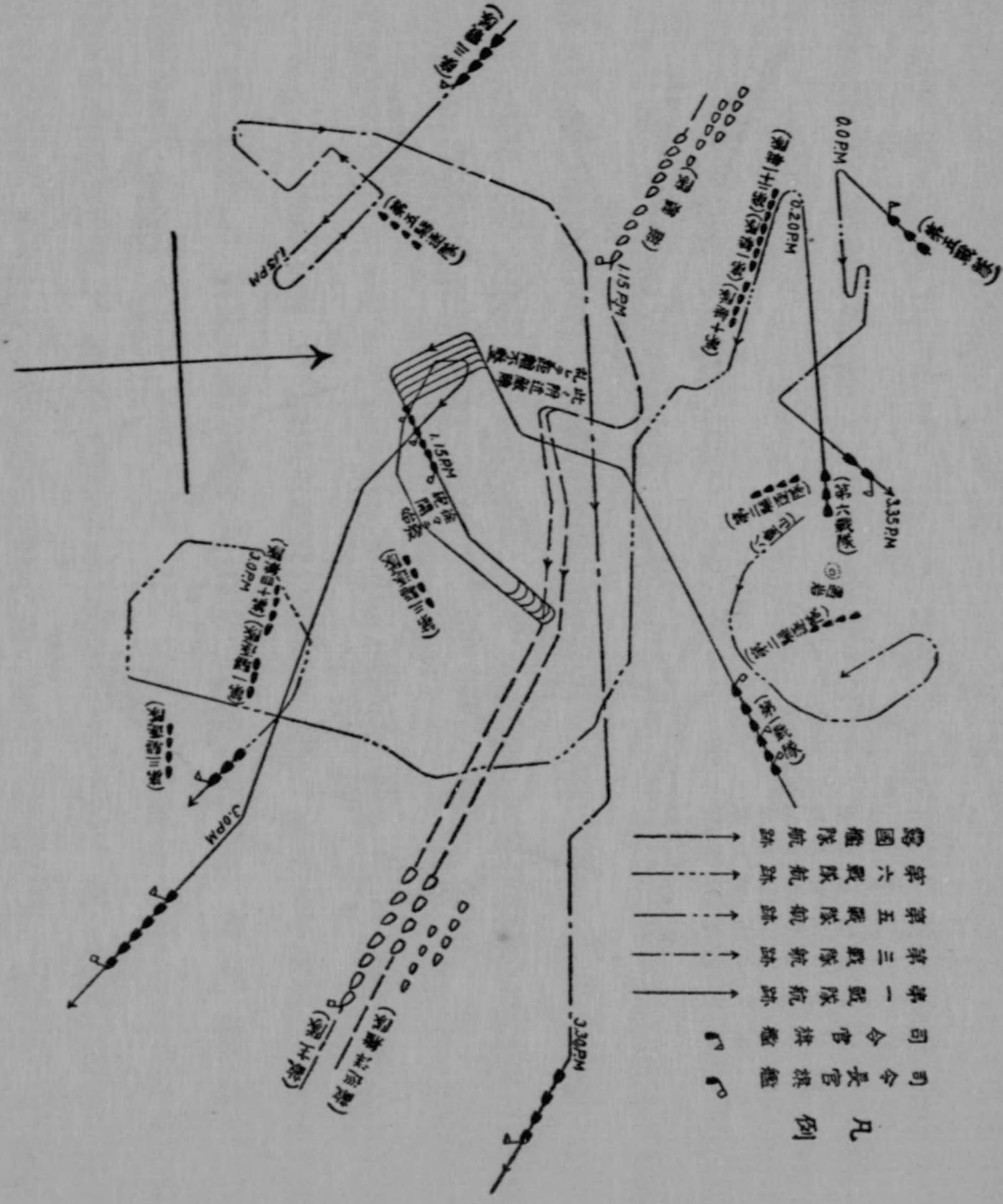
此海戦に於ては、敵艦に大損害を與へ全然隊をなさざる状態に陥らしめたのであるが、味方も亦相當の損害を蒙り、特に三笠の如きは、敵艦隊の攻撃目標となり、分隊長海軍少佐博恭王殿下を御始め、艦長海軍大佐伊地知彦次郎以下八十八名負傷し、二十四名戦死したのであるが、他の諸艦の損害は左程大ならざる状態であつたのである。

斯くの如くして旅順艦隊は分散したのであるが、其大部分は旅順に遁れたのである、而も、此時日は既に暮れ、最早戦鬪を繼續するに適せぬ状態となつたので、其後の戦鬪を驅逐艦艇隊の活動に譲り、個々搜索襲撃の任に就かしたためたのであつた、但し各驅逐隊は終夜敵を搜索し數、攻撃を加へたのであるが、遺憾ながら十分の効果を奏すること能はずして終つたのである。

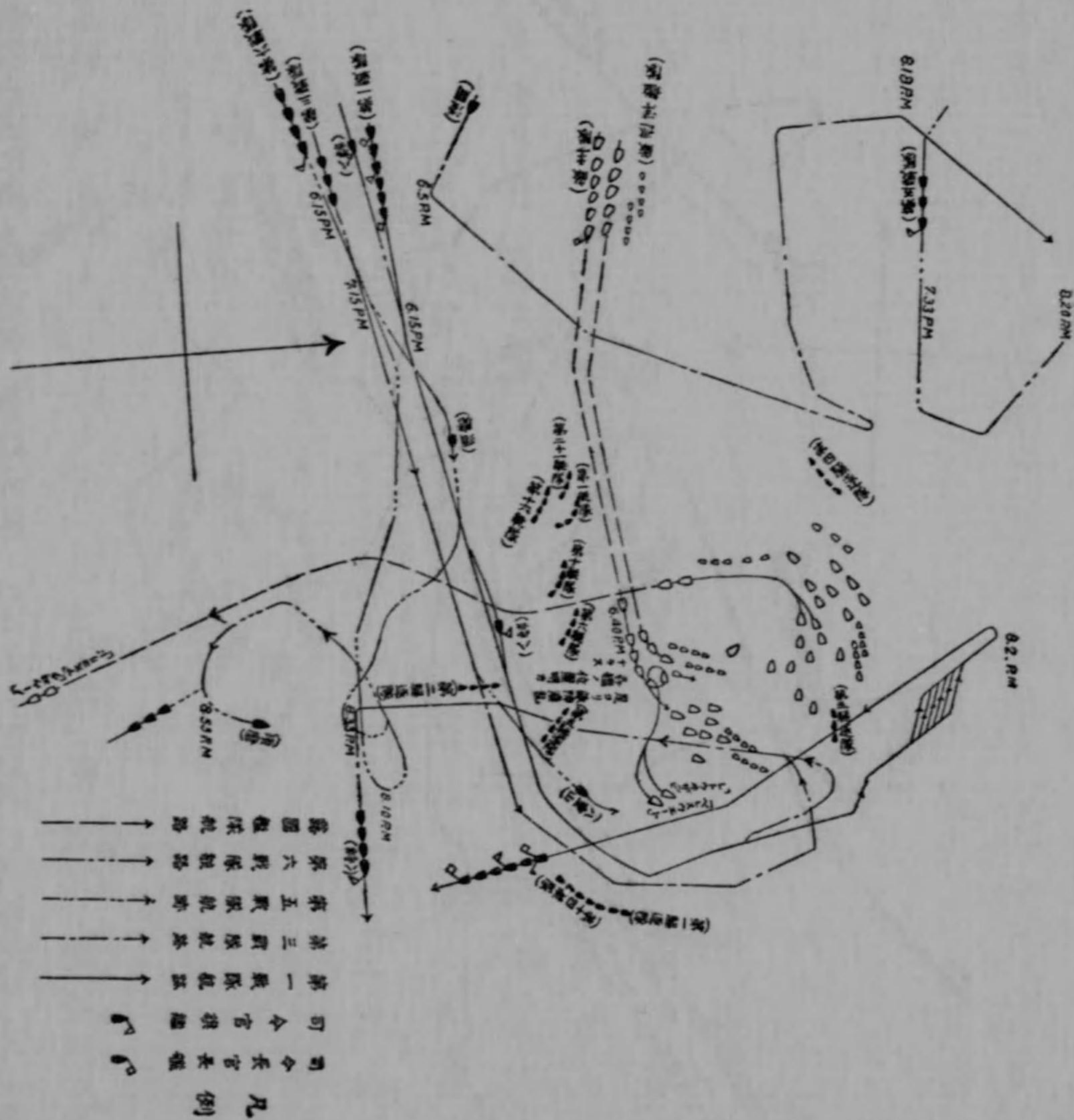
(備考) 此海戦に關し、露國側の傳ふる所によれば、六月二十三日の出勤に際しては、日本艦隊の勢力の依然として優勢なるを見て、港内に歸還したのであるが、幾くもなく第三軍が旅順の背面に迫り、露國艦隊は腹背敵を受くる姿となり、且浦鹽回航の命にも接したる結果、「ウキトゲフト」將軍は、封鎖を脱出して浦港に遁走せんと決心したるもの、如く、八月九日には出港の準備を



第一合戰圖



第二合戦圖



終り、曩に敷設水雷に罹りて損傷した巡洋艦「バイーン」以外の各艦艇は、十日拂曉港民の熱心なる祝聲に送られ、順次出港し、「ウキトゲフト」將軍は各艦に向ひ、浦港回航の信號命令を發し、掃海船を嚮導となし、旗艦「ツエサレウイチ」を第一に、「レトウキザン」、「ポベータ」、「ペレスウエート」、「ウフトムスキ」、「セワストポリ」、「ポルターワ」巡洋艦「アスコリド」(「レイツエンシテイ」)「バライダ」、「チャナ」の順序に單縦陣を制り、巡洋艦「ノウキク」其先頭に立ち八隻の驅逐隊は、旗艦「ツエサレウイチ」の側面に隨伴し、病院船「モンゴリヤ」は赤十字旗を掲げて續航し、別に二隻の砲艦と一隊の驅逐艦とは、途中掃海船を擁護せんが爲に出港し、午前十時十五分には、既に水雷敷設面を過ぎたので掃海船等を歸港せしめ、老鐵山の南方海面より針路を南東に取りて進航したのであつた。斯くて兩艦隊の間に戦闘が開始せられ、刻一刻激戦の状態に進んだのであるが、午後六時四十分頃、「ツエサレウイチ」の前橋の根部に爆發した一弾は、前橋の大部分を破砕し、「ウキトゲフト」將軍を斃し、幕僚の全部を死傷せしめ、艦長も亦負傷して人事不省となり、舵柄は損傷の爲に偏倚し、艦體自然に旋轉して列外に逸出したのである、是に於て「ペレスウエート」に坐乗する「ウフトムスキ」司令官、代つて艦隊を指揮することとなつたのであるが、同司令官は南下の企望を抛棄し、旅順に歸航するを得策なりと認め、高く信號を掲げ「本官に續け」と命令したのである、さりながら各艦既に混亂状態となり、行動の統一を失ひ、二番艦「レトウ

「イザン」は突然戦列を離れ、日本艦隊に向ひ突進したる後、左方に回頭し、「ツエサレウイチ」を一周して針路を旅順に向け、「ポベータ」之に倣ひ、「ツエサレウイチ」獨り戦場に留るの已むを得ざるに至つたのである。

此際「アスコリッド」に坐乗せる司令官「レイツエンシテイン」少將は、其戦隊の包圍せられんことを危み、其形勢の急なるを見「我に隨航せよ」の信號を掲げ、抵抗の輕易なる方面に突出し、先づ南東に向ひ血路を開き、「ノークキク」「バラード」及「ヂャナ」之に續き、最大速力を以て急航したのであるが、日暮後は互に相失し、個々に遁走し若干の驅逐艦も亦南方に逸走したが、驅逐艦の一隻「ブルヌイ」は、不幸にも山東高角附近に擱坐し、其乗員は威海衛に於て英國政府の手に收容せられたといふことである。

聯合艦隊は、翌日敗殘艦隊の索敵に従事し、當時朝鮮海峡扼守の任にありたる第二艦隊と協力するの必要を認めて之を招致し、黒山島附近に来るべき命令を發したのであるが、其他の諸戦隊は、各方面に分れて殘敵の處分に従事し、午後に至り敵艦隊の大部分の既に旅順に歸港せるを知り益々同港方面の監視を嚴にし第二戦隊は之を朝鮮海峡に復歸せしめたのである。

(備考)露艦隊旗艦「ツエザレウイチ」は、乗員艦體共に大損害を被り、僚艦と行動を共にし難きを自覺し、獨り浦港に赴かんとしたが、煙突破壊して石炭の消費夥しく、且航海要具缺損して用をなさ

ず、讒に星位を測り十一日黎明山東高角附近に達したのであるが、到底浦港に到達すべき望なきを悟り、已むを得ずして膠州灣に向ひ、同日午後十一時頃、同灣に到着し、驅逐艦三隻も亦同夜及翌朝に互り同じく膠州灣に入り、獨逸官憲の監督の下に武装解除の處分を受けたのである。「ノークキク」も亦、一たび膠州灣に入泊したが、翌日石炭を搭載し、十二日未明、同灣を出て、日本の東方を迂回し浦港に逃れんとしたのであるが、二十日午後四時、「サガレン」島「エンツマ」埼の南方に於て、同艦處分の爲に特派されたる千歳、對馬に會し、「コルサコフ」方面に壓迫せられ、「エンツマ」埼に近き西方海岸に擱坐したのである。又「アスコリッド」及驅逐艦「グロゾウオイ」は相前後し十二日午後上海に逃れ、「ヂャナ」は遠く「サイゴン」に通れ、皆悉く武装解除の處分を受け、其乗員は抑留されたのであつた。

黄海海戦の捷報 天聽に達し、八月十二日を以て畏くも東郷司令官に賜はつた 勅語は左の通りであつた。

勅語

聯合艦隊ハ敵ノ艦隊主力ヲ旅順口沖ニ邀撃シ大ニ之ヲ破リ多大ノ損害ヲ與ヘタリ
朕深ク其ノ武勇ヲ嘉尙ス

尙 皇后陛下及 皇太子殿下よりも、翌十三日左の如き御賞賛の令旨を賜はつたのである。

皇后陛下令旨

聯合艦隊ハ旅順港外ニ逸走シタル敵ノ艦隊ヲ邀撃シテ潰亂ニ至ラシメタル趣
皇后陛下ノ懿聞ニ達シ我カ將校下士卒ノ忠勇毎戰善ク其功ヲ奏シタルヲ深ク御感賞アラセラル。

皇太子殿下令旨

聯合艦隊ハ脱出ヲ圖リタル敵ノ艦隊ヲ大ニ撃破シ遂ニ之ヲ潰走セシメタルノ報ニ接シ將卒ノ忠勇ヲ
欣尙ス

同十三日東郷司令長官は、勅語に對し左の奉答文を奉つたのである。

奉答文、

旅順ノ敵艦隊ニ對スル戰捷ニ對シ茲ニ復タ優渥ナル勅語ヲ賜ハリ臣等感激ニ堪ヘス敗殘ノ敵ノ主力
ハ再ヒ旅順ニ通入シタルモ各方面ニ於ケル作戰尙進行中ニ在リ臣等奮勵有終ノ戰果ヲ收メンコトヲ
期ス

右謹テ奏ス。

同十三日、皇后陛下及 皇太子殿下より賜はりたる令旨に對し、東郷司令長官より捧げたる奉答文は
左の通りである。

皇后陛下の令旨に對する奉答文

旅順ノ敵艦隊ニ對スル戰捷ニ付茲ニ又優渥ナル 令旨ヲ賜ハリ感激ニ堪ヘス益々奮勵有終ノ戰果ヲ
收メンコトヲ期ス

右謹テ奉答ス

皇太子殿下の令旨に對する奉答文

旅順ノ敵艦隊ニ對スル戰捷ニ付茲ニ又優渥ナル 令旨ヲ賜ハリ感激ニ堪ヘス益々奮勵有終ノ戰果ヲ
收メンコトヲ期ス

右謹テ奉答ス

斯くて、露國艦隊旅順脱出の目的は完全に破壊せられ、港口の警戒監視彌々嚴密を加へ、最早如何と
もなし難き情態となつたのであるが、我國の立場より之を見れば、波羅的艦隊東來の場合迄、之を其
儘に放置するは此上もなき苦痛である。一方には新來の露艦隊に對し、一方には旅順艦隊に對し、共
に之を撃滅するが如きは、我海軍として勝算ありと確信する譯には行かぬ。さりとて其以前に於ては
旅順艦隊脱出の望なしとせば、彼を殲滅するの望全くなきは明瞭である。従つて此際陸軍の力を藉
り、旅順を攻陥し、同時に旅順艦隊を撃滅するの急務日一日に迫りつゝあるは、何等の疑もなきこと
である。是實に大體の作戰上、是非とも考慮すべき重大事であらねばならぬ。

海上方面としては、對旅順艦隊の作戰の結果左迄に不良なりとは稱し難く、陸上方面としても、連戦連勝の事實に徴し、決して失敗とは言ひ得ぬのである、されど日清戦争の際には、一舉手一投足の勞を以て、何の苦もなく攻め落したる事實に顧みれば、如何に清國を以て露國に比すること能はざるにもせよ、如何にも緩慢なるが如くにも見ゆるのである。乃ち第三軍が、幾度か勇敢なる攻撃を加へても、其都度撃退せられ、悲觀的なる而も屈辱的なる批評をさへ下されたので、此時の攻圍軍司令官たる乃木將軍の心事は、實に悲痛なものであつたであらう。大本營としても、如何にもどかしく思はれたであらう。従つて無理なる注文とは知りつゝも、激勵の辭を以て第三軍に對するは、已むを得ざる事であつたであらう。山縣元帥(當時の參謀總長)が陣中の乃木大將に對し、詩を電送したのは、武士の情としては兎角の批評を免れぬとしても、當時に於ける實話としては、如何にも當時の實情の如何なりしかを想見せらるゝのである。

昨夜夢^ニ陥^レ旅順城^ヲ有^レ作遙寄^ニ乃木將軍^ニ

百彈激雷天亦驚^ヲ 包圍半歲萬屍橫^ハ

精神到處堅^シ於鐵^ニ一舉直屠旅順城^ヲ

之を讀んだ乃木將軍の心事は、果して如何であつたであらうか。此間の消息を翫味すれば、更に深刻な意味を感じるのである。誰しも君國を憶ふの情に變りはないが、當時の乃木將軍の心中の苦悶、實

に察するに餘りあるではないか。同胞國民たらんものの同情すべく、而もよくよく翫味すべき所であらうが、旅順は依然として陥落すべき模様がな、敵ながらも天晴なものであつたのである。

此際、陸軍にとつては此上もなく重大な問題が、旅順陥落が長引く結果として現はれたのである。元來滿洲方面に於ける戰の勝敗は、陸上作戰の勝敗の全局を支配するので、今日の處では旅順の陥落不陥落の如きは、大局より見て左程重要とも思はれぬのである。殊に數萬の兵を犠牲にしてまでも、早急に陥落せしむる必要がない。而も、落城は時期の問題で、假令其儘に放置しても、早晚陥落を免れざるは明瞭である。従つて滿洲方面の危険を放擲して旅順に大兵を用ゆることは、苦痛中の苦痛である。寧ろ滿洲方面の兵力を増加することが、最第一の良策で、急務中の最急務である。滿洲に於ける彼我兩軍の關係より大局の勝敗を察するときは、此際滿洲に用ふべき兵力を割いて、旅順の攻戰に兵力を増加するが如きは、決して良策ではないといふのが、陸軍の主張であつた。併し又、他の一面より觀察し、海軍の見地より察すれば、旅順港内の艦隊を撃破せざる以上は、露西亞の第二、第三艦隊(露國は戰勢の推移に鑒み「ロゼストウエンスキー」將軍を第二艦隊に、「ネボカトフ」將軍を第三艦隊司令長官として東進のことに決し、既に來東の途上にあつたのである。)が近海に現はれた場合、到底勝算がない、如何なる方法を講ずるも、波羅的艦隊の來東以前に於て、之を撃破し、我全力を以て新來の敵のみに對抗する如く、戰勢を推移せしめざる以上は、大局上我國の勝利に終ること困難である

旅順の要塞其物の陥落は、姑く措き、港内に残存する艦隊は、如何なる方法を講ずるも、之を撃破せねばならぬ。而も現在の状態に於ては、海戦によつて彼を撃破することは、絶対に不可能となつたのである。

右の如き觀察の相違が、陸海軍の間に現存するので、大本營に於ける論議は容易に決定しないのであつたが、協同作戰に關する美しき精神が、此際にも顯はれ、「滿洲軍の苦痛は如何にも苦痛ではあるが旅順艦隊の存在する以上は、波羅的艦隊に對する場合、我海軍の兵力を二分する結果としては勿論、萬が一にも、旅順艦隊が波羅的艦隊と相策應して脱出するが如きことあらば、如何にするも勝算ありと見ることが出來ぬ」との大局的觀察に基き、此際兎も角も、第一に旅順を落さねばならぬ、従つて包圍軍を割くが如きは勿論、寧ろ出來得る丈けの増兵を敢てし、猛烈なる攻撃を行ひ、一日も早く之を陥落せしめねばならぬといふに決定したのであつた。即ち彼の史上に有名なる二百三高地の攻略及陸上方面よりする在港露艦隊の砲撃等は、皆右の目的の爲に實行せられたので、當時海軍側から大本營會議に提出した意見書は左の通りであつたのである。

海上を制すると否とは、作戰の大局上至重の關係を有するは言を俟たず。開戦以來、我艦隊は幸に敵艦隊を制壓して海上を専らにすることを得、戦局有利に進捗しつゝありと雖、旅順並浦汐の敵艦隊は未だ容易に侮るべからざるものあり。爲に我艦隊は、全力を擧げて此警戒に服せざるべからず

而して艦隊の多くは、昨年以來間斷なき戦闘航海に従事し、船體並汽機汽罐の現状著しく不良の状態に陥り、(中略)大至急工事を以てするも、尙二個月を要す。然るに旅順口の防禦意外に頑強にして、攻略の期日豫め確定し難く、敵の主力艦隊は、港内深く蟄伏して現存の狀を維持し、浦汐艦隊亦修理を完成しつゝあり。且今や彼の波羅的艦隊は、大規模の準備を整へ、東航の途にあり。(中略)我艦隊は、遂に戰鬥力を恢復するの暇を得ずして、新鋭なる波羅的艦隊に當らざるべからず。作戰の前途實に憂慮に耐へざるものあり。此時に方り、旅順の攻略を全うするの急務は勿論なりと雖、彼我の對勢上、全部の攻略を許さざれば、尠くとも港内を周ねく瞰制し得る地點を占領し、港内敵艦の撃破を圖るを刻下の最大急務なりとす。云々。(後略)

此意見は如何なることあるも、苟も眼を大局に注ぐ以上は、聽かざるを得ないであらう。そこで參謀總長から、此意味を大山滿洲軍總司令官に申送つたので、滿洲軍總司令官も亦眼を大局に注ぎ、旅順の攻撃に全力を注ぐといふことになつた、併し滿洲軍司令官の意見としては二〇三高地の價値に就て大本營と意見を異にしたのである。其要領としては、二〇三高地は旅順攻略の意味が間接である、寧ろ砲臺を取るのが旅順の攻略上に効果があるといふ理由で、二〇三高地を取る爲に多數の犠牲者を出すことは滿洲軍司令官としては面白くなかつたのであるが、併し遂に二〇三高地を攻略することに同意し、全力を傾注して作戰上の成功を期することになつたのである。

此際滿州軍が、大本營と同じく眼を大局に注ぎ、陸海軍協同して作戰に従事するの根本精神を尊重し相提携して此大切な大戦策を執行し得たことは、萬世を傳へて模範とすべき美談であらう。

(備考)此場合に至り、開戦以前のことを述ふるは、其所を失するの嫌なきにあらずとはいへ、我陸海軍の協同精神に富みたる美談を述べたるに對し、露西亞の事情を述べて勝敗の素因を考察するの一資料に供するも、強ち無益のことでもなからう。

元來、日露戦争は露國より仕懸けた戦争である、従つて我帝國よりも寧ろ以前に凡ての準備を整へて居らねばならぬ、即ち作戰計畫の如きも勿論日本以前に決定して居らねばならぬ筈である。果せるかな露國の對日作戰の方針は明治三十四年頃に早くも決定して居たのである。斯くの如きは、各國國軍の常に注意し對外作戰の如きは、平時より想定計畫し置くべきこと今更言を俟たぬのであるが、具體的に之を決定し置きたるは注意すべきことである。

千九百一一年四月十一日附露國の對日作戰方針

(一) 我艦隊の任務は、渤海黃海南朝鮮海を制壓するにあり。

(二) 斯くして、仁川鴨綠江に日本軍の上陸を不可能ならしむると共に、我陸軍を奉天遼陽線に集中することを得へし。

(三) 此任務を最も容易ならしむるには、我艦隊は之を二群に分置するを要す。即ち主力を旅順に

置き、敵の黃海進入を阻止し、朝鮮の兩岸に揚兵を防止し、又支隊を浦汐に置き、敵の交通路を攻撃し、又は敵國沿岸を脅威し、敵の一部を旅順方面より分割せしむるにあり。

右の作戰方針によれば、露國は當初より我海軍の勢力を二分せしめんとするの計畫であつたことは明瞭である。明治三十六年九月露國の參謀本部から、極東艦隊參謀長に日本との開戦に際して、極東に於ける狀況に就き左の如き前提の下に問合を發したといふことである。

一、動員發令後、少くとも一個月の間は、日本軍が營口には上陸しないと考へて宜しいか。

二、若し日本が朝鮮海岸に軍隊を揚陸するに決定したならば、敵艦隊に對し、決戰的勝利を獲得せずとも、我艦隊は幾何時間同海に揚陸を阻止し得るであらうか。

右の問合に對し、太平洋艦隊參謀長より左の如き返事があつたといふことである。

我艦隊が撃破せられざる以上、右の二問題の如きは絶對的に不可能である。尙本官一個の意見としては、現有對比兵力に於ても、我艦隊は日本艦隊より朝鮮海灣又は黃海に於て破らるゝことはならぬ。

大分思ひ切つた進言である、而も此時は新來の戰團艦一隻と、裝甲巡洋艦一隻とが旅順に到着しない時分であつた。

右は事實上、露國陸軍の計畫の基礎となつて決定されたといふことである。然るに日本軍の作戰計畫

は、それとは全然面目を異にし、露國の全部守勢的であつたのに反し、全然攻勢的であつた、露國が如何に海上を制せんとしても斯くの如き作戰方針では、到底目的を果し得べしとは思はれぬのである。我海軍に於ては、大元帥陛下の勅命により、敵を發見して之を撃破せんとするの攻勢的行動に出たことは勿論である。日本海軍の司令長官は、直に黃海に入り、旅順仁川にある敵の艦隊を撃破することに決心したので、日本は實に此意氣を以て戰に勝つたのである。敵の上陸が何時迄出來ないかなど、消極的な問合を發する如き分際とは、格段の差である。

一體露軍の方針は、大體に於て積極的であつた、殊に絶東方面に對しては、著しく積極的であつたにも拘らず、此際の露國の遣り方は、如何にも消極的であつた、弱者に對する積極的行爲は、自己の其實弱者たるを證するものではなからうか。又個人同志の關係に於ても、心中兇事を計畫する場合、其表面に於ては努めて君子人を以て自ら處るもの多きが如く、露國は開戦の場合に於ても、此戦争は自分より仕掛けたのでは決してない、と唱へ得べき口實を世界に承認せしめんとする底意であつたのは、如何にも狡猾なる行爲である。されど、露國皇帝が、極東の代表者に對して命令を下した時は、既に時機が後れて居る。而も其方針に於て既に徹底的意氣を缺いて居たのであつた。

二月八日と言へば、日本の艦隊が既に佐世保軍港を出發し、最早旅順に近づいて居たのである、然るに露國は同二月八日に於て、最後の會議を開き、極東大守に對し、次の如き電報を發したといふことである。(括弧内は著者の挿言である)。

開戦の實行は日本たらしむるを望む、(斯くの如きことは帝者の言として威嚴がない)故に若し日本に於て戰鬪行動を執らざれば、假令南鮮に揚兵するも、亦東方元山港及其以南に揚兵するも、我は之を妨げざるべし(決心の鞏固ならざるを證するものである)但し、若し日本にして朝鮮西岸に於て其艦隊が陸兵を伴ふや否やを問はず、三十八度の緯度を通過せば、彼の敵對行動を待たずして、我艦隊は直に之を攻撃すべし。(戰意の有無も明瞭でない、斯くの如くして士氣の旺盛を期することは到底望み難きことである。)

右の如き意氣込では、戰の敗るゝも理の當然である。露國は何故に二月六日の國交斷絶前に、攻勢的作戰に出づることを命じなかつたであらうか。此一事は如何にも疑ふべきことである、陸上の作戰は姑く措くも、何故に平生の筆法に出でずして、消極的態度をとつたであらうか、古來英國海軍が常に攻撃の態度を以て常勝艦隊の名を贏得した所以も、常に攻勢に出で、必勝を期すといふが如き尊き決心の賜であつたのである。

開戦前、兩國の情勢は、相當に長く危険の状態を持續して居たのであるが、明治三十七年二月二日海軍大臣を通じ、

我聯合艦隊は速に旅順の敵艦を撃破すべし。

との命令が發せられ、二月八日には旅順攻撃に取りかゝつたのである。此夜旅順に於ては、敵襲に對する何等の準備もなく、二月八日に皇帝より作戰命令が發せられた程度であつた（露曆一月二十六日に當る）加之、同日は恰も聖母「マリヤ」に縁み、一般に「マリヤ」の名を有する婦人の祝日に當り、上下共に之を記念し、陸上に大きな「ポール」が開かれ、舞踊が盛に行はれ、艦隊の士官も多數招待を受けて踊り狂つて居たのである。然るに焉ぞ知らん、其最中に日本の驅逐隊が港外碇泊の露國艦隊に襲撃を加へたので、旅順に於ては、自己の屬する艦隊が敵の攻撃を受け、大活劇を演じつゝあるを知らなかつたのである。享樂主義に捉はれた國民の有する軍人は、哀れなものである。一體軍人が——絶對的にとは言はぬが——國家の一大事眼前に迫る場合に於て、國家を雙肩に負つて立つべき責任を持ちながら、享樂主義に魅せられて踊り狂ひつゝある間に、敵襲を受くるなどは沙汰の限りである。場合によつては宜いかも知れぬなどは間違の本である。

要するに露國の戦策は、前に述べたる如く、戦前より一定して居たので、浦鹽艦隊の行動によつても察せらるゝ如くであるが、露國の失敗は外線作戰の誤用とでも言へるであらう、併ながら露國の不用意が敗戦の原因となつたのは、明瞭である。開戦當時日露の勢力比は正に一〇對一七で、殆ど華府會議の結果として協定されたる日對米比率と同一であつた。若しかの際露國が次の如き戦策を取つたならば、果して如何なる結果を將來したであらうか。

旅順に機雷を沈め、砲臺と相俟ち、最も消極的な而も堅實なる防禦の姿勢を整へ、我國との交渉少しく困難を感じたる時期に於て、在東洋の艦隊を引揚げ、本國艦隊と中道に合同し、堂々と東洋海面に顯はれたならば、果して如何なる結果を生じたであらうか。單に黃海のみと言はず、東洋全體の制海權を目的として活動したら如何であらうか。

然るに、露國は此戦策に出でず、僅の新艦を増派し、不徹底なる態度を取つたのであるが、此戦策は我國をして、一時的に若干の脅威を感じせしめ、外交的には幾何か寄與する所あつたには相違なからうが、大局の作戰には何の利益もなかつたのである。大體上より觀察すれば、寧ろ我國の歡迎すべき露國の失敗で、彼露國が其兵力を分離するは、日本をして内線に働かしむる所以で、日本としては望まじきことであつた。彼は艦隊を本國と極東に分置し、又旅順と浦鹽とに分割し、内線に働く日本艦隊を牽制しやうとしたのは、甚しき小細工と謂はねばならぬ。元來内線に働く海軍は、大なる強味がある。英國の傳統的戦策は、何時でも集中勢力を内線に配置したのである、戦史の示す所によるも、自ら此點に對する觀察を起さずには居られぬのである。英國の配置したる艦隊と、佛、蘭、西の軍港の配置を察するに、英は常に敵國の海岸に艦隊を置き、敵の中間に集中して個々に敵を撃破するに努め常勝の名を専らにすることが出来たのである、英國が移動兵力に依て、國防の目的を果したるも、「ジブラルター」を取つたのも、中斷戦術を賞用したるも、皆同一の理に基いたのである。

第九章 旅順方面に於ける陸海協同作戰

是より先、我陸軍の第三軍は、第一師團を右翼として旅順に對し、椅子山、案子山に、第九師團を中央部隊として盤龍山東西堡壘に、第十一師團を左翼として東鷄冠山砲臺及同北堡壘に向はしめ、多大の損害をも顧みず、晝夜間斷なく攻撃を勵行し、遂に盤龍山、東西堡壘を陥れたのであるが、敵の防禦如何にも堅牢で、到底一舉に之を攻陥すること能はざる状態であるので、第三軍司令官陸軍大將乃木希典は攻撃中止を命じ、更に正攻法により逐次敵壘を抜くべき戦策を立て、八月二十四日夕刻之を全軍に令し、且之を聯合艦隊にも通告し來つたのであつた。そこで、東郷司令長官は封鎖艦隊の現狀に鑑み、旅順攻略の一日も速ならんことの必要を認め、翌二十五日意見を大本營に具申し、乃木司令官には、第三軍の連日の奮戦に對する同情の意を表し、二十六日全艦隊に陸戦の狀況を傳へ、且旅順陥落は尙時日を要するが故に、我艦隊は一層忍耐して有終の戦策を收むべきを訓令したのであつた。

斯くて、第三軍は八月二十四日以後攻撃を中止し、専ら兵員彈藥等を補充し、或は大砲を増加し、正攻法により攻路を掘る等、種々の準備に努めたのであるが、九月十九日再び右翼方面の攻撃を始め、第一師團は二〇三高地、(其後乃木將軍は爾靈山の雅號を與へた)海鼠山及水師營南方堡壘群を、第九師團は、龍眼北方高地の堡壘を攻撃したのである、尙二十日雙頭灣方面の濟遠より、平遠の哨戒線

から、歸來せざるを報じ來つたのであるが、同艦は哨戒勤務中、浮流水雷に罹り沈没したのであつた。二十三日東郷司令長官は、第三軍が「龍眼北方、水師營南方堡壘及海鼠山堡壘は之を占領し得たるも二〇三高地は數回の勇敢なる突撃も其功なく第一師團は正攻法を以て更に攻撃を開始せんとす」との情報に接したのであるが、尙翌二十四日「ロシヤ」「グロモボイ」及水雷艇三隻二十一日夜浦港を出發せりとの情報(これは誤報であつた)に接したので、出羽司令官に命じ、軍艦八雲を第二艦隊に復歸せしめたのである、斯くて兩三日は何事もなかつたのであるが、二十八日第三軍に屬する海軍陸戦重砲隊指揮官海軍中佐黒井悌次郎より、軍は二十八日より「ペレスウエート」「ポペーダ」外一隻の敵艦に對し砲撃を開始せしに彈着良好なりとの報告に接したので、益々封鎖を嚴にして敵艦の脱出に備へたのである。

十月に至り、第三軍より「前月下旬開始したる陸戦重砲隊及二十八榴榴砲撃は成績頗る良好にして、毎日數發の命中彈を算しつゝあるので、敵艦隊の脱出若くは撃滅を期しつゝ砲撃を續行しつゝあるが敵は漸次錨地を白玉山南麓及東港内に移し、彈着の觀測不可能になつた」との情報を受取つたのであるが、九月二十六日に開始したる第三軍の第二攻撃に於ては、二十八榴榴砲を以て砲撃を開始し、三十日午前總攻撃に移り、午後松樹山、二龍山及東鷄冠山北砲臺に向ひ突撃を決行し、僅に一戸堡壘、瘤山北堡を占領し、又永久堡壘に對する攻撃作業を進捗せしめ得たるに止まり、全要塞の攻略は、今や

再び日を期して待つべからざる状態となつたのである。然るに、露國は戦艦七隻装甲巡洋艦二隻巡洋艦六隻驅逐艦九隻其他の特務艦を合し四十餘隻よりなる増援艦隊を編成し太平洋第二艦隊と命名し、九月十五日を以て本國を發し其一部は既に地中海に入り、其主力は亞弗利加西岸に沿ひ喜望峰を迂回するの途に就けりとの情報に接したのである。そこで、東郷司令長官は未だ旅順の封鎖を弛むべき時機にあらざるにもせよ、増援艦隊に對する作戰準備の爲、事情の許す限り、麾下艦艇の一部を割き、相交代して戦闘に必要な修理を實施せしむるに決し、著々之を決行したのであるが、十月十七日大本營海軍幕僚より、聯合艦隊參謀長海軍少將島村速雄に對し、大本營の波羅的艦隊の東航に關する判斷、并彼我艦隊の現状に關する所見等を報じ來つたのであつた、而して其大要は、

波羅的艦隊は、其準備より考ふるも、必ず東洋に回航するものと認むべく、尙今日迄の航程より察すれば、遅くも三十八年一月初旬頃には、臺灣海峽附近に達することが出来る。而して我艦隊が、其戦闘力を恢復する爲には、大至急工事を以てするも、修理に二個月の日子を要するであらう、従つて十一月下旬に至るも、尙旅順の戦況發展せざるに於ては、我艦隊は封鎖を撤して内地に歸還せねばならぬ。

といふのであつたので、東郷司令長官は乃木司令官に對し我艦隊の現状を告げ、旅順敵艦隊の滅亡を一日も早からしめんが爲、先づ第一に二〇三高地の占領を急がれんことを交渉せしめたのであつた。

そこで、第三軍は二十六日を以て總攻撃を開始し、砲戦に次ぐに突撃を以てし、更に奇襲を試みたのであるが、不幸にして其効果を收むること能はず。二十七日より更に其方面を轉じ、専ら二〇三高地の奪略を企て、激戦の後二十八日夕一旦其頂點を占領し得たのであるが、忽ちにして敵に奪還せられ、其後更に第七師團の全力を同方面に加へ、第一師團と共に専ら之が攻略に従事せしめたのであるが、終に成功に至らずして已んだのである。又、雙頭灣方面にあつて、第三軍右翼の應援に従事しつつあつた濟遠支隊は、曩に平遠を失ふたのであるが、三十日に至り濟遠も亦機械水雷に觸れて沈没したのである。凡そ斯くの如く、戦運餘りに好良ならざる状態にあつたのであるが、同日早朝より第三軍の開始したる二〇三高地の攻撃は、激戦苦闘を重ね、夜に入りて後兩頂點の大半を占領し、今一息とも云ふべき状況に於て同夜を過したのであつたが、翌十二月一日天明前、又もや敵の決死的逆襲を受け殆ど占領し了りたる東北の一巔を失ひ、西南の頂點も亦其維持困難を極むる状態に陥つたのであるが天明に至り同頂巔より旅順港内を展望したる結果、「バヤーン」、「アムール」、「セワストポリ」は東港及其附近に、其他の諸艦は皆白玉山の南麓に避泊しある等、一々指呼の裡にあつて、港内隈なく見渡し得べき事實を知り得たので、同地點に防禦の堅牢なる觀測所を設け、通信の設備を完全にし、二十八擲砲を以て海軍砲と共に敵艦を猛撃し、一面には兵力を整頓して二〇三高地の全部を確實に占領するに決し、十二月五日再び同高地の攻撃を開始し、激戦の後遂に完全に同山を占領し得たのである。

斯くの如くして、二〇三高地を占領し、十分なる観測を行ひ得べき状態となつたので、彌々秩序ある間接射撃を開始し、且完全なる観測所を築造し、第三軍の攻城砲兵隊は海軍陸戦重砲隊と力を併せ、重砲の猛撃を敵艦に加へたので、彈丸の命中數ふるに違なく、「レトウキザン」は著しく左舷に傾き「ボルタワ」と共に到底航海に堪へざる状態に陥り。「ペレスウエート」及「ポベータ」にも、多數の命中彈あるを確めたのである。七日に實施したる砲撃の如きは、其效更に著しく、「ボルタワ」は已に海底に膠坐し、「レトウキザン」は益々左舷に傾き、満潮時には海水後部上甲板を侵すの程度となり、「ポベータ」は右舷に傾き、「ペレスウエート」は火災を起したのであつた。斯くて、敵軍は既に艦船を放棄して我砲撃に委ねたるが如く、港内寂として一扁舟の往復だもなく、翌朝に至りては「ポベータ」は艦首より沈没し、「ペレスウエート」も亦沈没し、「ボルタワ」と殆ど同一状態に陥り、「バヤーン」は正午頃より大火災を起し、午後四時を過ぐるも尙且鎮火せず、「バルラダ」も亦火災に罹りて左舷に傾き艦尾より沈没したのであつた。

第三軍の間接射撃は、斯くの如くして偉功を奏したのであるが、「ゼワストポリ」は僚艦の轍を踏むを悲み、九日未明卒然東港の錨地を去つて港外に出で、城頭山の南方に碇泊して我砲火を避けんとしたのである。(此際軍艦明石及高砂機械水雷に罹り明石は幸に艦命を繋ぎ得たるも、高砂は終に沈没したのである。)

十二月十六日、第三軍參謀副長陸軍歩兵中佐大庭二郎三笠に來り。

乃木司令官は、高砂の不幸を悼み、尙今後に於ける我封鎖艦隊の災害に就き憂慮に堪へず、今や敵艦殆ど滅亡に瀕したるを以て、密輸入に對する適當の處置をとられ、第三軍に願慮することなく、艦隊の大部を速に内地に歸還せしめられんことを切望す。

との意味を申越したので、流石、大局に着眼するの明ある乃木將軍の思ひ遣り多き提議は、實に青史に傳へて千歳の訓戒となすべき價值あるは勿論である、東郷司令長官も深く之を多とし、直に左の如き電文を以て旅順に於ける戦況を大本營に報告したのである。

勇氣絶倫なる攻圍軍の猛烈不撓の攻撃に依り、旅順の死命を制すべき二〇三高地が我軍の有に歸せしより、港内敵艦隊に對し、攻城重砲の擲射益々其威力を逞うし、「ボルタワ」、「レトウキザン」は忽ち沈没し、「ポベータ」、「ペレスウエート」、「バルラダ」、「バヤーン」も相踵で撃沈せられ、獨り「セバストポリ」のみ、去る九日朝背面よりの砲火を逃れて港外城頭山下に逸し碇泊せしも、是亦我水雷艇隊の連続果敢なる襲撃に傷つき、今や殆ど全く戦闘航海力を失ふに至れり。旅順敵艦隊の主力は事實上茲に全く滅亡に歸し、唯殘存せるものは、無勢力なる砲艦「アツワーズヌイ」及驅逐艦數隻に過ぎず、是に於て聯合艦隊は、去る五月一日以來強行したる封鎖配備中不必要なる一部を撤すると同時に、益々旅順口及港外よりの破封鎖船舶の監視を密にし、且殘存の敵艦艇に對する警戒を嚴

にせんとす。

此長日月の封鎖戦中、敵の敷設及浮流水雷の危害、風濤、濃霧、險難等常に絶えず、前に宮古、吉野、初瀬、八島、大島、曉、海門の災厄あり、後に速鳥、平遠、愛宕、濟遠、高砂の遭難起り、忠死の將卒も亦なきにあらずと雖、幸にして旅順封鎖を維持することを得、時々敵の脱出することありしも、毎に其企圖を破り、終に攻圍軍の至大なる協力に依り、茲に殆ど當方面敵艦隊全滅の成果を見るに及び、又浦汐方面の敵艦隊も、曩に我第二艦隊の爲に大打撃を受け、爾後再び出動するの氣勢なきに至り、唯益々大元帥陛下の御盛徳の及ぶ所の洪大なるに感激するの外なきなり。而して此間、又麾下各部隊が各其能力に應じて終始能く其任務を遂行し得たるのみならず、死を決して敵港を閉塞したる閉塞船隊、連續撓まずして敵前に機械水雷を沈置したる艦艇、危険を冒して敵海の掃除に従事したる特別掃海隊、并敵艦に暴露して敵艦を監視したる前進望接等の特別勤務が、當方面の封鎖戦に至大の效力ありしことを附報するは、本職の上下に對する職責と信ずる所なり。

右東郷司令長官の報告の如く、旅順口に對する聯合艦隊の任務も、概ね終了したので、伊東軍令部長より、

敵の増援艦隊に對する聯合艦隊の作戰準備を完整せんが爲、旅順口并朝鮮海峽方面には、敵の敗殘艦隊と其密輸入とを阻止するに足る兵力を駐め、自余の艦艇は一旦之を歸朝せしめ、速に戦闘力の

恢復を圖るべきこと、及第三軍と共同作戰の件に就ては、片岡第三艦隊司令長官をして、専ら其局に當らしめ、東郷聯合艦隊司令長官は上村第二艦隊司令長官と共に、便宜大本營に登營すべし。

との電訓に接し、東郷司令長官は三笠坐乗のまゝ、吳港に回航し、十二月二十八日を以て同港に着し、直に上京し、三十日上村司令長官と共に入京登營して戦況を闕下に伏奏したのである。

(備考)第三軍の第九師團は、十二月二十八日午前二龍山の胸墻を爆破し、午後七時全く之を占領したのであるが、是より先、第十一師團は、十二月十八日東鷄冠山北堡壘を奪取したので、第三軍の戦況は着々好況に赴き、三十一日には、松樹山砲臺第一師團の爲に爆破占領せられ、三十八年一月一日第九第十一兩師團は望樓を攻撃して之を略取し、第七師團も亦三羊頭村南方の敵を驅逐して之を占領したのである。斯くて同一月一日露軍の軍使第三軍司令部に到り、旅順要塞開城に關する提議をなし、同二日午後彼我全權委員は水師營に會し、第三軍よりは伊地知第三軍參謀長以下諸員、聯合艦隊よりは岩村第一艦隊參謀全權委員として談判を開始し、午後四時三十五分に至り終結を告げたるを以て、同時に彼我の戦闘行爲を停止し、茲に旅順開城の事實を見るに至つたのである。

一月六日、第三軍司令官陸軍大將男爵乃木希典及聯合艦隊司令長官海軍大將東郷平八郎に左の勅語を賜はつた。

勅語

旅順ハ極東ニ於ケル水陸ノ重鎮ナリ第三軍及聯合艦隊ハ協同戦力久シク寒暑ヲ冒シ其難ヲ凌キ勇戦奮闘克ク其鐵壘ヲ奪取シ堅艦ヲ殲滅シ敵ヲシテ遂ニ城ヲ開キ降ヲ乞フニ至ラシム朕深ク爾將卒ノ克ク其重任ヲ全フシ偉大ノ功蹟ヲ奏シタルヲ嘉ス

右の勅語に對し、東郷司令長官は左の奉答文を捧げたのである。

聖代ノ嘉辰ニ當リ勇武ナル第三軍ト與ニ旅順一局ノ敵ニ對スル作戰ノ目的ヲ達シ得タルハ洵ニ洪大ナル

大元帥陛下御稜威ノ然ラシムル處ナリ然ルニ 臣等犬馬ノ勞ニ對シ更ニ優渥ナル 勅語ヲ賜ハリ感激言フ處ヲ知ラス 臣等唯益々奮勵努力以テ 聖恩ノ深キニ報ヒ奉ランコトヲ期ス

右謹テ奏ス

尙、右 勅語の外、皇后陛下及 皇太子殿下より 御令旨を賜はり、一同更に大に面目を施し、東郷司令長官は一同に代り、御奉答申上たのである。

十二月七日、皇后宮太夫子爵香川敬三は、乃木司令長官及東郷司令長官に左の令旨を傳達したのである。

皇后陛下 令旨

我第三軍竝ニ聯合艦隊ハ水陸協戮旅順ヲ重圍スルコト數閱月激戦幾百回堅ヲ破リ銳ヲ挫キ辛酸壯烈

防備無比ノ天險ヲ冒シ頑硬不屈ノ勁敵ヲ勦シ遂ニ彼ヲシテ城ヲ開キ降ヲ乞フニ至ラシメタル趣

皇后陛下ノ懿聞ニ達シ我將校下士卒ノ忠誠義勇克ク偉大ノ功勳ヲ奏シタルヲ深く 御感賞アラセラル

右の令旨に對し、東郷司令長官は左の奉答文を奉つたのである。

大元帥陛下ノ洪大ナル 御稜威ニ據リ第三軍ト共ニ旅順ノ敵ニ對スル作戰ノ目的ヲ達シ得タル聯合艦隊ノ與力ニ對シ更ニ優渥ナル 令旨ヲ賜ハリ感激措ク能ハス尙益々奮勵努力以テ 令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス

右謹テ奉答ス。

尙、勅語と同日に賜はりたる皇太子殿下の 令旨は左の如くであつた。

皇太子殿下 令旨

封鎖數月ニ亘リ萬難ヲ排シテ能ク其任務ヲ遂行シ攻圍軍ト協力シテ遂ニ旅順方面敵艦隊ヲ全滅シタル聯合艦隊ノ偉大ナル奏功ヲ嘆尙ス

右の令旨に對する東郷司令長官の奉答文は、左の通りであつた。

大元帥陛下ノ洪大ナル御威徳ニ據リ攻圍軍ト協力シテ旅順ノ敵艦隊ヲ擊滅スルニ至リタル犬馬ノ勞

ニ對シ茲ニ又優渥ナル 令旨ヲ賜ハリ感激ノ至ニ耐エス尙愈々精勵奮勉シテ作戰終局ノ目的ヲ達セ
ンコトヲ期ス
右謹テ奉答ス

第十章 浦鹽艦隊に對する行動

日露開戦後數日を出でずして、浦鹽艦隊は早くも我北海に現はれ、幾くもなくして姿を隠したのであるが、以來北韓方面に露艦出沒の情報數回に及び、二月二十七日の如きは、軍艦四隻元山港前を過ぎ北方に向へりとの報告があり、浦鹽艦隊の出動殆ど疑ふべからざる形勢となつたのである。そこで、大本營に於ては、敵を威壓する爲、我艦隊の一部を浦港方面に出動せしむるを得策なりと考へたので、一方に於ては旅順艦隊に大打撃を與へ、又他の一方に於て、浦鹽艦隊を威壓する目的を以て、之を東郷司令長官に命じ、第三艦隊をも同長官の指揮下に屬せしめたので、東郷司令長官は其意を領し、上村第二艦隊司令長官に命じ、第二戰隊及第三戰隊の笠置、吉野を率ゐる浦港方面に急航し、敵艦隊を撃破若は威嚇し、尙亞米利加灣及「ボシエット」灣附近の沿岸に出沒し、陸上の敵を諸方面に牽制するに努めたる後、朝鮮北西岸の泊地に來るべきを命じたのであつた。

そこで、上村司令長官は、此命令に基き計畫を定め、三月二日朝鮮南西岸を出發し、豫定の航路を

經て六日午前十時浦鹽港外の「アスコッド」島附近に達し、同港の東口に近づかんとしたのであるが、北西の風強吹し、寒氣凜烈にして各艦悉く堅氷に包まれたのであつた、やがて堅氷に鎖されたる海面に突進したのであるが、氷厚くして最早前進も困難を感ずるに至つたので、成るべく薄氷の海面を選び、速力を加減して、航進し豫定の砲撃點に向ひ、午後〇時四十二分笠置、吉野は列を離れ、敵砲臺の彈着距離外に在りて、港口の監視に任じ、其他は單縱陣を作り、一時三十五分より、更に針路を左折してバサルギン岬の東方に達し、更に右折して砲撃位置に就き、同五十三分より間接射撃を開始したのである。

斯くの如くにして砲撃を開始したのであるが、砲彈は「アムール」半島の山嶺を越して市街方面に飛び相當の効果ありと思はしめたのであるが、砲臺は寂として應戦すべき様子を示さず、唯其附近に敵兵の奔走するを見るのみであつた。そこで、我艦隊は、一旋回の後更に前進して陸岸二海里の地點に近づき、愈々猛烈なる砲撃を加へたのであるが、敵は尙應戦の模様なくして二時二十分に至つたので、更に射撃を繼續すること七分の後、砲撃位置を退き、吉野、笠置を合せて南下し、「アスコッド」島附近に達したのである。

此時、東港の方面に煤烟盛に揚り、何となく敵艦隊が行動を起さんとするが如くにも見ゆるのであつたが、會、日没に近づいたので、再び港口に逼るの不利を認め、依然南下の針路を維持したのである

此時、港内の煤烟も自ら消へて出動の様子が無いので、艦隊は同夜浦鹽の沖合に於て便宜の運動を行ひ、翌七日八雲、磐手をして亞米利加灣を、笠置吉野をして「スツレローク」灣を偵察せしめたる後、諸艦を合せ再び浦港の東口に向ひ、正午頃再び之に近づいたのであるが、依然として敵艦を見ざるのみならず、陸上砲臺も亦應戦の形勢を示さぬので、更に進で灣内を一周したる後、歸途に就き「ボシエット」灣の沖合を遊弋し同灣内をも一周したる後、八日城津及新浦の泊地を偵察し、九日元山に入り、即日出港、佐世保軍港を経、十六日第一戦隊と合し、再び旅順方面の行動に参加したのである。

(備考)第二艦隊の浦鹽攻撃に關し、露國側の傳ふる所によれば、二月二十六日(我三月六日)午前「アスコリド」島より敵艦八隻見ゆとの無線電信あり、本日は日曜日にて兵員上陸中なるを以て、直に之を呼び戻し、正午頃には出港の準備既に整ひ、一時頃艦隊投錨せしに、「グロモボイ」流されて「ロシヤ」に接近したる爲、曳船を使用したる等の混雜を生じ、三時頃に至り初めて出港し得るに至れり。此時、敵は砲撃を止め、南西に退却中なりしかば、急速之を追ひ、「リユーリック」には出來得る限りの速力を出すべきを命じ、他の三艦は十六節の速力を以て、約二十海里を進みたりしも時會、日没となりし爲、再び港内に歸還したり。然るに翌日敵艦再び現はれ、「アスコリド」島と「スクリプレツフ」島との間を遊弋し、遂に南に去れり。露艦隊は、十分なる蒸氣を蓄へ、總ての準備既に整頓せしも、遂に出港せずして止めりと云ふ。而して砲撃の結果に就き傳ふる所によれば、彈

丸は主として市の東部及「グニロイ」角及工廠等に落下し、一彈は海兵團の兵舎に落ち水兵四名重傷を負ひ、婦人一名即死し、海軍病院の附近にも落彈あり、爾後市民の本國に避難するもの頗る多しと云々。

以上述ぶる所の如く、第二艦隊は三月初旬を以て浦港方面に出動し、威嚇砲撃を試みたのであるが、大本營にては、更に聯合艦隊の一部を同方面に策動せしむべき内意を示したので、旅順攻撃も「マカロフ」將軍の戦死と、一戦艦一驅逐艦の撃沈とによりて一段落を告げ、露軍の士氣大に沮喪し、暫くは出動の勇氣なからんとの觀察に基き、東郷司令長官は四月十六日第二艦隊の歸著と同時に、上村司令長官に對し、浦鹽方面策動に關する訓令を與へたのである。そこで、上村司令長官は、第二戦隊(出雲、吾妻、春日、常磐、磐手の五隻)第四戦隊(瓜生司令官麾下浪速、高千穂、對馬、新高の四隻)通報艦千早、第一驅逐隊(白雲、霞、朝潮、曉の四隻)特務艦日光丸及運送船金州丸を率ゐて朝鮮北西岸を發し、鎮海灣に於て和泉及第一艇隊(七十三號、七十四號、七十二號、七十五號の四隻)、第十五艇隊(雲雀、鷲の二隻)を合せ、二十二日元山に寄港し、北征の途に就いたのである。

是より先、元山にては、三月上旬頃より以來、露國の騎兵斥候時々鏡城附近に出沒するの風説及情報等、頻々として來り、人心甚しく動搖するので、元山守備隊の協議に應じ、第一艇隊及金州丸を同港に止め、艇隊司令をして同守備隊と協議し、便宜の行動をなさしむることを命じ、四月二十三日を以

て、第二戰隊以下諸隊を率ゐて浦鹽に向ふたのであるが、幾くもなくして驚くべき濃霧に會し、警戒に警戒を加へて航行したのであるが、二十五日朝に至るも、濃霧は依然として前路を塞ぎ、到底目的を達し得べき見込なく、却つて危険の憂あるので、遺憾ながら再舉を圖るに決し、二十六日午後元山港外に近づいたのであるが、先著の第一驅逐隊急航し來り、露艦三隻、前目を以て元山港を襲ひたるを報告するので、上村司令長官は或は機械水雷を港口に沈置せるやも圖られざるを思ひ、諸艦の入港を留め、艦隊全部港外に投錨したのであつた。

是より先、第十一艇隊は陸兵一中隊を載せたる金州丸を護衛し、二十五日朝利源に向ひ出發したのであるが、午前十一時頃、露國水雷艇二隻突然元山に入り、在泊の汽船五洋丸を撃沈し、港外に於て「ロシヤ」「グロモボイ」「リユーリック」の三艦に會し、午後四時頃退去したといふ情報に接したので、上村司令長官は、金州丸及第十一艇隊の搜索を兼ね、露艦隊を追躡せんが爲、急速出航せんとしたのである、然るに、第十一艇隊歸着し、

本艇隊は陸兵を載せたる金州丸を掩護し、二十五日朝本港を出發し、午後二時利源に達し、陸兵は示威の目的を以て暫時上陸し、再び乗船の上、午後六時同泊地を發し、歸途に就きしが、天候の不穩を豫想し、金州丸は單獨元山に向ひ、艇隊は遮湖に入りて假泊し、今歸港せり。

と報告したのであるが、同司令は露艦の出現と金州丸の安否とに關しては、何事をも知らないのでは

つた。そこで上村司令長官は、金州丸搜索の爲即時出港を命じ、尙既得の情報を綜合し、敵は元山を去りたる後直航して浦鹽港に歸りたるものと判断し、二十七日朝、全艦隊を率ゐ、金州丸搜索を兼ね、豫定の行動を實行せんが爲出港したのであるが、港口に於て、第十一艇隊が、敵艦にも遭はず金州丸をも發見し得ずして歸港するに會したので、同艇隊には再び金州丸の搜索を命じ、別に千早をして、新昌灣方面に急航して、同船の有無を確かむべきを命じたのであるが、艦隊航海の途中、第一驅逐隊は海軍銃劍一口、金州丸監督官日誌を載する金州丸の傳馬船と、船具の一部とも思しき木扉等を發見したので、上村司令長官は、同船の運命を察知し、千早に命ずるに尙翌朝迄沖合に留りたる後、「ブルアット」岬に近づき海岸を搜索しつゝ、元山に歸るべきを命じ、自ら第二戰隊以下諸隊を率ゐて浦鹽々外の豫定海面に進み、二十八日より二十九日に至る迄、豫定の如く機械水雷を沈置し、三十日松田灣に入り、千早の報告により、金州丸の露艦隊に撃沈せられたる顛末を知り、五月二日同港出發、朝鮮海峡に歸り、爾後第三艦隊に代り、専ら同海峡の警備に任じたのである。

是より後、第二艦隊の武運良好ならず、六月に至り、浦港艦隊南下し、同十五日對州海峡に現はれ、佐渡丸、常陸丸及和泉丸を攻撃したのであつた。佐渡丸は敵の魚雷を受けしも、幸にして、沈没に至らざりしとはいへ、常陸丸は史上傳ふる如き悲壯なる最後を遂げ、和泉丸は其職員を敵に收容せられたる後撃沈せらるゝ等、悲惨なる運命に會し、第二戰隊以下終日敵を索めて活動の限を盡したるも、

濃霧の爲其目的を果すに由なく、怨を呑んで敵の遁走に委せざるを得ざるに終つたのであつた。

然るに、六月二十三日に至り、旅順艦隊港外に出動し、我聯合艦隊の壓迫を蒙り、再び歸港したのであるが、日を期して浦鹽艦隊と合同するの約束あるものゝ如く察せらるゝので、朝鮮海峽警備の任を有する第二艦隊は、愈々監視を嚴重にし、對馬の南西海上を巡航中であつたのであるが、七月一日午後、艦隊の無線電信に一種の感電があつたが、午後六時三十五分東微北の方向に煤烟を認め、次に浦鹽艦隊の姿を大約二萬二三千米の距離に發見し、同艦隊の將に南方に向ひ東水道を通過せんとするを知つたのである。上村司令長官は之を見、水雷艇に來會を命じつゝ、出來得る丈け速力を増加して之に薄り、且敵を沖の島方向に壓迫して其退路を扼せんと圖つたのであるが、敵は我艦隊を見るや、逸早くも其針路を轉じ、「ロシヤ」「グロモボイ」「リユーリック」の順序を以て遁走したのであつた。

斯くて第二艦隊は、彌々速力を増加して之を追躡したのであるが、午後八時頃に至り、彼我針路の關係上、幸にして一萬二三千乃至四五千米に近づいたのであるが、此時最早日は全く暮れ、海面暗くして敵影を認むること能はず、我が水雷艇隊は、幸にして我艦隊の前路に在り、一意に敵を襲はんとしたのであるが、八時十七分に至り、敵は忽ち砲撃を開始し、次に探海燈を點じたので、第二艦隊は之により敵の所在を知り、闇に乗じ全速力を以て之に薄らんと努めたのであるが、敵は全く探海燈を滅して跡を闇ましたので、第二艦隊も詮方なく之を闇中に失したのである。上村司令長官は遺憾に堪え

ず、敵艦隊の探海燈を照したるは、疑もなく我艇隊襲撃の結果にして、我艇隊にして彼を追躡するものならば、再び探海燈を見るの時機あるべきを思ひ、依然之を追尾したのであるが其後は杳として敵の所在を見ず、二日午前三時三十分神崎燈臺を北西十四海里に見て針路を反轉し、遺憾ながら東水道方面に歸航したのである。

(備考) 此際、我水雷艇は、幸にして敵の先頭を右舷正横二千米に望むの位置に簿り得たるも、敵の三艦より猛烈なる砲撃を受け、且全艦より探海燈の照射を受けたので少しく之を避けたる後、敵の殿艦「リユーリック」の後方を迂回し之を追尾し、時機を見て突撃を加へんとしたのであるが、敵は幾くもなく探海燈を滅し、北東方に逸走したので、尙之に簿り、敵の殿艦を距る二千米に達したのであるが、風波高き爲、豫定の速力を出すに由なく、遺憾ながら、漸次敵と遠かり遂に攻撃の時機を得る能はずして已んだといふことである。

第二艦隊が數々浦鹽艦隊と決戦するの機會を失したるは、浦鹽艦隊に戰意なくして、極力第二艦隊を避けて近づかざると濃霧數々、日本海の西部に起り、殆ど咫尺をも辨ぜざるとによるのは勿論であるが、同海面の濃霧は、風向の關係により、或は北朝鮮の海岸に近く、或は遠く沖合に懸る等の變化ありて一様ではない。さりとして、比較的沖合を航進中、濃霧を避けん爲陸岸に向ふて航進するの危険を冒すが如きは、決して執るべき道ではない、畢竟するに、機運の未だ來らざる關係上、如何とも致し

方がないのである。加之、金州丸、常陸丸を始め佐渡丸、和泉丸等の遭難頻々として簇出するので、事の真相を知らざる國民等、之を以て第二艦隊の失態となし、口を極めて之を誹議するのであった。斯かる状態に置かれたる第二艦隊の乗員等は、燃ゆるが如き怒りを以て、浦鹽艦隊を睨みつゝあつたのであるが、浦鹽艦隊の態度より之を察すれば、如何なる場合に於ても、陷穽を設けて戦を強ゆるにあらざれば、到底彼を撃破すべき機会を得ぬので、彼の目的として考ふるも、強ち勝敗を決するの必要なく、不時日本に近づき、其海上を攪擾するを以て唯一の任務とするのである、而も事を察するに機敏にして、事を行ふに進退共に自由なる浦鹽艦隊は、朝鮮海峡に於ては、第二艦隊の監視を免れ難きを察したるもの、如く、新に其行動を變じ、津輕海峡を経て東海に現はるゝに至つたのである。

第十一章 浦鹽艦隊の太平洋出動

伊東海軍軍令部長は、七月二十日津輕海峡方面より、同日午前三時三十分、浦鹽艦隊三隻同海峡を東方に通過したといふ情報に接したので、同海峡にある我艦艇（海防艦高雄、武藏及第三艦隊三隻、首席將校高雄艦長海軍中佐矢代由徳）には、夜に乘じ再び引返すやも圖られず、全力を盡して嚴重に監視すべしとの命令を傳へ、上村第二艦隊司令長官に對しては、敵若し旅順艦隊に合せんとする場合に於ては、山東高角附近に於て之を扼するの必要を生ずべきを豫告したのであるが、其後の報告によ

り、敵艦隊我本州の東海岸に沿ふて南下しつゝあるを知り、殊に二十三日頃よりは豆總の間を横行しつゝあるものと推斷し、其或は我國の沿岸を脅威して後、旅順艦隊と會合すべき計畫にあらざるやを疑ふたのである。此際（七月二十四日午後一時）第二艦隊は大本營より、

浦鹽艦隊三隻は、尙伊豆沖を徐航し、商船を脅威しつゝあり。貴官は麾下艦隊を適宜引率し、都井埼に至り後命を待つべし。

との命令を受けたので、第二艦隊は急遽出航して九州の西方を南下したのであるが、午後八時頃聯合艦隊より他の命令を受けた。即ち、

貴官は第二艦隊千早及び一等水雷艇二隊を率ゐ、直に出航し、急速渡島、大島、白神埼の西方に直進し、浦鹽艦隊の歸途を遮斷し、極力攻撃せよ、千早は北航の途上、西郷彈崎艦作埼の望樓により通信の連絡を保たしめよ。

第四艦隊及殘餘の水雷艇隊は、對州海峡を嚴重に警戒せしめよ、貴官北航の途上、敵依然西するの徵候あらば、直に對州海峡に引返せ、大湊水雷艇隊には、貴隊に通信連絡する様大本營に依頼し置けり。

といふのであつた、大本營の直接命令は、直に南下して都井埼に來れと言ひ、既に出動して六時間後、聯合艦隊よりは北海道方面に向へといふ命令である。上村司令長官も之には迷はれたのである。

併ながら敵艦が東京灣附近に遊弋する影響は甚大である。加之、當時の情報によれば、多額の金塊を搭載する汽船が米國より來り、方に東京灣に近づきつゝあるのである。斯くの如き場合、特に行動を開始したる後、大本營の命令を顧みず、又眼前に於ける東京附近の不安定をも顧みず、其歸路の萬一を思ひつゝ行動するは宜しからずとの意見により、依然南下のことに決定したのである。此行動中、第二艦隊は、毎日無線電信による情報の不確實に惱まされたのである。情報による敵艦隊の位置が、第二艦隊自身の近傍に當るなどは兎も角、二十六日朝、露艦隊潮岬沖にありとの報に至りては、大に上村司令長官を苦めたのである。日本國としては、大阪神戸を等閑に附し去る譯には行かぬからである。要するに、二十五日朝露艦三隻房州勝浦沖に現はれたりとの情報の後、二十六日には早くも紀州沖に居るといふが如き大膽不敵な舉動をなさんとは、第二艦隊の信じ得ぬ所で、第二艦隊司令部の判斷では、二十五日勝浦沖に現はれたのを最後に、東京灣附近を去つたのであらうといふのであるが、さりとて、中央部よりの情報にて行動するの外由るべき道がないので、是實に上村司令長官の苦痛とする所であつた、そこで已むを得ず、二十九日に至り左の如き意見を提出するに至つたのである。

本隊は豫定の如く行動し、千早は御倉島の南方を迂回偵察し、艇隊は神津島式根島及新島を視察して歸り、共に異状なきを報ぜり。是迄御通知ありたる情報によれば、確に敵影を認めたるは、二十

五日勝浦沖に於けるを最近とするが如し、然るに敵が當方面に現はれてより以來、既に數日間に瀕り、常に同一の区域内を遊弋するは戦時に於ける行動としては信じ難き廉あるのみならず、本隊の是迄の實驗せる所によれば、空電は多く夜間にあり、又羅馬字の如き符號を現はすの例尠からず。昨二十八日午前六時半、燒津に感應ありしとき、本隊は駿河灣外を航行中なりしが、空電の外怪しむべき感應を認めず、又午後〇時三十分頃本隊は正に布良望樓の南西に在りしも、是亦空電を感したるのみ、殊に空電ある場合に於て、無線電信の感應を以て敵の所在を想定するは、實際上困難なるべく、砲聲の如きは從來の經驗により、殆ど信憑し難きを例とし、曖昧なる煤烟の如きも、亦決して敵の存在を確むるに足らざるは、數次實驗する所なり。本隊は二十六日以來殆ど絶えず長短相混せる、空電を感じつゝあるも怪しむべき點なし。此場合に於て、本職の恐るゝ所は、敵は已に北方に去り歸途に就きたるか、或は或目的を以て南西方に航したるかにあり、従つて本隊が永く聯合艦隊と相策應すること能はざる位置にあるは、不安に堪えず、意見申述べ、至急本隊の進退に關し、御指揮ある様取計らはれんことを望む。

大本營幕僚も、今や右に同意したるもの、如く、伊豆七島方面偵察の上、對州海峡に歸るべき命令が發せられたのであるが、旗艦出雲の如きは、佐世保入港の折、僅に五十噸の燃料を残すのみであつた、若し此行動に反し、聯合艦隊の意見の如く、陸奥海峡に於て敵艦隊の歸路を扼したならば、或は

蔚山沖の海戦を待たずして彼を撃破し得たであらうとは、何人も直覺的に思考する所であらうが、若し萬一東京灣外方面に於ても、常陸丸其他の如き遭難があつたとしたならば、如何であらうか、其關係は帝都附近として更に重大であらねばならぬ、之を歸途に要撃するが如きは、敵の行動の左迄に重大ならざる場合に於てのみ考ふべきことである。加之假令聯合艦隊命令の如く北進の途に就くとしても、其後の情報は第二艦隊の北進を許さず、聯合艦隊命令の要領により、敵艦隊西進の報に従ひ中途より引返したであらう。況して露艦隊は、其歸路を宗谷海峡にとるべき豫定であつたが北海道の東方海上に於て、恐るべき濃霧に會し、之が爲め燃料の不足を生じ、三十日に至り、初めて晴天を得、已むを得ず捷路を選んで津輕海峡を経て、浦汐に歸つたのである。

第十二章 蔚山沖の海戦

上村第二艦隊司令長官は、浦鹽艦隊に對し朝鮮海峡の警戒に任じつゝあつたのであるが、八月十日午後敵の水雷艇八隻軍艦一隻威鏡道城津の沖合に現はれたりとの風説を聞き、不時の出航に應し得べき準備を命じたのであつたが、午後五時伊東軍令部長より、旅順の敵艦隊同日朝大舉出港せりとの報を得たので、同司令長官は諸艦をして炭水を満載し航海の準備を整へしめ、又哨戒中に屬する諸艦艇を戒飾し、特更に監視を嚴重ならしめたのであるが、其後連續到達する諸情報により、旅順方面に於て

彼我艦隊の交戦中なるを知つたのである。然るに十一日午前八時四十五分に至り、東郷司令長官より、第一第三艦隊の戦況を報じ來り、第二艦隊は直に黒山島附近に來るべしとの命令を受けたので、上村司令長官は瓜生司令官をして、第四戦隊及水雷艇隊を率ゐて海峡嚴守の任に當らしめ、親ら第二戦隊を率ゐる午前十時四十分尾崎灣を出發し、目的地點に向つて急航したのであるが、途中接手したる電報により、敵艦「アスコリド」及「ノーウキク」は交戦中南航したるものと判定し、午後七時より戦隊を二分し、磐手、常磐には濟州島の南方を索敵したる後黒山島の西方に會すべきを命じ、出雲、吾妻、千早は濟州島の北方を警戒しつゝ、十二日午前六時黒山島の西方に達したのであるが、適「アスコリド」を追躡して旅順方面より南下し來つた第六戦隊に會し、更に戦況を聞き海峡に歸還するに如かずと決心したのであるが、幾くもなく東郷司令長官よりも、海峡に歸つて監視を嚴にすべき命令を受け、且「アスコリド」、「ノーウキク」、「バルラダ」(「ツエサレウイチ」の誤報ならん)及驅逐艦數隻南行したるが如しとの電報を受けたので、上村司令長官は、右南行の諸艦浦鹽に行かんとせば、十二日夜對馬海峡を通過するならんとの推定と、浦鹽艦隊の南下に對する行動をも加味し、急速海峡に歸航し浦鹽艦隊の南下に備へんが爲には、對馬の北方若は北東方に於て彼を待つを得策とするに着眼し、此度こそは陷穽を設けて彼を捉へんと決心し、速力を増加し、十三日天明對馬の東方に達したのであるが、更に東郷司令長官より「アスコリド」、「ノーウキク」等の南行したる敵艦を海峡に邀撃すると同時に、浦

鹽艦隊の出現に注意すべしとの訓令に接し、次に「ノーク」は膠州灣に入りしも、十二日未明出港し、行衛不明なりとの情報に接したので、上村司令長官は猶他の情報を綜合し、「ノーク」は對馬海峡を通過して浦鹽に急航することあるべく、又之を策應せんが爲浦汐艦隊も南下すべしとの判断に基き、第四戦隊の諸艦をして、哨戒の任に當らしめ、特に新高を對州の南方に配し、一等水雷艇には、天明後對州の北方に於て第二戦隊に會すべきを命じたのであつた。而して第二戦隊は、十四日午前一時三十分、濤陵島の北約十海里附近に達し、針路を南西微南に變じて南下したのであるが十四日早朝遂に浦鹽艦隊の南下を發見するに至つたのである。

第二戦隊（出雲、吾妻、常磐、磐手の四隻にし）は、單縦陣にて南航中、午前四時二十五分、左舷艦首に方り遙に火光を認めたのであるが、月もなき闇夜、果して何者なるかの判断に苦しみつゝ、尙進航すること二十餘分にして、朝靄模糊の裡に浦鹽艦隊三隻を發見したのである。此日は南の微風があつて、海上極めて平穩、天氣も亦極めて晴朗であつたが、此時敵も亦單縦陣をなし、旗艦「ロシヤ」を先頭に「グロモボイ」を中央に、「リュウリック」を殿艦とし、南々西と覺しき針路をとつて航進し、五時頃には約六海里に近づいたのであつた。そこで上村司令長官は無線電線を以て「敵見ゆ」の情報に發せしめ、更に信號命令で、戦闘配置に就かしめ、戦隊の速力を戦闘速力に増加し、驀然として敵艦隊に向つて急進せしめたのであつた。

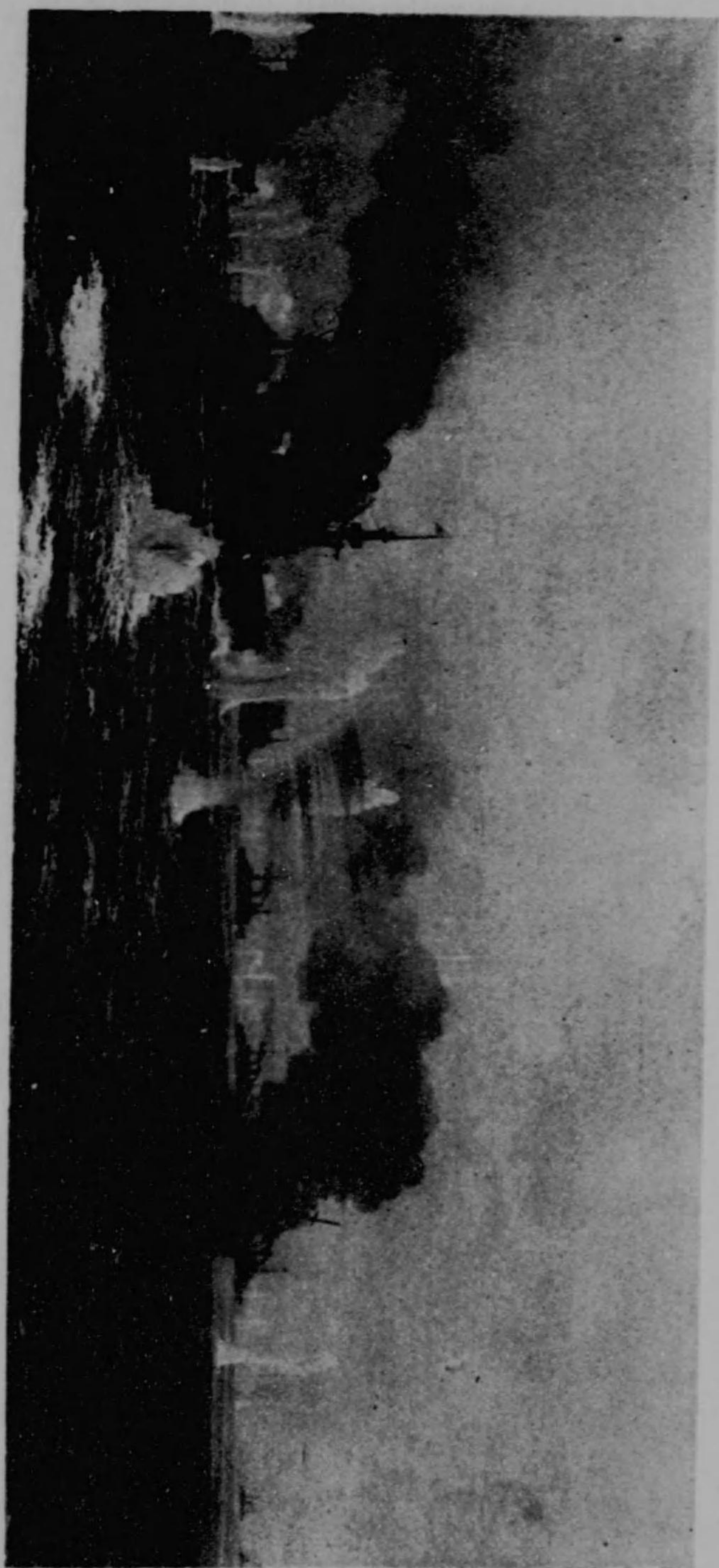
敵艦隊は、數、我近海に出沒して跳梁を恣にしたのであるが、第二艦隊は敵の逃足早きに加へ、常に濃霧の妨害を受け、浦港の距離遠くして、同艦隊の出港に對する監視を嚴にするに由なく、さりとして任務上遠く對州海峡を去ること能はざる等、各種の事情に妨げられたるのみならず、地勢の關係上、午前中に敵を發見するの機會を得難く、従つて闇夜に敵を逸するの已むなき状態であり、重ね重ね不味なる戦運に封じ込められ、艦隊の乗組員悉く切齒して時機の來るのを待ち、齒を噛みしぱりつゝ、世間の惡罵を忍んで居たのであるが、今や眼前指呼の間に敵影を見、歡呼の聲自ら艦内に響き、一同の士氣大に昂り、一撃に敵を粉塵せんとしたのである。

既にして、敵は少しく狼狽の色を顯はし、遂に針路を左折し、逸早くも東方に向つて逃走せんとするので、上村司令長官は之を見て其北航を妨げんが爲、五時十分東南東に變針し、敵を右舷に見つゝ距離の短縮を圖り、同二十三敵の殿艦「リュウリック」に對し、八千四百米の射距離を以て砲火を開いたのであるが、敵も亦直に應戦し、距離の漸く短縮するに従ひ、砲戰愈々猛烈となり、敵の三艦孰れも大なる損害を受け、到底我艦隊の前略を横斷して北走するの望がなく、「ロシヤ」及「グロモボイ」の二艦は、五時五十二分遂に針路を右轉して南方に逃走し、「リュウリック」のみは遙に僚艦に後れて孤立の態勢となつたのである。そこで、第二戦隊は暫く前針路を維持し、日光を背にし、敵を縦射すること數分間に及び、彈丸の艦上艦側に爆發するもの殆ど其數を知らず、三艦同じく火災に罹り、彼

等の運命も今や是迄かと疑ふ斗りの悲惨な状態を顯はしたのであつた。

斯くて、「ロシヤ」及「グロモボイ」は我艦隊の砲撃を避けん爲南方に遁走したのであるが、眼前に「リュエーリック」の窮状を見て之を見捨つること能はず、右方十六點の正面變換を行ひ、「リュエーリック」を救ひ相伴ふて北西方に遁走せんとしたのであるが、第二戦隊は其企圖を察し、其前路を扼して其目的を妨げ、北西微西に變針し、敵を左舷に見之と並航して砲戦を繼續したのである。此時「リュエーリック」は辛うじて他の二艦に合し、再三陣形を整へて應戦せんとしたのであるが、六時三十分頃舵機に故障を起し、獨り右方に回轉して列を離れ、遂に僚艦に隨伴すること能はざる状態に陥つたのである。

此時、第二戦隊は一方「リュエーリック」に致命的砲撃を加へつゝ、「ロシヤ」、「グロモボイ」を追ひ懸けたのであるが、二時四十三分頃、敵の二艦は左方に回轉し、今や殆ど望みなき孤立の状況にある「リュエーリック」に最後の救援を與へんが爲、第二戦隊に近づいて來たので、第二戦隊は前針路のまゝ六千米の射距離で敵を縦射し、之に集彈するの利益を捉へ、其效果も亦著しいものがあつたのである。暫くして上村司令長官は、敵を壓して戦局を全うすべき時機の將に來らんとするを看取し、右方十六點の正面變換を行ひ、針路を南東に定めたのであるが、敵の二隻は七時頃「リュエーリック」の附近に達し、右方に回轉し、三艦正に相重なつたので再び猛烈なる射撃を加へ「リュエーリック」の如き



(被雲田艦軍)

は損害彌々甚しく、到底救ふべき道なきが如くに見えたのである。

是に於て「ロシヤ」及「グロモボイ」の二艦は今や已むを得ずとして決心したるものゝ如く、彌々「リユーリック」を見捨て、北西方に反轉して遁走を企て、第二戦隊も之に應じ左方十六點に正面を變じ、敵と並行の對勢をとり、愈々劇しく砲火を交へたのであるが、敵の二艦は又もや「リユーリック」を救はんと欲するものゝ如く、更に反轉して之に近づかんとし、頗る頑強なる抵抗を試みたのであるが、終に其態度を維持するに由なく、更に反轉して北走の途に就いたのである。さりながら、露將は如何にするも「リユーリック」を見捨るに忍びざるものゝ如く、三度之を救はんとして「リユーリック」に近づいたのであるが、同艦の損害愈々甚しく、火災の煙殆ど艦を没し、到底救ふべからざるの状態に陥り、「ロシヤ」も亦大火災に罹り、一時は「リユーリック」に同じく全艦黒煙に包まれるが如き状態となつたので、終に到底支ふべからざるを知り、七時五十四分頃より彌々北走の途に就いたのである。此時第二艦隊の射撃彌々猛烈となり、「リユーリック」は著しく艦首を擡げ、且少しく左舷に傾斜し、最早沈没の外なく、全然抵抗の力なき状態となつたので、第二戦隊は之を其儘に放置し、北走する他の二艦の追撃に移つたのである。然るに「ロシヤ」及「グロモボイ」の二艦は、今や「リユーリック」の状態を見最後の救を試みんとするものゝ如く、又々針路を轉じて抵抗を試みんとするの勢を示したのであるが、終に我戦隊に射撃められ、倉卒北方に針路を急轉し、彌々僚艦を見捨て逃

走を企てたのであつた。

是より先、相分れて哨戒の任に服しつゝあつた第四戦隊の旗艦浪速は戦場に達し、次に高千穂も亦來會し、七時五十分頃より「リュウリック」に向ふたので、上村司令長官は「リュウリック」を右の二艦の監視に譲り、彌、他の二艦の追撃に移つたのであるが、十時頃に至り、長時の砲戦に旗艦出雲の彈藥僅に四分一を残せりとの報を受け、且敵は一たび猛火に包まれて砲火の著しく衰へたるに關せず、其速力毫も減退の色なきを以て、寧ろ殘餘の彈丸を用ゐて「リュウリック」に最後の「とゞめ」を刺すに如かずとなし、十時四分遂に敵艦隊の追撃を止め、「リュウリック」の所在に向ふたのであるが、十一時五分に至り十時四十二分「リュウリック」沈没の報に接し、次に第四戦隊諸艦の漂流せる露兵の救助に盡力しつゝあるを見たので、上村司令長官は戦隊一般に令して露兵救助の作業に従事せしめたのであつた。斯くて「リュウリック」は沈没し、「ロシヤ」及「グロモボイ」は大損害を受けて遁走し、殆ど再起の方なく、蔚山沖の海戦は茲に終結を告ぐるに至つたのである。蔚山の捷報四方に傳へらるゝや、是迄冷酷なる世評を受けたる反動として、好評嘖々、惡罵を加へたるを悔ひて之を謝するものすらもあつたのであるが、此際第二艦隊司令長官に賜はつた御勅語の如きも、隊員一同の感泣して奉戴したる所であつた。

勅語（八月十五日）

第二艦隊ハ萬難ヲ排シ朝鮮海峽遮斷ノ任ニ當リ遂ニ大ニ浦鹽方面ノ敵艦隊ヲ擊破シ、其一艦ヲ沈メ

偉功ヲ奏セリ

朕深ク將校下士卒ノ勤勞勇武ヲ嘉尙ス汝等益々奮勵シテ前途ノ大成ヲ期セヨ

右の御勅語に對する、上村司令長官の奉答文は左の如くであつた。

本艦隊カ浦鹽方面ノ敵ニ對シ戰捷ヲ得タルハ一ニ大元帥陛下ノ御稜威ニ依ル然ルニ特ニ優渥ナル

勅語ヲ賜ハリ恐惶ニ堪ヘス臣等益々奮勵以テ聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス臣等之承誠惶謹テ奏ス

翌十六日皇后宮大子爵香川敬三は、左の 皇后陛下の 令旨を傳へたのであつた。

皇后陛下令旨

第二艦隊ハ對馬ノ北方ニ於テ浦鹽敵艦三隻ヲ要擊シ、激戰ノ後其一隻を沈滅シタル趣、

皇后陛下ノ懿聞ニ達シ我が將校下士卒ノ忠勇克ク偉功ヲ奉シタルヲ深ク御感賞アラセラル

又同日皇太子殿下よりも左の令旨を賜はつたのである。

皇太子殿下 令旨

堅忍不撓遂ニ浦鹽艦隊ヲ擊破シ其ノ一艦ヲ沈メタル第二艦隊將卒ノ忠勇ヲ欣尙ス。

右御令旨に對し、上村司令長官より奉りたる奉答文は左の如くであつた。

皇后陛下の令旨に對する奉答文

大元帥陛下ノ御稜威ニ依リ對馬北方ニ於テ得タル戰捷ニ對シ優渥ナル 令旨ヲ賜ハリ感激ニ堪ヘス
今後更ニ奮勵以テ 令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス謹テ奉答ス

皇太子殿下の 令旨に對する奉答文

大元帥陛下ノ御稜威ニヨリ浦鹽艦隊ヲ擊破シタル戰捷ニ對シ特ニ優渥ナル 令旨ヲ賜ハリ感激ニ堪
ヘス今後更ニ奮勵以テ 令旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス謹テ奉答ス

此海戦は、全體上左迄注目すべき程の大戦ではなかつた、併ながら此際著者の目撃したる美しき事實は之を捨て去ることが出来ぬ。

第二艦隊の浦鹽艦隊に對する行動に就ては、既に前にも述べたる如く、驚くべく國民の誤解を起し、非常なる不評判となり、新聞紙上聞くに堪へざる冷罵をさへ加へられ、濃霧の爲に敵を逸したりとの報告を冷評し、濃霧にあらざして無能なるべしと評するもあり。其甚しきに至りては、露西亞艦隊に對して餘りに親切なりとの理由の下に、露探艦隊と迄揶揄的に批評されたのであつた。第二艦隊にあつては、幸に隊内に於ける内紛がなかつたのであるが、將校下士卒一同は憤慨極度に達し、彼等露人に戰意なきを罵り、世人の心なきを怒り、其結果、露艦隊に對し一種の惡感情をさへ持つことになつたのである、従つて彌、敵の捕虜を生擒したる今日、果して如何に彼等を取扱ふであらうかが、上村

司令長官の懸念する所であつた。

そこで、上村司令長官は「捕虜を好遇せよ」の信號命令を發したのであるが、吾輩は此命令の果してよく行はるゝや否やに懸念し、捕虜中の負傷者を收容する、旗艦出雲の後部水雷室を見舞ふたのである、さて、下甲板に下れば、無数の下士兵一杯に充塞し通行不可能の状態であつた、吾輩は之を見一大事起れりと直感したので、「待て〜」と叫びながら群集の中に突進的に割り込んだのであるが、其處に居合せたるものは、吾輩の顔を見「佐藤參謀が入らしやつた道を明ける〜」と云ふて通して呉れた、續て水雷室の下り口に達して見ると更に一層の人込みで、室内には一人をも容るべき餘積もない位であつた、吾輩は何事か室内に起りつゝあるを感じ、更に聲を勵まし再び「待て〜」と叫びつゝ群集の人を排しながら、躍進し下士兵の道を讓るに委せて室内の人となつたのである。

其時の狀況は、今日に至るも、判然と吾輩の眼底に残つて居るのである。室の中央には、慘酷に負傷した露兵が横たはつて居る。我水兵等は環列を作つて之を取圍み、手に手に扇を開いて煽、でやつて居るのである。時は八月十四日、所は艦底である。釜中に坐するが如き炎熱さである。而も怨重なる敵に同情し、力を併せて涼風を送るが如きは、如何にも神々しき所作ではなからうか。吾輩は之を見て嬉しさに堪へず、思はずも「嗚呼よいことをして呉れる、よくいたはつて遣れ」と叫んだのであるが、誰とも知らず「此奴等は憎い奴でしたが、かうなつては可哀想です。」と云ふのである。吾輩は實

に涙であつた。我國固有文明の極致が、此一水兵の口によつて完全に説明されたのである。吾輩は嬉しさに堪えず。早速之を上村司令長官に報告し、上村將軍も「是で安心」と言はれて酷く欣ばれたのであつた。

旅順口閉塞隊の事の如きも、戦術上より之を觀察すれば、其成功なるや、失敗なるや、或は又必要なりや、不必要なりや、の議論も決してないではない。吾輩の如きも、敵を閉塞すると敵を外洋に誘出して海戦を試むるとの利害に關し、異論を唱へる爲、聯合艦隊旗艦に行つた位である。當時の吾輩の意見は、間接射撃を以て敵を脅威し、敵をして餘儀なく出戦せしめんとするのであつた。併ながら閉塞其物に對する批判は暫く措き、閉塞隊員の行爲に關しては、決して理論的なる批判を許さぬのである。彼等閉塞隊員の勇敢なる行動、奉公心の強烈なる顯現は、我海軍の後來に對し、果して如何なる訓戒を與へ我軍人の爲に果して如何なる氣焔を吐いたであらうか。而して又我國民の光輝を如何に發揚し、我軍の士氣を振作したであらうか。是等の點に對して考ふれば、旅順閉塞の如きは、一點の非難をも加ふべき餘地がないのである。彼の如き忠勇無雙なる、而して又、右に述べたる我水兵の露國捕虜に對する慈悲迸溢の情味の如きは、相比し、相加へて實に我帝國軍人の特徴にして、千歲に傳ふべき美談であらねばならぬ。

今や右の如くにして浦鹽艦隊は再戦の力を失ひ、旅順方面の敵も亦日に月に其勢力を減じたのである

が、敵ながら天晴なる防戦を續けたる後、明治三十八年一月を以て、旅順城は陥落し旅順艦隊は全滅したのである。此際東來の途中にある波羅的艦隊も、俄に到着の様子なく、我海軍としては此上もない好運であつたのである。即ち此安穩なる時機に於て、艦船に十分なる修理を加へ、缺損を補ひ、更に將士の訓練を努め、所謂満を持して敵を俟つことが出來たのであるが、尙其後半歳にして日露戦争の終結と稱すべき日本海々戦の大勝利を見るに至つたのである。

第十三章 日本海々戦

(露國増遣艦隊と之に對する作戦行動)

露國海軍は、旅順に於ける第一攻撃に多大の損害を受けたるに鑑み、四月三十日更に一艦隊を編制し、之を太平洋第二艦隊と稱し、日夜出發の準備を行ひ、漸次許多の中立國船舶を雇傭し、十月十五日「リバウ」港を抜錨し、東航の途に就かしめたのであるが、其勢力は、戦艦七隻、巡洋艦六隻、及驅逐艦若干隻よりなり、十一月三日二隊に分れ、戦艦二隻、「シツイ、ウエリキイ」及「ナワリン」巡洋艦三隻、「ズウエートラナ」「ジエムチウグ」「アルマーヅ」は司令官少將「フェリケルザム」之を率ゐ、地中海を経「クリート」島に立寄り、驅逐艦八隻と、黒海より來會する數隻の船舶を合せ、艦隊の集合地たる「マダガスカル」島に赴き、戦艦五隻、「クニヤージ、スウオロフ」「インペラトル、

アレクサンドル三世、「ボロチノ」「アリョール」「オスラビヤ」巡洋艦三隻、「アドミラル、ナヒモフ」「ドミトリイ、ドンスコイ」「アウローラ」は司令長官海軍中將「ロジエストウエンスキー」直率の下に喜望峰を迂回し、「マダガスカル」に於て「フェリケルザム」支隊に會すべき豫定であつたのである。我大本營は右の情報に接すると同時に、途中の要所には給炭を配置し、主なる軍艦には無線電信の備あり、且水雷防禦網を有するも、潜水艇は之を有せざるを知り、尙、給炭、給水用の船舶、工作船、水雷母艦、病院船等を同伴し、中立國若は弱國の港灣を利用し、天候の穩かなるに際しては、洋上給炭をなし得べきが故に、其行程は意外に迅速なるべく、「マダガスカル」出發の後には、直に「マリ」群島方面に直航し、其臺灣海峡附近に達するは、蓋し一月上旬なるべしとの判断をなしたのである。而も、第二艦隊が中途より引返すべしとの説の如きは、全然事實上はあるべからざる判断で、露國にして交戦の持續を斷念せざる以上は、飽くまで日本國と海上權を争ふべきは疑を容れずとの判断を維持したのであつた。そこで前にも述べたる如く、我出征艦隊中の諸艦は、交互修理の爲、歸朝の事に決し、各軍港に於ては、最も迅速に修理を終了すべき手筈を整へたのである。

我海軍は右の如くにして露國第二太平洋艦隊の來東に備へて居たのであるが、一月に至るも敵艦隊の東洋に出現すべき形跡なく、旅順も既に陥落し、旅順艦隊は全滅し、浦鹽艦隊も到底出戦の氣力も實力もないので、我海軍は諸準備の完整上、幾分のゆとりを生じたのである。斯くて露艦隊も、十二月

末日頃「マダガスカル」に到着し、後着部隊も一月十四日同島に到着したのであるが、何等東航を急ぐの形跡がなかつたのである。果せる哉、露國に於ては更に尙第三艦隊と稱する一隊が編成せられ、苟も航海に耐え得る露國海軍の現有する、ありとあらゆる艦船を集め、戦艦一隻、「ニコライ二世」巡洋艦一隻、「ウラヂミル、モノマフ」海防艦三隻、「アドミラル、ウシヤコフ」「アドミラル、セニヤウキン」「ゲネラル、アドミラル、アブラクシン」及若干の特務艦船之に屬し、司令官海軍少將「ネボガトフ」之を率ゐ、二月十五日日本國「リバウ」を發し、急速東航の途に就いたのであつた、然るに三月上旬に至り、敵艦隊は召還せられたりとの風説もあり、或は第三艦隊を迎ふる爲「チブーチ」に向ひ出發せりと云ふものあり、或は又「チブーチ」に向へりと聲言し、其實「マレー」の「スンダ」海峡に向へりと云ふものすらあり、其孰れか眞なるやをも決し難く、従つて我作戦の計畫に就ても、其決定に至難を感じたのであるが、三月十八日に至り、同十六日を以て敵艦隊一同「マダガスカル」出發の確報を得たのである。されど、同地出發の時機早きに過ぐるの觀があるので、恐らくは唯單に第三艦隊を迎ふる爲、北航するにあらずやなどの觀察をも生ずるに至つたのである、然るに同三十日に至り、彼は、同十九日南緯九度東經五十三度の附近に於て、北東方に進みつゝあるに遭遇せりとの情報を得たるのみにて、其後全然何の消息もなく、杳として聞ゆるなきの状態となつたのである。加之露國に於ては、「スラーワ」「アレクサンドル二世」の二戦艦と、「バミヤアゾワ」「アドミラル、コロ

「ニロフ」及「アジャ」の三巡洋艦及水雷砲艦三隻と若干の驅逐隊とを以て、第四艦隊の編制を企圖せるやの報あり、此艦隊に屬すべき諸艦は、三月初旬より至急工事に着手し、四月初旬に至り、遠からずして諸準備を終らんとさへ傳へられたのである。

此際滿洲方面に於ては、露國陸軍毎戰敗衄し、三月初旬彼我共に全力を盡して戦ふた奉天の戦の如きも、亦全然彼の敗北に歸したので、今や彼は海上に於ける勢力を回復するの外、到底戦局を纏むべき途なく、敵艦隊の任務は彌々益々重大となつたのである。従つて我艦隊も之に應じて違算なきを期せねばならぬ大責任を自覺し、萬遺漏なき戦備を整へたのであつた。然るに突然にも、四月八日露艦隊「マラッカ」海峡を通過し、第三艦隊も亦同日「マダガスカル」の「シブーチ」を出發したりとの情報に接したので、伊東軍令部長は、同日東郷聯合艦隊司令長官に向ひ、「敵の増遣艦隊の先頭は既に「シンガポール」沖を通過せるを以て、貴官は同艦隊の北上を待ち、之を全滅するの目的を達するに努むべし。」との訓令を傳へたのである。

(備考)「シンガポール」海峡通過の露國艦隊は、四十二隻にして、其艦名は左の如くであつた。
戦艦七隻。

「クニヤージ、スウオロフ」、「インペラートル、アレクサンドル」三世、「ボロヂノ」、「アリョール」、「オスラビヤ」、「シソイウエリキー」、「ナワリン」。

装甲巡洋艦二隻

「アドミラル、ナヒモフ」及「ドミトリー、ドンスコイ」。

巡洋艦六隻

「アウローラ」、「オレーグ」、「スウエートラナ」、「アルマーズ」、「ジエムチューク」、「イズムルト」。

驅逐艦 七隻

大假裝巡洋艦三隻

假裝巡洋艦 四隻

實際に於ては驅逐艦九隻其他二十一隻であつたといふことである。

運送船 十二隻

病院船 一隻

此際蘭領印度其他「シンガポール」附近に於ては、浮説百出殆ど捕捉し難き状況であつたといふことであるが、我大本營は從來の形跡に照し、確信する所あり、作戦の方針を策定したが。尋で露國艦隊は、十一日朝、「プロ、コンドル」附近にあるが如くに察せらるゝので、果して然りとせば、露艦隊は九日中に「アナンバ」島北方に於て急速燃料を補充し、約十海里の速力を以て北進するものと推斷し、十九日頃には朝鮮海峡に達するものとして之を當該指揮官其他に戒告したのであるが、幾くもな